報会
特攻
平成17年5月

第63号

〒105-0001　東京都港区
虎ノ門3-6-8 第6森ビル
財団法人　特攻隊戦没者
慰霊平和祈念協会
電　話　03(3432)1090
ＦＡＸ　03(3432)5567

編集人　田中賢一
発行人　栗原　宏

三月三十日、神社の桜開花宣言の直前、第二十六回のこの行事は遺族五四名、来賓及び会員併せて四九六名参加して、我が心の故郷靖国神社で厳粛盛大に行われた。

献吟　石橋一歌　笛　逢阪竜信

第五十四振武隊　内海京一郎
我が愛機飛燕操りいざ行かん
必中必艦　学鷲魂

第八神雷桜花隊　高野次郎
たらちねの母の教えを守りつつ
敵艦とともに我は散りゆく

祭　文

本日靖国神社々頭において陸海軍特別攻撃隊合同慰霊祭を催行するにあたり、在天特攻烈士のみ霊に申し上げます。

終戦六十年に当たる本年五月に、財団法人大東亜戦争全戦没者慰霊団体協議会が、三笠宮崇仁親王殿下を名誉総裁に戴いて発足することになりました。

皆様方を見送り後に続くと誓いながら、戦後を生きることになった私共でありましたが、今や高齢化に伴って行動力の減退は如何んともなし難くなって参りました。斯かる時にこの様な財団法人が設立されることは、極めて時宜を得たものと誠に心強く感じております。

私共は残された余生を、この協議会の発展に協力することで、次世代への慰霊顕彰と共に、我が国の歴史・伝統・文化の継承をより確かなものとして行わなければなりません。

昨今の世相は、多くの国民が愛国心と民族としての誇りを取り戻しつつあると頼もしく思われる面と、亡国の兆しかと憂慮せざるを得ない社会現象とが混在しております。私共の為すべきことはまだまだ多く、道半ばの感を抱かざるを得ません。諸霊の御期待に添うべく粉骨砕身して参ることをお誓い申し上げます。

珊瑚海海戦二日目の昭和十七年五月八日、空母翔鶴を飛び立った菅野飛曹長、後藤・岸田両一飛曹搭乗の索敵機は、敵艦船を発見してその位置を打電し帰艦の途中、報告を受けて飛び立った六九機の攻撃機と遭遇しました。三勇士は自らが誘導することに勝ることはないと、敢然と機首を回らして編隊を敵艦船上空まで誘導して、自らは燃料が尽きて海没されました。

絶対に生きて帰る見込みの無い征途に出撃された特攻烈士の皆様方と全く同じ決断を下し、自らの命を犠牲にして散華されたのであります。この様な魁となった戦例が重なって、戦局非勢の度を加えた大東亜戦争末期に特攻戦術に擬縮したものと言い得ましょう。

この崇高な精神は、益々混迷の度を加えるであろう国際情勢下に在って、我が国が毅然として独立国家としての誇りと尊厳を維持して生き抜く上で、不可欠なものでありましょう。次世代の国民に理解・納得して貰わねばならないことであると、痛切に考える次第であります。

在天の諸霊、私共を御照覧下され益々御加護を賜りますことを心からお願い申し上げます。

平成十七年三月三十日

財団法人 特攻戦没者慰霊平和祈念協会
会長　山本　卓真

目次

陸海軍特攻合同慰霊祭 …… 1
陸軍記念日に懐う …… 3
海軍記念日に懐う …… 11
秋山真之講演記事 …… 20
聯合艦隊解散の辞 …… 22
日露両軍の挺進隊 …… 23
日露戦争中の御製に拝す大御心 …… 30
「機密日露戦史」より …… 30
陸軍の軍神　橘中佐 …… 33
遼陽会戦における橘大隊 …… 35
特別任務班　横川省三　沖禎介 …… 39
騎兵の遠距離斥候 …… 44
乃木将軍と白襷隊 …… 46
ロシヤ軍内と国内の実情 …… 47
大西中将の遺書について …… 48
終戦六十年に懐う …… 53
特攻になぜ日本の若者は参加したのか …… 54
世田谷観音の慰霊碑紹介 …… 56
満州軍情報部長福島安正少将 …… 58
予科練雄飛会慰霊祭 …… 59
震洋会慰霊祭に参加して …… 59
お知らせ　会員動向等 …… 60

靖国神社に於ける特攻隊員追悼式に臨みて

九段の桜　棚引きて
鎮まる御霊　温かく
なごめ奉るか春の風
心浄まる　神のにわ

御国に嵐　迫るとき
先駆け咲きし　桜花
散て残せし色と香は
世を靖国と護り行く

共に誓いしかの友よ
幽明分かち　六十年
額突く毎に　新なる
おもいを合わす　掌

宮居に鎮まる我が友は
匂うが如き　若き武者
手拍子とりて歌いたる
同期の桜　聞こえくる

かなしき命つみかさね
護りきたりし国なれや
後継ぐ人は如何ならむ
離騒の念の絶ゆるなし

離騒とは楚辞に出ている語句で
憂国と解すればよい

戦没特攻隊員鎮魂歌

天地支うる正大の　気宇鎮まりて神州に
秀嶺仰ぐ富士の峰　万朶棚引く桜花
侵す夷狄の猛けくして　死もて譲らん大八州
神風よぶか敵艦を　屠りしをのこ特攻隊
菊水の旗いくたびか　我が陣頭に翻り
天駆けり行き波潜り　わだつみ揺るがす回天譜
抜山蓋世の勇あるも　時に利あらず騅逝かず
湧きたつ雲は続けども　落日かへす術はなし
悲願空しく国敗れ　残りしものは唯山河
ますらをの歌と絶えたり　祖霊何処に在すらん
後に続くを信ずると　莞爾と征きし友垣の
残せし言葉我が胸に　消ゆることなく六十年
お国の為ということの　絶えて久しき現世（うつしよ）に
我ら思いわずらいて　遊魂如何に鎮めんや
弥生の空に靖国の　宮居に詣でる人々の
額突く姿まごころを　みそなわせあれ祭り神

特攻隊員の像（屋外）

特別攻撃隊
英霊のみこころ

一、祖霊まします大八州
我育くみしこの山河
窺う仇は　許さじと
鉄槌くだす　特攻機

二、我がたらちねよはらからよ
いとしき人よ幼な子よ
すごさせ給え安らけく
我が青春を捧ぐべし

三、ああ悠遠の神代より
敵に踏ませし例しなく
昭和の御代に受継ぎて
歴史をなどか汚すべき

四、人生僅か五十年
その半にも満たずとも
我が人生の　並木路に
しるさむ　強き足跡を

五、七たび生まれ　朝敵を
打ち滅さんと誓いたる
みおやの血潮我が胸に
いま脈々と　滾るあり

六、あす出撃の　命くだり
静かに思う　来し方を
故郷の山や　幼な顔
小鮒釣りしあの小川

七、海より深き父母の恩
報ゆることの寡くて
詫びる心の筆のあと
読まるる姿偲びつつ

八、万朶の桜もののふの
赤き心の　ひと筋は
南の空にあまかけり
いでや散るべし美く

九、我突入の　電波にて
玉と砕けし現し身は
轟音裂くる　敵艦の
戦果聞くべし幽界で

我らが思い

一、花の都の　靖国神社
庭の梢で咲いて会おと
誓いし友は神となり
額突く面は彫り深し

二、九段の桜　棚引きて
明眸皓歯　眉秀いで
我が目底に　蘇えり
呼べば答む笑み湛え

三、英魂ここに　鎮まりて
遺香に副はぬ現し世に
我等が義憤絶えざるも
見まもり給え末ながく

本年は日露の役に戦捷を得てから百年になるので、それに因む記事の特集とする。特攻という名称はなかったが、我々の父祖は今次大戦の特攻に劣らぬ精神をもって戦場に臨み、祖国に安泰をもたらした。

囲炉裏のはたに縄なう父は
過ぎしいくさの手柄を語る
居並ぶ子どもは睡さ忘れて
耳を傾けこぶしを握る

仮初めの平和に酔いしれている現世に、警鐘のよすがとも致したい。

なお日露戦争に関する記事は前号にも二点掲載してあることを申し添える。

奉天会戦百周年にあたり

陸軍記念日に懐う

田中　賢一

小学校のころまだ村に日露戦争歴戦者がいて、三月十日には講話があった。

陸軍記念日を祝う歌

陸軍省新聞班作詞
山田耕作作曲

一、奉天戦の勝ちどきの
聞こゆる今日の記念日は
わが陸軍の誉れぞと
国民（くにたみ）あげて祝うなり
日露の役に誓いたる
挙国一致を偲びつつ

二、東亜の光満蒙に
曜進の鐘なり響き
戦果は稔る過ぎし日の
赤き血潮に築きたる
天業の道揺るぎなく
平和の楽土春深し

三、世界の柱わが日本
同胞すべて九千万
鉄の結びに義は重く
幾たび経ぬる聖戦の
輝く跡を身にしみて
巨（おお）き歩みや日の御旗

今の子供達陸軍記念日はなくても、日露戦争の奉天会戦で大勝を博したことくらいは知ってもらいたいと思う。

奉天会戦の一部始終を簡潔に説いた歌があるので先ずそれを掲げる。

奉天附近会戦

文部省編「凱旋唱歌」
尾上柴舟作詞
岡野貞一作曲

一、三十五万四十万
沙河を中なる我と彼
築き立てたる堡塁は
蜿蜒たりや五十余里

二、百二十日疾く過ぎて
戦機は今や熟したり
一挙長蛇を屠るべく
包囲の策は決したり

三、風がよせ来る大吹雪
咫尺（しせき）もわかぬ春二月
先ず動きしは最右翼
たちまち奪う清河城

四、驚く敵は大軍の
ここに向うと思いけん
予備の部隊を増加して
堅く守るや撫順城

五、わが計なると最左翼
早くも沙河をうち渡り
行軍日々に十数里
奉天近く出でにけり

六、包囲の形整いぬ
時こそ今と中央軍
左右両翼おもむろに
渾河わたりて迫り行く

七、敵は逆襲大夜襲
わが一方を破らんと
焦りたれども進み行く
わが大軍は潮のごと

八、死戦や苦戦乱戦の
数を尽くして争えど
わが突撃の烈しさに
乱れ乱るる敵の陣

九、三道ひとしく破られて
退路危うき敵将は
三月七日退却の
令を脆くも発したり

十、後を慕いてわが軍は
包囲の線を縮めつつ
退路をさえも絶ち切りて
四面一度に追い立つる

十一、三月十日よく記せよ
われ奉天に入りにけり
十有六日よく記せよ
敵鉄嶺を棄てにけり

十二、損害およそ十五万
敵の半ばは尽くしたり
日東男児眉あげて
無比の勝利を世に誇れ

大山元帥

奉天会戦概説

奉天会戦における兵力及び指揮官

満州軍総司令官　元帥　大山　巌
同総参謀長　大将　児玉源太郎

鴨緑江軍

軍司令官　大将　川村　景明
同参謀長　少将　内山小次郎
第十一師団　師団長中将　鮫島　重雄
後備第一師団　同　阪井　重季

第一軍

軍司令官　大将　黒木　為楨
同参謀長　少将　藤井　茂太
近衛師団　師団長中将　浅田　信興
第二師団　同　西島　助義
第十二師団　同　井上　光
後備近衛混成旅団　旅団長少将　梅沢　道治
後備歩兵第五旅団　同　栗飯原常世

第四軍

軍司令官　大将　野津　道貫
同参謀長　少将　上原　勇作
第六師団　師団長中将　大久保春野
第十師団　同　安東　貞美
後備歩兵第三旅団　旅団長少将　大久保利貞
後備歩兵第十旅団　同　大佐　門司和太郎
後備歩兵十一旅団　同　少将　友安　治延
砲兵第一旅団　同　福永宗之助

第二軍

軍司令官　大将　奥　保鞏
同参謀長　少将　大迫　尚道
第三師団　師団長中将　大島　義昌
第四師団　同　塚本　勝嘉
第五師団　同　木越　安綱
第八師団　同　立見　尚文
後備歩兵第八旅団　旅団長大佐　富岡　三造
騎兵第一旅団　同　少将　秋山　好古

第三軍

軍司令官　大将　乃木　希典
軍参謀長　少将　松永　正敏
第一師団　師団長中将　飯田　俊助
第七師団　同　大迫　尚敏
第九師団　同　大島　久直
後備歩兵第十五旅団　旅団長大佐　松居　吉統
騎兵第二旅団　同　少将　田村　久井
砲兵第二旅団　同　永田　亀

総予備隊

後備歩兵第一旅団　旅団長少将　隠岐　重節
後備歩兵第十三旅団　同　大佐　河野　通行
後備歩兵第十四旅団　同　斎藤　徳明
重砲旅団　同　少将　豊島　陽蔵

会戦にあたり右各軍は東からこの順に並列して、包囲の態勢を形成した。鴨緑江軍は韓国内警備の任もあるので当初より大本営直轄となっていたが、奉天会戦については総軍隷下部隊同様に作戦した。

ロシヤ軍の戦闘総員約三十二万に対し我が戦闘総員は二十四万九千八百、これをもって敵を包囲し、世界戦史に例を見ない勝利を得たことは、我が会戦指導の卓越、各軍の勇戦奮闘によることは勿論であるが、敵将クロバトキンの意志薄弱が我に幸いをもたらしたこと大なるものがあった。

以下全般の動きを簡単にのべる。先ず鴨緑江軍が2月22日行動を起し、堅固な陣地に拠る敵を力攻し、清河城を占領しなおも前進した。クロバトキンは、旅順を陥した乃木軍が何処に現われるかを強く気にしていたので、鴨緑江軍の積極的な行動を乃木軍の進出と判断し、有力な予備隊を左翼に差し向けた。そこで我が方は北上しつつあった第三軍を、27日から敵の右翼を包囲するように前進させた。この間第一第四、第二の各軍は、緩徐な砲撃により敵を牽制した。旅順で使った28榴も据付け終り射撃開始し、敵を震駭した。この種重砲を野戦に使用したのは世界で初めてのことである。

総司令官は28日各軍に攻撃任務を与え、3月1日総攻撃を開始した。鴨緑江軍から第二軍までは既に外線の態勢を占めていたので、当面の敵陣を攻撃し、第三軍は西方から敵の背後に迫った。ロシヤ軍の特性として迅速な機動は不得意なるも、陣地に拠る防禦は極めて強靭である。正面攻撃となった各軍は苦戦したが、7日になって第一軍正面の敵に退却の兆候が見えたので、総司令官は第一軍、第四軍には鉄嶺に向う追撃の準備を命じた。

第三軍は各所の敵を排除し奉天の北に迫る勢いだったので、退路遮断されることを虞れたクロバトキンは、7日鉄嶺に向う退却命令を出している。第二軍の部隊は10日午後3時奉天に突入し、城門に日章旗を掲げた。我が軍は包囲の態勢を取り得て、追撃を部署したものの、戦力枯渇し就中弾薬不足し敵を殲滅するに至らなかった。

我が死傷七万二十八、鹵獲の主なもの軍旗三旒、砲四八門、捕虜二万二千敵の死傷約九万だった。

3月15日　奉天に入城する大山元帥

以上で奉天会戦の概説を終るが戦闘の実相を認識する為多門二郎の「余ノ参加シタル日露戦役」の奉天会戦の一部を紹介する。多門二郎は陸士十一期、明治三十三年任官、仙台の歩兵第四聯隊付、日露戦争には小隊長で従軍、弓張嶺の夜襲で負傷し入院、傷癒えて原隊復帰、沙河会戦の時は大隊副官、大尉に昇進し、奉天会戦の時は聯隊副官、その後旅団副官となり凱旋。

帰還後陸大に入り卒業して士官学校教官を勤めたが、その時後進の参考になればと、戦争中のメモを整理し書き加え本書を作ったと著者は申しておられる。

なお多門将軍は昭和5年第二師団長になられ、満州駐屯中に満州事変勃発し、満州全土に転戦された。8年帰還8月待命、翌9年2月病没、五十五才。

出征時の筆者

「日露戦争日記」抜

三月一日　晴。昨夜の八時頃から、王富嶺勾口の旅団司令部に命令受領に行った。無論まだ夕食前であるから空腹で堪らぬ。旅団副官から重焼「パン」を二、三枚貰って飢を凌ぐ。十二時頃になって、明日もまた現在の姿勢にあるべき命令を受けて、陳家街の聯隊本部に帰って来た。聯隊長も旗手も伝令も馬卒も、皆小さな家の床でも土間でも這入れるだけはギッシリ詰って、グッスリ寝込んでおった。僕は聯隊長に対して命令を読み、各大隊に与える聯隊命令を大隊副官に伝えた。大隊副官も僕が旅団司令部で待つが如く、旗手少尉の側らに横臥して待っておった。従卒の太田が一人起き出て甲斐がいしく、温い飯で牛罐を火にかけて出した。喜んでソコソコに食い終るや、毛布一枚被って横になった。

電話口

二十四日に出発してから、今夜でもはや五日である。毎夜碌々睡らず、毎日嶮岨な山を上ったり下ったりするので非常に疲労している。今夜は温突は温まっているし、明日は現姿勢であるから大に睡られると喜んだのも僅に五分間であった。電話手が「副官殿」と呼びに来た。今旅団副官から、大急ぎで電話口へ出てくれとのことであるという。電話口といえば近いようだが、今夜の聯隊本部の家から三百米もへだたっている陳家街の部落に通信所を開いてある。これからそこ迄また出かけねばならぬ。時計を見ると一時に近い、僕は副官の辛いことを今夜程痛切に感じたことはない。「太田、小隊長の方がこんな時にはよいなあ」と泣言を言いながら、従卒の随行しようというのを断って、唯一人テクテク走った。

夜半の攻撃命令

電話口へ行くと、旅団副官は待ち兼ねておった。「モシモシ多門ですよ」と言い終らぬに「大変遅かったねえ」と不満らしい口調で前置きしながら、命令を伝えられた。その要旨は「師団は今一日王宮嶺北方一帯の高地を占領したる後、車頭嶺付近の敵を攻撃する筈。左翼隊は本日未明紅土嶺の敵を攻撃す。そこで僕の聯隊には四時出発して紅土嶺を攻撃せよ」というのである。後備某隊も左翼隊長の隷下にあって、攻撃するという。既にこの後備隊は昨夜から、陳家街北方の高地を占領している。即ち僕の聯隊は、その掩護によって後方に露営している訳だ。

攻撃着手前敵の夜襲

今未明といってはもはや間がないから、僕は電話で復唱するや否や、駈歩で聯隊本部へ戻って、大急ぎで各大隊へ聯隊命令を送る。出発準備に取りかかる。中々忙わしくて遂に横臥する間もなく、集合場の陳家街に午前三時三十分頃に行った。大隊はまだ集合し終らぬ。暫らくすると前方に激烈なる銃声が聞える、今頃何事か知らん敵が反対に攻勢を取って来たのかと思っていると、銃声は余り大部隊のものではないらしい。集合した大隊は何時でも運動の出来るように銃を手にし、銃剣を付して準備した。十分間ばかりで前方の銃声は止んだ。後備隊の占領地前に敵の一部隊が来襲して来たことが分った。暫くすると左翼隊長たる旅団長が来られた。後備某聯隊長加木大佐も来られた。加木大佐は旅団長に向って「先程の銃声が敵の一部の来襲であること、これに応ずるために一時混雑したから、所命の時間に出発がむずかしかろう」とのことなどを報告した。旅団長は、加木隊も僕の聯隊も出発は午前五時と規定せられた。夜間の運動であるから、両隊の時間が合一しないと同士討をしたり、また敵に対して共同の動作が出来ないので、特に時間を整一にせられたのであろう。とかく夜間には、わが思う通りの時間に出発が出来ない事は、この通りである。今日の如き敵の折悪しき来襲のため、わが運動開始の時間を遅らせるの己むを得ざるに至った。これを見ても防者となった時、予め攻撃者が未明頃、夜襲を企てることを察知するか、もしくはこれを推察して、その攻撃を妨害せんがために、一部を陣地前に派遣して、敵方に向って襲撃せしめたならば、随分攻者を混雑せしむることが出来よう。一旦大混雑をしたならば、その日の攻撃は中止となるか、もしくは時間が少い時は天明となって、敵前に大失態を曝すであろう。それ故、敵陣地前の運動は十分の慎重を要すると思う。

僕の聯隊は、本日の攻撃には聯隊長の指揮下に第三、第四中隊、第二大隊、第三大隊（第九、第十二中隊欠）の兵力を有する。その他は、他の方面に使用されておった。そこで聯隊長は、第二大隊をして東方より堡塁に向って西面して、第三大隊（二中隊欠）をして、第十六号堡塁の北麓から北面して攻撃せしめ、他の二中隊をまず予備隊として第二大隊に続行せしめた。後備聯隊は、わが聯隊の右につらなって、第十八号堡塁に向って攻撃する。しかして工兵一小隊も聯隊に属した。聯隊長はこれを第二大隊方面に使用することとして、第二大隊の前方に進ましめた。

午前五時、陳家街を出発した。僕は聯隊長と共に予備隊の先頭で、第二大隊の後方に続行した。第三大隊は左に折れて道路なき谷地に進んだ。僕等の進路はほとんど一列側面縦隊で進む。時間が遅れたので大に気が揉めるが、ガタガタ騒ぐと敵に察知せられるから静粛に進んだ。途中無事に第二大隊は敵前約三百米の高地迄進んで、第六、第八中隊を突撃部隊として前進せしめ、第五、第七中隊を射撃部隊として、この高地を占領せしめた。この高地は二中隊全部散開するだけの地域がない。この高地から右後に八十米ばかり退って一の稜がある。聯隊長はこの稜に第三中隊を散開せしめて、射撃部隊の威力を増加せしめ、その稜の後方に第四中隊を予備隊とした。聯隊長は初めこの稜線の左の丸い少し高い所におって、一般の指揮を取られた。まだ夜が明けない中に、これだけの配置を取って、第二大隊の突撃部隊と共に、工兵の矢作小隊が進んで敵の副防御を破壊する計画であった。

天明聯隊長散兵線に進む

夜が明けない中に、副防御を破壊する計画であったが、時間が遅れて思うようにならぬ。敵は発見してわが工兵に向って射撃を開始した。白々と天明になったので、第二大隊は射撃を開始した。聯隊長は僕に向って「第一線に行って見よう」と言われた。僕は内心まだ早過ぎはせぬかと思ったが、既に一昨日王富嶺の攻撃にも、聯隊長が第一線の後方に予備隊をもって続行しようというのを止めたので、今日はまた止める訳にも行かぬ。それで「ハイ」と答えて、従卒を随えて、稜線を伝わり第二大隊長の位置に行った。第二大隊長は自ら散兵線に突っ立って指揮しておった。聯隊長を見るや「まだ副防御の破壊が出来ませんで……今盛んにやっています」と報告した。僕は好奇心といおうか何といおうか散兵線の中へ「ソゥッ」と割り込んで前方を見た。敵の陣地は、わが散兵線よりも余程高い高地で、敵兵壕が二段に鉢巻式に取り巻いてある。敵が「ズラッ」と敵兵壕から頭を出して射撃している。「ロス」の冬期被る真黒な頭巾のような帽子に、茶色外套であるから、実に一見して獰猛な風で、如何にも強そうに見える。この敵の散兵壕前三、四十米の所には一帯の副防御がある、鹿柴もあり鉄条網もある。わが工兵が眼下に小さく副防御の縁りにピタリと喰っ付いている。頗る乱雑であるが、逐次に前進しつつあるので、既に先頭のものは若干鹿砦の中に這入り込んでいる。わが突撃部隊は、この工兵の向って右手の方で斜面にピッタリ付いて固（かた）まっている。これは全く動かないで「カーキー」色の一団に見えるばかりだ。夜が明けて今なおこの形況では、実に今後を悲観せざるを得なんだ。僕はこの景況を見ると、直ぐ心中悲観を感じた。しかし王富嶺でさえ、やはり取ったのであるから、どうにかなるだろうとも思い返した。これ迄見て、僕は後へ退った。聯隊長は「第三大隊は、まだ見えぬか」と大に心配しておられる。なる程第三大隊方面が、今敵の右側（といっても鉢巻式であるから、どれが右側か分らぬが、まず目下の主攻撃に対して右側となる）に現われれば大に都合がいい。そこで散兵線の位置で最も高い所へ登ろうとすると、大隊副官の黒井中尉が僕に「そこは一番たくさん弾丸が来ていけません」と注意してくれた。山地では最も高い位置は敵が最も注意するので、如何しても射弾が集中する。「ああ、そうか」と僕は苦笑いしながら「聯隊長殿、こちらが宜しう御座います」と言って、左の方へ誘導した。左の方は段々下りで十米ばかり来て止まった。そこで僕は、聯隊本部用の精良な望遠鏡で第三大隊の方面を見た。暫らく見ていると、わが兵が斜面にチョロチョロ現われて来た。僕は聯隊長に「ああ、見えました、あそこに……」と叫んだ。聯隊長は非常に喜んで「そうか、どこか」という。僕はその方向を手で示したが、聯隊長は自分の望遠鏡では分らぬと思われたか「どれ、その眼鏡を借せ」と言いながら、僕から望遠鏡を取られた。今立っている所は無論散兵線の直ぐ後方で、兵は盛に射撃をしている。距離が近いので散兵線で少しでも目標を高くすると、直ぐ狙撃せられる。僕等も初めは大に注意しておったが、余り第三大隊の方を見付けるのに気を取られて、しらずしらず散兵線上に立った。聯隊長が僕の渡す望遠鏡を取って眼に付けらるるや間もなく「あっ」といって望遠鏡を落された。「おやっ」と思って振り向くと、従卒の太田が仰向けに倒れている。見ると聯隊長は、その従卒が介抱して後へ退（さが）られる。聯隊長の生命は大丈夫だろうと思って、僕はとりあえず、従卒の傍へ行った。「太田、緊っかりせ、大丈夫だ」と言いながら顔を見ると、哀れや見る間に真蒼になって来る。負傷は腹らしいので、早く繃帯をしてやろうと思うが、まず外套を取り、毛皮の胴衣、弾薬盒、上衣、チョッキ、シャツという順序にたくさん着込んでいるので、思うように早くはならぬ。聯隊本部の伝令は後ろに残して来たから、僕一人である。すると散兵線から四、五米ばかり後方斜面におった援隊から、一名の下士が来て親切に世話してくれた。僕は「や、有り難う」と言いながら創口を検べると、腹ではあるが余程上の方で、胃ではないかと思った。出口は背の真中である。血は少しニジンダだけでドクドク出ないから、繃帯は造

作なく出来た。ところがこの地は散兵線の直ぐ後で、弾丸が来て危険で堪らぬから、僕は従卒を抱えて二、三米退がった。従卒は到底もう駄目だと諦めたのであろう。僕に向って力のない小さな声で「大尉殿、永い間御世話になりました。これで御別れです」という。僕は「何にっ、貴様の傷は腹でもズット上の方だ。下腹なら危ないが、上なら大丈夫だ。安心せ。今担架を呼ぶから」と言うと、彼は「ハー」とまた小さい声で言って「ウーン」と苦しさを忍んでいる。この時僕の後ろで「グゥーン」と地響がして近所の土が一度に立ち登った、と思う瞬間に、僕は後方にわれ知らず倒れた。気が遠くなったようで「ジーン」と耳鳴りがした。一瞬時の気絶であろう。どうしたのかと思って起き上った。従卒を見ると、しきりに自分で顔にかかっている土を払っている。後方の散兵線は今の騒ぎで、兵がその位地を飛び去って斜面に下ったらしい。それで第二大隊長と副官とが、僕の横の方で大きな声で叱咤して、もとの線に呼び返している。「援隊も前へ」と叫ぶ声がする。僕の横には第七中隊長の片谷大尉が膝姿の儘、軍刀を手にして俯向いておった。ヒョイと見ると、顔から顳（こめかみ）にかけて血が流れて、頬を伝って腮からポタリポタリ落ちる。その両側には俯向もしくは仰向きに七、八名が倒れておった。片谷大尉は僕の同期生である。口数を聞かぬ柔順な人であるが、中々人の真似の出来ないことをする勇者である。曽て営内居住をしておったとき、真夜中に当時の片谷少尉が便所に行った、すると兵が一人便所の梁に首を吊って、冷たくなっておった。片谷少尉は、これを見るや唯一人で、その兵を下ろして、中隊の一室に抱えて来たことがある。僕などは中々そんな沈着した大胆なことは出来ぬ。真夜中に縊死者を見ては「キャーッ」と叫ばない位が余程の出来なんだ。そういう大胆な風で、しかも衆人の前では出しゃ張らない人であるが、戦さは勿論強い。この片谷大尉を見て僕は「オイ、片谷」と二、三回呼んだがもはや返事がなかった。従卒か誰か一人の兵が傍へ来たから「早く介抱せよ」と注意して、再び太田の方へ顔を向けた。太田は僕に向って「どうもしませんか」と聞く。「ああ、大丈夫！砲弾だ、味方のらしい」と言いながら「苦しいか、我慢せ、今担架を呼ぶから」といっている所へ、聯隊本部の伝令が一人走って来た。「太田君、負傷したか？緊かりし給え」と言いながら僕に「今、谷津君は聯隊長殿に付いて山の下へ行きました。聯隊長殿は腕です」と報告する。僕は「そうか、貴様御苦労だがね、担架を探して来て、太田を早く繃帯処へ送ってくれ」と命じた。暫らくして衛生隊の担架卒は従卒を載せて去った。僕は担架卒に「これは俺の従卒だから」といって、呉々も大事に繃帯処へ運ぶことを依頼した。従卒は担架に載せられる頃はもはや人事不省で、僕の「大事にせよ」という語に対して何事の答もなかった。僕は、太田はこれで死ぬのであろうと思って、覚えず眼をうるませた。

僕の従卒太田は、僕が二度目に新兵掛で、三十五年兵を仕込んだ時の新兵で、今は三年兵である。新兵時代から正直で、何時も嫣々として従順な可愛らしい兵であった。二年兵になるや否や、僕の従卒となった。出征前に一旦僕が戦さに行かれなくなったとき、非常に落胆したが、やがてまた小隊長となったので、彼は大喜びであった。遼陽戦で弓張嶺の夜襲では、彼は自己の身命を擲って、僕を敵中より救い出してくれた。これから僕は、真に生命の親と迄、彼を思って心中切に感謝の意を表した。僕が大隊副官となって、他の大隊におったのは僅に一か月余で、後すぐに聯隊副官となったために、彼はまた聯隊本部に移って、僕の従卒となった。新兵時代から仕込んで、従卒としてかくの如く永く共に戦場にいるのみならず、彼の僕に対する忠実なる行為に対しては、大に感謝し且つ深く愛しておった。しかるに、今日この場所において僕の左後ろに立っておって重傷を蒙った。ここにまた奇妙なのは、彼の負傷するや直ちに二、三米後方に退がった。間もなく例の大騒ぎで、片谷大尉以下七、八名の死傷が僕の傍で生じた。これは味方の榴弾が誤って、わが散兵線に落下したらしかった。その落ちた所が、丁度僕等が以前に立っておった所であった。太田が負傷したために、僕は彼を連れて退がったそのあとへ落下したので、危くも僕は即死を免れた。太田は自ら負傷して、僕を死地から脱せしめたのも同然である。僕は従卒との関係の飽く迄奇縁であることに驚いた。これと同時に、僕は弾丸の当るとか当らぬとかいうことは、真に天運であることを深く感じた。今日のこの場合の如きは、僕は僅のことで死を免れておった。将来弾丸の命中については、全然天運と諦めることに覚悟して、人並みの働きが出来ることを心に期した。聯隊長の負傷、従卒の負傷でやや度を失った僕は、従卒の始末を付けた後、第二大隊長のもとへ行った。同大隊長が聯隊長代理たるべきである。しかし今や同大隊を二分して、自ら敵兵線に立って指揮しているので、特に大隊長代理を作ることも、何も目下はなし得ない。そこで差当り聯隊長兼大隊長で、依然として第一線に立っておった。

この頃には、わが砲弾が盛んに敵の散兵壕に落ちる。主（おも）に榴弾で、僕等の位置からは敵陣地迄の距離が三百米ばかりであるから、実によくその落達の景況が見える。砲兵の射撃が頗る旨いので、散兵壕の真中へ落ちる。余程外れても副防禦と散兵壕との中間である。それがために、眼前に僕等は大地雷を見ているようで、如何にも壮観であった。これに反して、敵の砲弾は少しもわが散兵線には来ないので、一層気持がよい。敵はわが砲撃の猛烈なのと、その命中の精確なのとで皆頭を引込める。それがため、わが工兵は作業進捗に大に力を得て、鉄条網や鹿柴の中へ喰い込んで突撃路を開く。これを見て敵は射撃する。そうすると、わが射撃部隊が直に急射撃を浴びせる。こ

んな工合で、わが砲撃と小銃火とのために敵は大に苦しめられている間に、工兵はほぼ三、四列で突入し得る突撃路を穿開し得た。これを見て、大隊長は突撃部隊に伝令を走らして突撃を命じた。しかし伝令は帰って復命しない、また突撃部隊も突撃せぬ。突撃部隊のいる場所からはよく敵状が見えぬのであろう。大隊長は二度伝令を走らした。しかしまだ突撃せぬ。伝令も帰って来ない。第三回目に発した。この度は伝令が達したのであろう。突撃部隊は前進を始めた。これ迄の間は余程の時間である。砲撃が七時二十分頃から始まって、突撃部隊が前進を始めたのは八時頃であった。この間には露軍も苦しかったろうが味方も損害が中々多い。僕が見ていると、ある小隊長は勇敢に兵を指揮しておったが、何か言いかけて後ろに倒れた、眉間に一発で即死であった。またある小隊長は何か言って兵を叱り飛ばして側へ寄ったとき、前へ俯向いた儘立たない、見ると胸を貫通されておった。兵の負傷者や即死者は防界線であるから、その傷は多く胸から上である。しかして射撃する地域が狭いので、死者の如きは散兵線より引きずり出して、援隊の兵が一名そこに這入り込んで補充する。負傷者でも手当よりは、まずその位置を去らしめて、一名と雖も散兵線の銃数を減ぜしめぬことに努力する、残酷なようであるが己むを得ぬ。ここ等が将校の戦線において最も働くべき所である。僕は一度聯隊長代理の命令で、後方八十米ばかりの聯隊予備の位置へ行って、予備の中隊長に第一線の増加の旨を伝えた。この間の地域は第十八号堡塁の方から敵弾が盛に来るので、稜を伝わりながらなるべく腰を曲げて隠れて通る。この危険な所を衛生隊の担架卒が思い切って戦線に走って来る。実に衛生隊も、これ迄働けば遺憾なしと僕は思った。唯気の毒であったのは、聯隊予備の位置に僕が到着したとき、向から来た担架は最も高い所を一直線に来たので、僕の左前でバッタリ前の一人が倒れた。右の顳顬（こめかみ）から左に抜けたので、口から血を吹き出して、非常に苦んで手をもがく。後ろの担架卒は、ほとんど途方に暮れておった。僕は見兼ねて、伝令に手伝わせて後ろへ引き下ろしたが、この時はもはや死んでいた。

突撃、敵陣地占領

八時頃に、愈々突撃部隊が副防御の突撃路を突進するときは、散兵線では将校も下士卒も皆「突込め」と呶鳴って声援を与える。が銃声と和して騒しいのみで、よくは聞き分けられぬ。この頃には敵は到底わが銃砲火に堪えないで、漸次に姿が見えなくなった。恐らく退却したのであろう。突撃部隊は苦もなく敵陣地に飛び込んだ。最先頭のものは見る間に頂上に登って敵方に向って立射を始めた。追撃射撃をしているのである。これは一昨日も王富嶺の占領の時、同様な景況であった。

突撃部隊の突入を見るや、大隊長は射撃部隊を卒いて直ちに敵陣地に進んで、その占領を確実にした。この頃第三大隊方面もまた当面の敵を撃退して、第二大隊と連絡した。僕等が敵の散兵壕に入った頃には、例によって露軍の砲弾が、この高地に向って落下し始めた。退却のために、味方を収容しようとして砲兵を配置していたのであるまいかと、疑われる程旨く命中する。そのくせ僕等の攻撃中は一発も射撃せぬ、恐らく射撃が出来ない陣地にあったのであろう。しかして占領されてから盛んに射撃を始めるとは、随分拙い砲兵の使用法である。王富嶺の攻撃の時もまた、このようであった。何時の遣り方でも、露軍は陣地を占領されてから後の仕事迄も計画しているのではあるまいか。一六勝負で、勝つために全力を注ぐことをなさぬようであると思われる。とにかく僕等は敵の砲弾のために、皆露軍散兵壕内や、その付近の斜面にピッタリくっ付いて敵弾を避ける工夫をした。

珍妙なる腰掛

僕は報告を認めるために坐する場所がないので、仕方がないから「ロス」の死骸に腰をかけた。壕の中は、わが兵で一杯で、また露兵の死屍もたくさんあったから已むを得ぬ。ブラブラして腰の落着きが悪い。死人の腰掛は、いいものでない。報告が終ったから、砲弾の隙きを伺って、南の方へ廻って頂上に出て敵方を視察した。何処から来るか小銃弾がシュッシュと耳を掠めるので、甚だ工合が悪い。第十八号堡塁の方に露兵で退却して行くのや、また同堡塁らしいのが見えるが、よく分らぬ。その外は敵の砲兵陣地の如きも一切不明である。僕が視察しているうちに、右の方三米ばかりに一名の兵が伏姿をしておった。展望哨である。この展望哨の交代のために、上等兵が一名の兵を連れて上がって来た。しきりに下番者を呼ぶが返事せぬ、上等兵等が葡匐して、その兵に近づいて見ると、この展望哨は何時の間にか頭部を貫通されて伏したまま即死しておった。「仕方がないから、その儘置け。上番のものはもっと後とへ下がっておれ」と僕は横から注意して、愈々気味が悪くなったから、ソコソコにここを去った。

模範的攻撃

この紅土嶺の攻撃は、わが砲兵の力と、工兵の勇敢とに挨つ所が至大である。砲兵の射撃の正確で、猛烈なるために全く敵を威圧した。また工兵はわが砲撃前から既に敵の猛火の下で、副防御破壊に従事した。これがためにその死傷が頗る多かった。突撃のための縦隊路に倒れているのは皆工兵であった。かくの如く、敵の角面堡に対して歩、砲、工の三兵種が、各々その特性を遺憾なく発揮して、遂にこれを奪取し得たのは、模範的の攻撃ではあるまいかと、僕は大に力まざるを得ぬ。

さて、この高地を奪取した後、敵の砲撃を受け、更に前進せんとするも全く敵の眼下で運動せねばならぬので、聯隊は終日この敵陣地におった。僕は昼間職務上三、四回後方に行った。旅団長のもとへ行ったつ

いでに陳家街の仮繃帯処に、負傷せる聯隊長を見舞った。聯隊長は成功を喜んでおられたが、更に僕に向って「この負傷のために、決して後送はせられぬ積りであるから、聯隊長の職を空にすることは僅かの日数と思う。この旨をよく旅団長閣下に申上げよ」とくれぐれも言われた。思うに聯隊長は、医官が何といっても復隊して、聯隊を指揮する決心であるらしい。僕は、その意志の鞏固であるのは敬服したが、果してそんな無理なことが出来ようかと懸念した。しかし僕とても他の聯隊長よりも気心の分っている上官を欲する。僕は医官に内々「聯隊長の負傷はどうか」と聞いた。医官は「後送であろう」と答えた。僕は別を聯隊長に告げて、従卒の太田を尋ねたが、既に繃帯処に後送せられたと聞いて残念ながら戻った。

戦後の悲惨

今夜は紅土嶺南方谷地に露営した。家も何もない。僕は従来聯隊本部におったので、露営といっても、家の中だけには入ったが、今夜は全然露営で、実に寒かった。衛生隊は、終夜負傷者の収集に勉めておった。担架卒が僕等の露営している前を通りながら、伝令と話すのを聞くと、ほとんど疲労して、足が動かぬ位であるといいおった。山を攀登し谷間に下りつつ、負傷者を探して後方の繃帯処迄運ぶ。戦線が広いので、この地から繃帯処迄、平地のみの距離でも三粁余あるであろう。一回の往復すら一里半余である。人数が少ないのと、この距離のために時間を費すのとで、収容が非常に緩慢で、夜に至っても負傷者がなお坤吟している声が聞える。朝の八時前に負傷して、夜迄収容せられぬとは随分可哀想である。後で聞けば、この夜中収容せられずして、翌二日の午後初めて担架に迎えられたものもあったという。実際地形の困難、戦面の広大、随って繃帯処の位置が遠いために、已むを得ぬのである。地形の困難というも、唯傷者を運搬するために困難なのでなく、これを探すためにも頗る困難するのである。負傷者は山地戦であるから、一寸見付け難い所で負傷したり、また山腹で負傷しても苦しさに匐い廻わって、段々に谷間に落ち込むものもある。本日の正午頃も、露軍が盛に十七号堡塁の東南方の稜線を射撃する。その真最中に眼に負傷したのか、または頭に負傷したのか分らぬが、顔面血だらけになった兵が、この稜線をあてもなく這い廻っておった。苦しさに人の助けを求めるがためであろう、何とも言えぬ悲劇であるが、砲撃が盛なのと、一人でも出れば益々多く射撃するので、暫らく様子を見ていると、哀れその兵は斜面の方へ這って行たかと思うと、ズルズルッと顚がり落ちて見えなくなった。こういう所を見ては、今更「戦争は悲惨なものだ」と心中に絶叫せざるを得なんだ。一昨日、王富嶺の攻撃においては、負傷者がその位置を保つことが出来ないで顚げ落ちて、これがために樹木などに衝突して即死したという話をも聞いた。山地がいわゆる懸崖の如くであるから、負傷して力を失うと共に、その斜面上に重心を保つことが出来ぬのである。負傷者と衛生隊との関係や、衛生隊の勤務の模様など、随分種々の珍談悲話ともいうべきものがあるであろう。

高台嶺付近の攻撃

二日　晴。本日も、昨日来の攻撃運動を続行すべき命令である。昨日の命令は、師団は前面高台嶺一帯の敵陣地を攻陥したる後、左に大旋回して重頭嶺方面の敵の左側に向って攻撃せんとするのである。頗る壮快なる計画であるから、まず前面の敵を速に撃攘せねばならぬ。それで聯隊は無論昨日来の攻撃運動の続行で第十八、十九号堡塁に向って攻撃するのであった。ところが実際をいうと、どれが第十八号で、どれが第十九号か判然と分らぬ。前方は少しも偵察が出来ておらぬ、が、とにかく攻撃前進のためには、今となっては偵察したる後に進むことは、他隊との関係上時機が許さぬ。また偵察は威力でこれを行わねば他に手段がないので、聯隊は何でも前方に向って進めるだけは進んで、しかる後攻撃に取り掛かる外仕方がない。こんな情況は図上戦術にも何にも研究はなかった。これが実戦の面白い所である。

この日、青葉聯隊は未明から高台嶺東方高地の敵を攻撃することとなった。またこの攻撃には、昨日わが聯隊の右翼にあった後備の加木聯隊も加わるという。

聯隊は払暁、紅土嶺の南側に集合して北方に前進した。蔭蔽前進のため、谷地を進むのであるが道はない。一列側面で聯隊が進む、四百米ばかり進むと、向うからは加木聯隊がこちらへ逆戻りして来る。敵前で擦れ違いになる、丁度この付近が何処から来るか、敵の小銃弾が盛に集る所である。加木聯隊と、こちらの聯隊との往き違いと、この小銃弾となお一つは兵卒間の距離が開いているのとで、この辺は大混雑である。大きく言えばグジャグジャとなっている。聯隊長代理は前方の中隊に命令して、前の高地を早く占領させた。ここで左側に寄れば割合に敵弾が来ない所がある。それで寄れるだけ寄って、八列にも十列にもなって膝姿をしておった。それでも時々ここへ「シュッ」とやって来る。見る間に五、六名負傷者が出来た。第五中隊長も、直ぐ僕の傍らで咽喉を貫かれた。従卒が大急ぎで繃帯しておった。こうなると、下士以下の元気は妙に銷沈する。どうも将校以下の集っているその中で、しかも中隊長の負傷に至っては、士気愈々衰える。聯隊長代理は断然前進を命じて、前方の高地に進んだ。かくの如くして聯隊が敵の陣地に近接するためには多くの時間を費した。

愈々占領した高地は、敵の第十八、第十九号堡塁の直前の高地であった。偵察をして見ると、形勢頗る宜しくない。何故なれば、聯隊の苦心して前進した目下の高地は、第十九号堡塁の南方付近である。それでここ迄来て熟視すると、北方一帯の高地は無

論敵の工事だらけで已むを得ぬが、驚いたのは、わが左の方即ち西方である。この西方一帯には、第十八号堡塁付近から西南に一連の稜線が流れている。この稜線には連続して敵の散兵壕が見える、殊に機関砲の陣地らしいのが、四か所ばかりは確かに見える。そこで聯隊は真北に向って攻撃すれば、全く敵の凹角内に飛び込むような訳である。また左の方を攻撃するためには、何処の辺を攻撃すればよいのか際限が分らぬ。あるいは断然その一陣地に向って攻撃するも、北方の敵陣地からは右側面を射撃せられるのである。既に昨日加木聯隊がわが聯隊の右側にあって、第十八号方面に対して攻撃したとき、右方からの射弾のために遂に成功しないで、その損害が多大であったという。この如き有様だったので、僕は聯隊長代理の諮詢に対して「この兵力をもって、目下の地形において攻撃することは不利であって、唯損害を受けるのみである。全く成功の望みなし」と意見をいった。聯隊長代理も同意であって、旅団長に向って攻撃至難なることについて意見具申をすることとした。

幸にして、この意見具申は旅団長の認可する所となって、本日昼間の攻撃を中止して、現在地を占領して時機あらば攻撃することとなった。目下の占領せる位置から、後方第十七号堡塁付近を経て、旅団司令部に通ずる唯一の通路は、昼間は敵の砲弾と小銃弾とのために全く交通杜絶の有様であった。一名の兵でも見えると敵は、バラバラ撃つので、始末にならぬ。何も地形が分らぬとは言いながら、聯隊は困った所へ飛び込んだものだと僕は心中独り心配しておった。

この日、高台巌東方高地方面では夜が明けると、わが砲弾が第二十号堡塁に向って盛に落ちて、小銃の音も猛烈であった。午後には、敵は第二十号堡塁から続々と北方第二十一号堡塁の方に側面縦隊で退却するのが見えた。またその南方の各稜線には、わが散兵が処々に見えた。しかしその前進の景況は見えなかった。終日こんな有様で、余程の激戦であるようであったが、遂に従来の王富嶺や、紅土嶺の如く敵陣地の顛頂にわが兵がスックと立って、追撃射撃をするような壮観を見ることは出来なんだ。

夜の繁忙

今夜は現在地にあって、夜を徹することとなった。第一線は日没となるや、出来るだけの工事をした。弾薬の補充、傷者の処置、糧食の運搬など、皆日没を待って行われるので、夜になると大多忙である。聯隊本部は第一線の後方で、敵に通ずる割合に広い谷地の側で露営した。この谷他には敵の夜襲を顧慮して、聯隊予備から一小隊を出して工事をして守備せしめた。

十二時頃であったろうか、前方一帯に非常な銃声がし始めた。いずれの方面であるかよく分らぬが、聯隊本部の直前の第一線方面が最も烈しい。敵の夜襲のために、味方が射撃するのであろうと判断したが、真の暗夜であるから全然不明であった。連絡斥候を放って第一線の状況を聞かした。暫らくで、この銃声は止んだ。よくその原因は分らなんだが、敵が夜襲をして来たのでもないらしい。敵陣地から射撃したという者もあったが、余り信ぜられぬと僕は思った。とにかく負傷兵があるから敵が射撃したことは確かである。沙河戦でも夜間わが斥候の帰還の足音を聞いて、僕の大隊は無意味に全線射撃したことがある。今夜もその轍ではなかろうかと僕は思った。しかし確かに敵の銃火を見たというものもあったから、敵が若干来襲したことは確かである。それにしても陣地にある、われが無暗に射撃して、こちらの位置とその存在とを敵に告知するのは不利の甚だしきものたることは明かである。この如きことは、夜間あり得べきことで、人間が益々神経過敏になっている目今の状況において、心理状態の自らしからしむる所であろう。しかし茲に益々沈着するのがえらい、昔は鳥の羽音を聞いてさえ逃げ出した弱い軍隊もあったという。今や僕等はもはや全六夜睡らず、二か所の敵の角面堡を強襲し、多大の損害を蒙って、こんな地形に飛び込んで敵から包囲せられて、昼間に後方との連絡も取れぬ悲境にある。並の軍隊ならば今夜のような時には、無意識に第一線を撤することがないとも限らぬ。僕は第一線のものが、とにかく、その位置を固守せんがために射撃したので、却ってその健気なるに同情すべく再び考え直した。

紙面の都合で引用はこれまでとする翌三日にはこの聯隊は占領地を確保し攻撃はしていない。聯隊長が負傷したので第一大隊長が代理を勤めている。隣の二十九聯隊はこの日も攻撃続行した。その前に聯隊長が戦死しており、此の日には聯隊長代理の大隊長も戦死している。数は出ていないがこの旅団の戦死者は随分多く、特に将校の戦死者は多く、攻撃続行は困難だったように感じられる。

翌四日にも占領地確保で攻撃命令は出ていない。夕刻多門大尉は旅副官を命せられ、旅司令部に行った。

結局軍から追撃命令が出るまで第二師団はそれ以上攻撃はしなかったようだ。

開戦時から奉天会戦で負傷するまで、著者の従卒を務めた太田（右）と共に

日本海海戦百周年にあたり

海軍記念日に懐う

田中　賢一

戦前は五月二十七日を海軍記念日とし、日露戦争における我が海軍活躍の跡を子孫に語り伝える日としていた。

申すまでもなく、この日は日本海海戦の第一日で、この日の主力艦隊の決戦によって大勢は決したのである。

5月27日午前2時45分、対馬海峡を哨戒中の仮装巡洋艦「信濃丸」はバルチック艦隊の病院船と遭遇、追尾していると遂に敵艦隊を発見、4時45分旗艦「三笠」に打電した。報告を受けた聯合艦隊司令部は、大本営に打電「敵艦見ユトノ警報ニ接シ聯合艦隊ハ直ニ出動シ之ヲ撃滅セントス本日天気晴朗ナレドモ浪高シ」

出動した聯合艦隊は午後1時39分敵艦隊を発見した。この時マストに翻ったZ旗「皇国ノ興廃此ノ一戦ニアリ各員一層奮励努力セヨ」戦前は小学校の児童も知っていた歴史である。

さて、この海戦は次頁の表にある通り翌28日まで昼夜を通じ十回の合戦が行はれたが、第一合戦が彼我主力艦隊の大決戦で敵艦七隻を撃沈しこれにより彼我の戦力比に格段の差が生じ、第二合戦以降は一方的な戦闘となり、敵艦の大半を仕留めることになった。しからば第一合戦は如何に行はれたか。ここに戦争文学の白眉と称された水野広徳著「此一戦」とロジェストウエンスキーの幕僚で記録担当だったセミョーノフ中佐著「ツシマ戦記」のそれぞれ該当部分を転記するが、これを読めば勝敗の拠って来るところは明瞭である。

その第一は後世東郷ターンと呼ばれた敵前大回転で敵の頭を押さえる、別名丁字戦法とも言はれたが、戦術部署にあることは論を俟たないが、それが出来たのも我が砲術が優れていたからである。別稿でのべるが、聯合艦隊解散の辞にある通り「百発百中の一砲能く百発一中の敵砲百門に対抗し得る」の信念に徹し訓練したことにある。それに加えて下瀬火薬を装填した我が砲弾の威力は絶大だった。次頁に掲げておいたが、東郷司令長官以下聯合艦隊の首脳が、艦橋に暴露して指揮していて一人の死傷者も出ていない。それにひきかえ、装甲のある司令塔にありながら敵将は負傷している。ロシヤの戦記を見ると、船が沈む前に随分死傷者が出ているのがわかる。

これも別稿で述べておいたが、ロシヤ軍の士気は全般に高くはなかった。それに半年余の航海で疲れ切っており被弾し悲惨な状況にたち至れば、士気衰えるのは、如何んともし難かったろう。そのことは次の記事で充分に読みとれる。

聯合艦隊　司令長官　東郷平八郎　大将

第一艦隊		司令長官	東郷平八郎	大将
第一戦隊		司令官	三須宗太郎	少将
（艦種）	（艦名）	（排水量）	（速力）	（主砲）
戦艦	三笠	15,362	18.0	12吋砲4門
々	敷島	15,088	々	々
々	富士	12,649	18.2	々
々	朝日	15,207	18.0	々
装甲巡洋艦	春日	7,700	20.0	8吋砲4門
々	日進	々	々	々
通報	龍田	864	21.0	4,7吋砲2門
第三戦隊		司令官	出羽重遠	中将
巡洋	笠置	4,978	22.5	8吋砲3門
々	千歳	4,836	々	々
々	新高	3,420	20.0	6吋砲6門
々	音羽	3,048	々	6吋砲2門
第二艦隊		司令長官	上村彦之丞	中将
第二戦隊		司令官	島村速雄	少将
装甲巡洋艦	出雲	9,906	20.8	8吋砲4門
々	吾妻	9,456	20.0	々
々	浅間	9,855	21.5	々
々	八雲	9,800	23.0	々
々	常磐	9,855	21.5	々
々	磐手	9,906	20.8	々
通報艦	千早	1,250	21.8	4,7吋砲2門
第四戦		隊司令官	瓜生外吉	中将
巡洋艦	浪速	3,709	18.0	6吋砲8門
々	高千穂	3,709	々	々
々	対馬	3,420	20.0	6吋砲6門
々	明石	2,800	19.5	6吋砲2門
第三艦隊		司令長官	片岡七郎	中将
第五戦隊		司令官	武富邦鼎	少将
巡洋艦	厳島	4,278	16.0	32拇砲1門
装甲海防艦	鎮遠	7,335	14.5	12吋砲4門
巡洋艦	松島	4,278	16.0	32拇砲1門
々	橋立	々	々	々
通報	八重山	1,609	20.0	4,7吋砲3門
第六戦		司令宮	東郷正路	少将
巡洋艦	須磨	2,700	20.0	6吋砲2門
々	和泉	2,967	17.0	々
々	千代田	2,439	19.0	4,7吋砲10門
々	秋津洲	3,172	々	6吋砲4門
第七戦		司令官	山田彦八	少将
装甲海防艦	扶桑	3,777	13.0	旧式2拇砲4門
砲　艦	高雄	1,777	15.0	6吋砲4門
々	筑紫	1,372	16.0	旧式10吋砲2門
々	鳥海	622	10.3	4,7吋砲1門
々	摩耶	622	10.0	旧式6吋砲2門
々	宇治	640	13.0	12斤砲4門

以下第一～第七駆逐隊計二十一隻
第一、第九～第二十艇隊計四十一隻
特務艦隊計八隻あり

	合戦	対勢	戦果
二十七日午後	第一合戦	日露主力艦隊の大決戦	敵艦七隻撃沈仮装巡洋艦三隻
二十七日夜	第二合戦	全駆逐艦水雷艦隊の敵敗残艦隊に対する追撃	敵艦四隻撃沈日本側水雷艇三隻沈没
二十八日朝	第三合戦	軍艦「千歳」の敵駆逐艦に対する追撃	敵駆逐艦一隻撃沈
二十八日午前	第四合戦	主力艦隊の敵敗残主力に対する包囲攻撃	敵艦四隻拿捕
二十八日午前	第五合戦	軍艦「音羽」「新高」の敵艦「スウェトラーナ」に対する追撃	敵艦一隻撃沈
二十八日午前	第六合戦	軍艦「新高」「出雲」の敵駆逐艦に対する追撃	敵駆逐艦一隻撃沈
二十八日午前	第七合戦	駆逐艦「不知火」及び第六十三号艇の敵駆逐艦に対する追撃	敵駆逐艦一隻撃沈
二十八日午後	第八合戦	軍艦「磐手」「出雲」の敵艦「ウッシャーコフ」に対する追撃	敵艦一隻撃沈
二十八日午後	第九合戦	駆逐艦「漣」「陽炎」の敵駆逐艦二隻に対する追撃	敵駆逐艦一隻拿捕敵将生擒
二十八日夕	第十合戦	第四艦隊及び第二駆逐隊の敵艦「ドンスコイ」に対する追撃	敵艦一隻撃沈

旗艦々橋上、軍議正に濃かである。東郷大将は長劍を杖ついて羅鍼艦橋上に屹立し、炯々たる眼は益々輝き、結びたる口は、愈々締り、敵の運動を注視しつつ默して一語を發しない。既にして午後二時を過ぐること五分、敵の距離約八千米突に近づくや、機を見て動くこと、迅電の如き我が大将は、決然として左舷回頭の令を下した。大膽！又冒險！

「取舵――度」の號令と共に三笠の艦首は、俄然左舷に回轉して、敵と同航の針路を取るに至つた。敵は此の大膽にして意外なる我が艦隊の行動に驚きたるものの如く、或將校は手を拍つて「占めた！」と叫び、或將校は狂喜して「我が軍勝てり」と叫び、又或者は「東郷大将は氣が狂つた？」罵つた。先程より「スウォーロフ」の艦橋上に立つて、我が艦隊の行動を注視せしロ提督は、我が回轉運動を見るや、破顔一笑、機逸すべからずと爲し、將に三笠の回頭を終りて、新針路に就かんとする時、全艦隊に向つて戰闘開始を令すると同時に、「スウォーロフ」の前部十二吋砲は、三笠に向つて第一彈を送つた。時に午後二時八分にして、兩軍旗艦の距離正に七千米突である。

逸りに逸りたる敵軍は、戰闘開始の令に接するや、恰も積水を千仞の壑に決するが如き勢いを以て、一齊に我が三笠に向つて彈丸を雨注した。砲聲は殷々として百雷の一時に轟くが如く、大小の彈丸は三笠の周圍に集落して海水奔騰、爆煙渦巻き、我が後續諸艦より之を望めば、水柱沸々三笠の艦影を沒し、人をして坐に手に汗を握らしめた。

抑も敵前に於ける回轉運動は、海戰術の原理に於て最も危險にして、最も忌むべきものと認められて居る。是れ回轉中は、自艦の照準不正確となるに反し、敵の照準をして容易ならしめ、殊に此の時に於ける我が艦隊の如く、單縦陣の逐次運動を爲す場合には、回轉軸に在る軍艦は、敵の全砲火を受けて、一艦一艦撃滅せらるゝ恐があるからである。東郷大將の取りたる運動は、啻に大膽なるのみならず、寧ろ冒險といふべきである。若し之を兵棋演習の試驗とすれば、東郷大將は或は落第かも知れぬ。乍併兵は活術にして死學にあらず、虎穴に入らずんば虎兒を得ずで、此の冒險あつてこそ、初めて日本海海戰の全勝が得られたのである。東郷大將にして徒に座上戰術の空理に拘泥し、危險を恐れて、敵と反航せんか、爾後に於ける戰機の發展は、頗る困難であつたであらう。夫れ兵に常勢無く、水に常形無し、能く敵に依つて變化して勝を取るもの、之を神と云ふと。東郷大將の取りたる策は是れ即ち敵に因つて變化したるものにして、婆爾的（バルチック）艦隊に對する我が聯合艦隊の場合に於てのみ、初めて其の成功を見たのである。故に後世或は徒に之に倣ふものあらば、必ずや美人の顰に倣ふ醜婦の嘲りを貽（のこ）すであらう。

驟雨か急霰か、敵彈益々降りしきり、近きは艦側數米突に落下し、水煙艦を掩うて三笠の危機刻々に逼らんとす。東郷大將は寸鐵の防禦なき艦橋上にたつて、飛瀑の如き潮水に浴しつ、尚ほ滿を持して發砲の令を下さない。軍紀森嚴なる我が將卒は、煮え返る血を抑えつ雨より繁き飛彈の下に、肅然として戰闘開始の命を待つて居る。

既にして午後二時十分、距離は近づいて、約六千米突（メートル）となるや、東郷長官は手頃は宜しと初めて發砲を令し。三笠先づ「スウォー

「此一戰」抜

八　龍爭虎闘

露國艦隊は其の不利益なる二列縦陣の戰闘陣形に復せんが爲め、右翼列なる第一戰艦隊は速力を増して左翼列の前頭に就かんと努めて居る。敵と反航の針路を取つて進み來りし我が主力艦隊は、轉廻して敵と同航せんか、將に直進して之と反航せんか、

ロフ」に對して徐に砲撃を開始した。二番艦朝日以下逐次之に準うて砲火を開き、二時十五分には第一戰隊の殿艦日進も、亦既に回頭を終つて戰線に入り、專ら敵の旗艦「スウォーロフ」及び「オスラービヤ」の兩艦に向つて、全戰線の砲火を集中し、戰闘漸く劇烈となつた。敵は我が集中火に壓せられ、針路を右折して北東方に變針し、第二、第三戰艦隊は、第一戰艦隊の後尾に入り、蜒々として不規則なる單縱陣を形成し、我と竝航の針路を取るに至つた。

尋いで同二十五分頃には、我が第二戰隊も亦戰線に加はつて第一戰隊に續航し、「スウォーロブ」、「オスラービヤ」並に其の他の敵艦に向つて猛烈なる砲火を注ぎたるが爲め、敵は之に堪へずして更に右折し、漸次東方に轉針した。

是に於て我が艦隊は優速を利用して、益々敵の先頭を壓迫し、同三十分頃には距離は減じて五千米突内外となり、各艦急射擊に移つた。砲聲轟々、硝煙漠々、波は逆卷いて日色暗く、彼我各々十二隻の主戰艦隊國運を賭して相戰ふ、獅虎相搏ち、鯨鯢相爭ふの状、天柱砕けて地維折るゝかと疑はれ、偉絶、雄絶、筆以て記すべからず、言以て語ることが出來ない。

我が彈丸は頻に敵艦に命中し、或は舷側を貫き、或は甲板を砕き、紅焔逆發、爆煙海を蔽ひ、敵は漸く苦戰の状を顯した。就中其の兩旗艦は屡大火災を起し、猛煙全艦を包んで艦影さへも定かならず、唯見る、團々たる黑褐の濃煙強風に煽られて、焔火其の間に閃き、檣頭の戰闘旗僅に其の艦位を示すのみである。而も敵は名に負ふ「スラブ」の強族、慘澹たる苦戰に屈せず、奮戰力闘最も力め、其の射擊の如きも、未だ容易に侮り難きものがある。

東郷大將の旗艦三笠は、此時既に巨彈十餘を受けて死傷續出し、中にも其の六吋砲員全部を殺傷し、補缺員亦踵いで全滅せられ、肉塊四散して碧血甲板に染むるの慘状を呈し、第一戰隊の殿艦日進亦數彈を被りて、參謀松井海軍中佐等之に斃れ、第二戰隊の淺間は艦尾水線部に十二吋の巨彈二個を受けて海水艦内に奔入し、應急修理の爲め遂に列外に脱し、其の他の諸艦多少の損害を被らざるはない。唯幸なるは何れも艦の要部を避けたるが爲め、各艦未だ戰闘力を減殺するに至らず、一彈を被る毎に士氣益々加はり、一兵の殪るゝ毎に敵愾の氣愈々昂つた。

既にして二時三十分頃より同四十分頃に至りては、戰闘最も酣にして、彼我の砲火は正に熾烈の頂點に達し、千弩萬砲並び發して、飛び交ふ彈丸は秋郊の蝗螟よりも尚ほ繁く、空を切る彈聲は枯林を亙る疾風よりも尚ほ凄じく、將士共に寸時も其の配置を離るゝの暇さへない。或副長の如きは、兵士より尿意促迫堪へ難しとの訴に接するや、甲板放尿勝手次第との珍號令を發するに至つた。此時に當り我が射擊は愈々冴えて巨彈の敵艦に命中炸裂するもの益多く、砲煙煤煙空に漲りて全く敵の艦列を蔽ひ、我が諸艦は已むを得す一時射擊を中止するに至つた。

斯くて我が艦隊は煙の絶間を度り、好敵を選んで益々精確なる砲火を注ぎしかば、毎發殆ど虚彈なく、敵艦多くは火災を起し、旦つ其の第三戰艦隊は著しく前續隊より後れ、陣形漸く亂れんとした。而して戰闘開始以來常に我が砲火の燒點となりし「スウォーロフ」、「オスラービヤ」の兩艦は其の損害最も甚しく、殊に「オスラービヤ」は敵の戰艦中唯一の三本煙突なりしが爲め、最も我が射擊の好目標と爲り、大檣は半ばより折れ、後部煙突は粉碎し、舷側彈孔は蜂窩の如く、其の大なるは直徑實に二十呎に達し、海水は決河の勢を以て艦内に奔入し、艦首は著しく沈下して、艦體左舷に傾斜し、甲板は碎けて燃えて一面の火床となり、砲門並に彈孔より吐き出す猛火は恰も紅蓮の火舌の如く、伏屍累々、肉血飛散し、光景誠に凄慘を極めて居る。而も彼尚ほ發砲を停止せず、艦尾に殘れる二三の砲門よりは、紫電の砲火頻に閃くを見た。

やがて二時五十分頃に至り、我が艦隊は全く敵の前方に進出し、敵列に對して略ぼイの字を畫き、約四千米突の距離を以て益々猛烈なる縱射を加へた。敵は之を厭うて尚ほも右方に偏針し、遂に南東方に向ひて我と並行の航路を取らんとした。此の時恰も我が十二吋砲彈一發は「スウォーロフ」の司令塔に命中して、轟然爆發すると共に、操舵機破損して艦は自ら右舷に急轉しつ列外に逸走し、塔内に在りたる司令長官ロジェストウェンスキー中將亦重傷を負うて一時昏睡に陥つた。是に於て二番艦「アレクサンドル」三世代つて嚮導艦となり、我が艦

日露艦隊の勢力比較

（日本）		（ロシヤ）
4隻 58,306トン	戰　艦	8隻 86,612トン
29隻 143,035トン	巡洋艦	12隻 60,610トン
26隻 11,714トン	駆逐艦	9隻 3,159トン
41隻 4,772トン	水雷艦	0トン
8隻 40,1906トン	特務艦	9隻 ？トン
217,327トン	総トン数 特務艦除く	150,381トン

隊の後尾を衝いて北方に遁れんと欲し、決然針路を左方に轉じた。我が全艦隊の砲火は、忽ち「アレクサンドル」三世に向つて集中せられ、同艦は見る見る大火災を起して列外に走り、三番艦「ボロヂノ」更に代つて嚮導艦となつた。

我が艦隊は敵の運動を覚知するや、之に先じて其の前路を扼せんが爲め、第一艦隊は直に二回の右八點一齊回頭を行ひ、日進を嚮導とし三笠を殿艦とせる逆列單縦陣を制りて、戦闘側を左舷に轉じ、逆浪を蹴破しつ約西北西に向つて急進した。

敵は我が第一戦隊の回轉するを見て、到底北方に脱出することの難きを認めけん、忽ち前決心を翻して再び右舵に回頭し、針路を南方に轉じた。

是に於て我が第二戦隊も亦回頭を見合し、其の儘直進して敵と並航し、第一戦隊と共に約三千米突の近距離より、敵列に對して猛烈なる十字砲火を注いだ。

斯くて敵艦隊は陣形益々混亂し、雑然として尚ほも南方に航下し、遂に煙霧の裡に一時其の姿を沒した。仍て我が第二戦隊も亦午後三時十分左舷十六點の逐次回頭を行ひて第一戦隊の跡を追ひ、彼我艦隊は次第に相遠ざかり、茲に第一次戦闘を終つた。

是より先き「オスラービヤ」は其の損害愈々烈しく、全く戦闘力を失ひ、午後三時前「スウォーロフ」と相前後して列外に脱した。上中甲板は火災の猛焔に包まれ、下甲板には浸水漲り、乗員は今や水火の挾撃に逢うて身を置くに處なく、纔に燒け殘れる甲板の一處に集れば、此處も亦頼む木蔭に雨漏りて、飛び來る彈丸は雨か霰か、一彈碎くる毎に死するもの、傷つくもの、其の數を知らず、或は頭を碎かれ、或は手足を斷たれ、苦痛を叫ぶ負傷者にも今は手當を施す術もなく、瀕死の重傷者に對しても最期一杯の水さへ與ふることも出來ない。彈丸に碎くるか、波に呑まるゝか、二つに一つ。乗員は唯手を拱いて死を待つばかりである。

斯かる間に艦は益々沈下して、逆巻く激浪は物凄き渦を爲しつ、早や上甲板に迄襲ひ來り、殪れし人の屍や、碎けし艦具を一波毎に奪うて行く。殊に身の運動さへ自由ならぬ負傷者の、波に浚はれて苦み叫ぶ有様は、實に悲惨の極である。斯くて午後三時を過ぐること十分、「オスラービヤ」は遂に艦首を下にし艦尾を高く空中に擡擧すると同時に、一萬二千餘噸の戦艦は全く影を水面下に沒し、乗員の多くは生きながら艦と共に千尋の海底に葬られた。跡には濛煙尚ほ漠として海面に靄き、井の如き大小の渦流は、轟々聲を發して、人も艦具も唯一呑みとし、幸に海面に浮びたる人々も、或は荒れ狂ふ激浪に呑まれ、或は降りしきる彈丸に碎け、八百五十の乗員中、味方驅逐艇「ブイヌー」、「ブラーウイ」等に救助せられたる約四百名の外は壯烈悲惨なる最後を遂げた。是ぞ日本海々戦に於ける劈頭第一の沈沒露艦「オスラービヤ」終焉の概況である。

又曩に舵機を損じて戦列を脱したる敵の旗艦「スウォーロフ」は其後全く僚艦と分離し、單獨北方に航走中、三時三十分頃約二千米突の近距離より、再び我が第一、第二戦隊に要撃せられて、艦體破損益々甚しく、前檣は根元より折れ、一個の煙突は粉韲して影だに留めず、火焔全艦を掩うて惨状目を當てられぬばかりである。此の時千早（艦長海軍中佐江口鱗六）、第五驅逐隊（司令海軍中佐廣瀬順太郎）は我が砲火の絶ゆるを待ち、猛然荒波を衝いて、「スウォーロフ」に對し勇壯なる白晝襲撃を決行した。偶々敵主力艦隊の一部は「スウォーロフ」掩護の爲め近づき來り、我が襲撃艦に向つて猛烈なる砲火を集中し、爲めに、千早は、三彈を被りて浸水を來し、應急修理の爲め、一時戦線外に退き、第五驅逐隊の不知火亦二彈を受けて汽罐を破られ、下士卒十名の死傷者を生じた。而して「スウォーロフ」は尚ほ浮んで居る。

九　勝敗既に決す

相撲を取りて最初兩三ツを取られたるものは負け、將棋を差して先づ飛車を奪はれたるものは敗る。二時八分戦闘を開始してより、三時過兩軍一たび相離るゝに至る迄約一時間の大激戦に於て、敵は戦艦「オスラービヤ」を失ひ、旗艦「スウォーロフ」を撃破せられ、其の他の諸艦亦多大の損害を被り、陣形潰裂して殆ど亂軍に陥つた。之に反し我が艦隊は、多少の損害を受けたりと雖も、陣形整然として旌旗益々鮮に、一時戦列を脱したる、淺間も既に應急修理を完成して隊に復し、隊伍堂々激戦の跡だに見えず、勝敗の數既に明となつた。

戦を避けて南方に轉回したる敵主力艦隊は、我が砲撃を脱するに及び、三時三十分頃再び浦鹽斯徳に向つて針路を轉じた。

日進を先頭とし敵を砲撃しつ西北西に進みたる我が第一戦隊は、敵を後方煙霧の裡に失するや、三時四十分頃再び左十六點の一齊回頭を行ひ、順列單縦陣に復して三笠嚮導艦となり、第二戦隊も亦此の時再び第一戦隊に合して其の左前方に占位し、共に敵を追うて北東方に向進した。

軈て午後四時頃に至り、我が艦隊は東方に當り、敵主力艇隊の陣形錯然として北東方に向へるを發見し、距離約六千米突より、右舷砲火を以て第二次戦闘を開始した。

煙霧を透して敵の陣列を眺むれば、曩に火災を起して戦列を脱したる「アレクサンドル」三世は、此の時既に列に服し、「ボロヂノ」、「アリヨール」と共に一隊を爲し、「シソイ、ウエリーキー」、「ナウリン」、「ナヒーモフ」の諸艦は不規則に之に續き、「ニコライ」一世以下の第三戦艦隊は遠く遅れて、姿を煙靄の裡に殁して居る。敵は最初の一戦に敗れて士氣沮喪せしか、今や決戦の勇氣なきものゝ如く、唯遁走れ維れ努め、我が砲撃を再び開始するや、僅に之に應じつ列を亂して又も漸次右方に變針した。獨り半壊の「スウォーロフ」のみは尚ほも猛煙に包まれつ、恰も傷蛇のノタくるが如く漂浪として我が艦隊と並進して居る。

是に於て我が艦隊の砲火は再び此の哀れなる敵艦に集中せられ、見る見る殘りの一煙突は飛散し、艦橋は粉碎し、砲塔は崩壊し、其の他甲板上の諸装置は全然一掃せられて、殘るは唯僅に枯木の如き半折の大檣

のみとなつた。岩か船か將た煙の團魂か。運轉自由を失うて、逃れんと欲するも逃るゝを得ず、備砲の大部は破損して、戰はんと欲するも戰ふ能はず、二千米突内外の近距離より發射する、我が彈丸は、雨よりも密に、霰よりも急に、或は舷側に碎け、或は甲板に裂け、濛々たる黑煙の裡には、火焰の柱閃きて、天をも焦し、波をも燒き、凄慘たる光景、人をして悚然たらしむるに至つた。而も流石は厚き甲鐵を以て裝はれたる最新式の戰艦とて、尚ほも未だ沈沒に至らない。

斯かる間に敵主力艦隊は、殘骸に等しき「スウォーロフ」をば、我が砲火の下に遺棄し、益々右折して南方に遁逃せんとした。

我が艦隊は「スウォーロフ」の擊沈を驅逐艦に讓り、第二戰艦隊は直に敵主力艦を追うて南折し、第一戰隊は敵の再び我が後尾を繞つて北方に逸走するを扼せんが爲、四時三十分左八點の一齊回頭を行ひ、單横陣を以て暫時北方に航進した。

二時間半に亙る激戰に、彼我合して百餘隻の艨艟より吐き出す煤煙は、發射の砲煙、裂彈の煤煙、並に敵艦火災の焚煙と、合混じ相合して、渦巻きつ、霰きつ、海空濛漠として遠望を妨げ、我は遂に敵影を烟霧の裡に失するに至つた。

是より先き我が第四驅逐艦（司令海軍中佐鈴木貫太郎）は「スウォーロフ」襲擊の命を受くるや、直に敵艦に向つて挺進し、午後五時頃距離約三百米突に肉薄して水雷を發射した「スウォーロフ」は艦尾の殘る僅に一二の輕砲を發つて尚ほも勇敢に抗戰し、爲に朝潮は士官室に一彈受けて一名の負傷者を生じた。而も「スウォーロフ」は未だ沈まない。

北方に向進したる我が第一戰隊は敵艦隊北向の形勢なきを認め、更に右八點一齊回頭を行ひて單縱陣に復し、第二艦隊を招いて之を先頭に附け、敵主力を索めつ正南に航進した。此の時南方に當りて砲聲の殷々たるを聞き、或は敵主力艦隊の我が巡洋艦隊に逼りたるにあらざるやを憂ひ、第一、第二戰隊は速力を增して南方に急航すること約三十分、午後五時十分頃に至り、西方遙に巡洋艦、特務艦等十餘隻の敵艦船雜然として集團せるを發見した。塒を求むる騷鴉の群か、行を亂せし飛雁の列か、北向するもの、南向するもの、停止せるもの、傾斜せるもの、焚燒せるもの等、隊伍滅裂、陣形支離し各艦各自の欲する所に向つて居る。我が艦隊は適當の敵を擇んで之を砲擊しつ、敵主力を尋ねて尚ほも南方に航下せしに、遇々我が第三、第四、第五、第六戰隊等の敵巡洋艦、特務艦等と戰ひつ、南方より航進し來るに會した。眺むれば各戰隊共に外觀一の異狀を認めず、唯第四戰隊に屬する高千穗の稍隊列より後れたるを見るのみである。戰鬪開始以來我が主力艦隊と、巡洋艦隊とは全く相分離し、互いに其の安危に關して憂慮したるに、今や其の無事なる容姿を見て父子十年再會の思がした。

巳にして午後五時三十分に至るも、我が艦隊は未だ目指せる敵主力を發見する能はず、仍て第二戰隊は西方に轉針して敗走する敵巡洋艦を追躡し、第一戰隊は尚ほも敵主力を尋ねて針路を北方に轉じ、兩戰隊茲に一旦相分離するに至つた。

斯くて第一戰隊は行々敗敵を砲擊しつ進む中、五時四十分頃敵の假裝巡洋艦「ウラール」の進退自由を失して單獨漂航せるに會し、是も敵の片割と二千米突以内の距離より、全戰隊の砲火を之に集中した。敵は船體に寸毫の保護なき假裝軍艦とて、我が彈丸は恰も利槍の襖を刺すが如く、敵艦の一舷より他舷に串通し、「ウラール」は忽ち大火災を起こして、見る見る激浪の中に沈沒した。是より先き同艦は我が第三戰隊以下の砲擊に傷つきて、運轉の自由を失ひ、且つ艦内浸水烈しきに居りたるを以て、乘員は早くも艦を見棄てゝ端舟に移り、其の大部は僚艦「アナヅイリ」及び「スウキーリ」に救助せられ、一部は翌日我が長門、石見の沿岸に漂着したるが爲、艦と共に沈沒したる人員は、極めて少數であつた。

我が第一戰隊は激浪の中に沈み行く「ウラール」の慘狀を後に見つ、益々北方に急ぐ途上、大破したる「スウォーロフ」の、尚ほ煙焰に蔽はれつ彷徨し、且つ其の傍に工作船「カムチャーツカ」の漂蕩せるを發見した、併し時既に六時に近く、晩春の永き日も早く暮れかゝりて、日沒迄に餘すところ僅に一時間である、敵艦隊は已に大破したるが如しと雖も、其の損害の明らかなるものは僅に「スウォーロフ」の戰鬪力を失ひたると、假裝巡洋艦「ウラール」の沈沒したるとのみである。其の他の諸艦は果して幾何程度の損害を被れるやは全く不明にして「オスラービヤ」の沈沒さへも、東鄕司令長官は此の時未だ知らないのである。

是を以て、我が艦隊は日沒迄に、敵と猶ほ一戰を交へて、尠くも其の五六を擊滅し、彼をして再び起つ能はざるに至らしめねばならぬのである。日一たび沒すれば、敵は夜陰に乘じて何處に逃走するやも圖られず、明日の會戰の如きは豫め之を期することは出來ない、乃ち我が艦隊の爲には日暮れて道遠しの感があるのである。故に我は今や廢艦に等しき「スウォーロフ」や、一工作船の如きは相手にするの暇なく、僅に之に一擊を加えたる儘、五時五十分更に針路を北西に轉じた。斯くて進むこと數分時にして忽ち西方に當り、北方に急ぐ敵の一群を發見した。

敵は一時間に亙る憩戰を利用して、火災を鎮め、損處を修理し、再び陣列を立て直し、「ボロヂノ」、「アリヨール」の二戰艦を先頭に置き、稍離れて「ニコライ」一世、「アプラクシン」、「セニヤーウキン」、「アレクサンドル」三世、「ウシャーコフ」、「シソイ、ウエリーキー」、「ナワリン」、「ナヒーモフ」など順次之に續き、内部の損害はいざ知らず、外觀尚ほ頗る堂々たるものがある。

我が第一戰隊は敵を發見するや、少し針路を右折して北々西となし、午後六時約六千米突の距離より、專ら敵先頭の二戰艦に向かつて砲火を開いた。敵は初め浦鹽斯德に向ひ北々東なる針路を取りしも、我が砲擊を受くるに及び、忽ち我が並航の針路を轉じ、窮鼠の勢を以て、猛激なる應戰を開始した。時に朝來の濛氣漸く散じて煙霧又

薄きしと雖も、夕陽波に映じて我が射撃に便ならざるに反し、敵は日光を背にして我を明視し得るの利を占め、巨彈屢我が諸艦に命中し、我は多少の損害を被るに至つた。

又曩に第一戰隊と分れ、敵巡洋艦を追うて西方に向ひたる我が第二戰隊は夜間第一戰隊と分離しあるの不利になると思ひ、之と合せんが爲、午後六時頃針路を北方に轉じて第一戰隊の跡を追うた。已でにして同三十分頃に至り、同戰隊は前方遥に「ナヒーモフ」を殿艦とせる數隻の敵艦を發見し、益々急進して同五十分距離約七千五百米突より砲撃を開始した。

敵は我が第一戰隊に其の先頭を撃たれ、第二戰隊に其の後尾を脅され、益々左方に屈折して、遂に北西に變針した。是より先き戰艦「アレクサンドル」三世は既に損害を被り、舷側に穿たれたる無數の彈孔よりは、海水瀧の如く艦内に奔入し、艦體傾斜して速力衰へたるが爲、今や他の新式戰艦と共に行動することは能はざるに至り、纔に第三戰隊と合して、「セニヤーウキン」と「ウシヤーコフ」との中間に其の位置を占めた。子供の中に大人を交へたるが如き同艦は此の時我が射撃の好目標となり、忽ち猛烈なる砲火を浴びせられて大火災を起し、全艦翁鬱たる黒煙に蔽われつ再び列外に走つた。浸水は益々烈しくして艦の傾斜は愈々加はり、低舷側の砲は水中に沒し、高舷側には赤色の艦腹を露し、甲板は峙つて急坂の如く、乘員は柱を抱き綱に縋りて纔に其の身を支えて居る。加之も炎々たる火災は強風に激して益々獰猛の威を逞しうし、大小の飛彈は艦邊に裂けて惨状愈々甚だしく、或は猛火に燒かれ、或は裂彈に撃たれて、激浪中に轉落するもの其の數を知らず、死屍は海を掩うて波は朱にと變ずるに至つた。

やがて午後七時頃に至るや、艦の傾斜は彌急にして甲板は殆ど垂直となつた、此の時恰も汽罐の破裂したるが如き響して、白煙の一團空天に漲ると同時に全く轉覆して、巨鯨の背の如き物凄き艦底をば水面上に現した、乘員の大多數は轉覆と共に艦に壓せられて其の儘海中に沒し、一旦艦底に匍ひ上りたる數十名の人員も、是れ又僅に死期の寸刻を延しえたるに過ぎずして、艦底の水中に沒入するや、孰れも激浪盤渦の裡に吸入せられ盡した。斯くて「アレクサンドル」三世八百五十の乘員は、全部艦と運命を同じうし、戰況を後に語るべき唯一人の生存者さへなく、其の壯烈なる行動は空しく沖の島北方の海底に葬り去られたのである。

斯かる間に我が第一戰隊は、專ら敵の先頭に在る「ボロヂノ」、「アリヨール」の二戰艦に向つて、猛烈なる砲火を集中しつ、極力之を急追した。然るに敵も又我に前路を扼せらるゝを厭ひ、速力鈍き後續諸艦を顧みず、汽機の全力を盡して逸走を圖りしが爲、我は容易に敵に近づくこと能はず、戰闘は依然として七千米突以外の遠距離より繼續せられた。適々太陽水線下に沒して、紫紅の夕暉西空を染め、今や彼我地の利を代へて我は敵影を明視し得るの地位を占めた。

之に於て我が艦隊の射撃は益々正確となり、巨彈の敵に命中するもの頻に相踵ぎ、一番艦「ボロヂノ」は忽ちにして、大檣は折斷せられ、艦橋は粉韲せられ、艦の後部は大火災を起し、焚煙爆煙相混じて全艦を蔽ひ、我は遂に照準を爲す能はざるに至つた。仍て我が各艦は更に目標を二番艦「アリヨール」に移して猛烈なる射撃を加へしに、同艦も亦忽ちにして濛煙に包まるゝに至つた。時に暮色漸く深く、閃々たる砲火は次第に紅を增して愈々鮮に、殊に「ボロヂノ」の火災は益々熾にして、數丈の紅焔天を彩り波を染め、光景實に凄壯を極めた。

已にして午後七時二十分頃我が一艦より放ちたる二發の巨彈一時に「ボロヂノ」の艦尾に命中爆裂するや、幾もなく一段猛烈なる煙焔高く天に沖し、同時に艦は倏忽として其の姿を海面より沒した。是れ恐らく火焔、彈藥庫を犯して其の爆發を起したものであらう。

「ボロヂノ」の沈沒は斯くの如く急激なりしが爲め、其の乘員は上甲板に在りたるものゝ外は、悉く艦と共に海底に沈み、漸く海面に浮び出てたるものも、多くは盤渦の中、吸入せられ、殘の一部も亦長時間、暗夜の激浪中に漂ふうち、疲勞と凍餒との爲、いつしか一人沈み二人溺れ、全乘員八百五十名の中、萬死に一生を得たるものは、同夜我が驅逐艦の爲に海中より拾ひ上げられたる、唯一名の水兵のみであつた。

旅順の攻撃慘は慘にして、突撃隊全滅、聯隊全滅の悲報は屢吾人の耳朶を衝き、悲痛凄愴の感に堪へぬものがあつた。然し其の全滅たるや、所謂戰闘力上の全滅にして、尠くも隊員の過半は、負傷者となつて歸つて來たのである。然るに此の日の海戰に於ける、敵戰艦「アレクサンドル」三世、並に同「ボロヂノ」の最期の悲慘なりしことは實に言語に絶し、兩艦合して一千七百名の將卒中、生存者僅かに一名とは、嘘の様な眞にして、是ぞ眞の全滅である。殊に其の大多數は無限の恨みを呑んで生きながら數百尋の海底に葬られたである。

男兒一たび戰場に臨めば、水漬く屍、草生す屍は、素より覺悟の上にして、念頭自己なく又妻子もない。併し斯の如きは彈丸縱横に交ひ、劍戟前後の相交る際に於ける觀念にして、中宵露營の夢覺めて、蟲聲唧々枕頭に響くとき、三更直に立つて、半月皎々檣頭に懸るとき、征士の涙は一層熱く、血は一層紅である。殊に時利あらず、雖逝かず、四面楚歌の聲を聞きては、雄傑項羽も尚ほ腸を斷ちしとかや。刀折れ、矢盡きて、徐に死を待つの時、誰か家郷を懐ひ、妻子を思はざるものがあらうぞ。

英國の大提督ネルソンでさへ、トラファルガーの戰に傷つきて、死期漸く迫らんとするや、己の愛するハミルトン夫人及び一女ホラシホの行末をば國王並に國民に託する旨を遺言し、又近くは佐久間海軍大尉が、潛水艇内に死を待つの時、陛下に奏上するに、部下の遺族をして飢餓に泣かしむるなからんことを以てして居る。誰が軍人を以て涙なしと云うものぞ、誰が軍人の血を以て冷しと云うものぞ。

抑も戰士の戰場に殪るゝや、死は一なる

も其の死方は決して一様でない。唯一發の彈丸に急所を打たれて何の苦もなく即死するものもあれば、肉裂け骨碎けて、苦痛の裡に轉々悶死するものもある。就中其の最も悲慘なるものは、陸戰に在つては、身に重傷を負ひ、起居自由を失して、敵前に遺棄せられたるもの、海戰に在つては、身は死せずして艦と共に沈みたるものであろう。而も前者は尚ほ時としては、敵か味方に救助せらるゝ萬一の希望がある。唯後者に至つては、暗黑なる海底の鐵室内に閉ぢ込められて、救助を受くるの望は絶對に絶え、逃れんと欲して逃るゝ能はず、死せんと欲して死する能はざるものである。浸水は室内の空氣驅逐して、漸次膝を沒し、時計の針の一「セコンド」毎に迫り來る死を待つの時、胸中の苦悶果して如何であらうぞ。

「ボロヂノ」の沈沒するや、時に日は全く暮れて、海漸く暗い、敵影模糊として煙が波か我が驅逐艦、水雷艇は襲撃の準備を整へて、既に各方面より敵に迫りつある。是に於て我が艦隊は戰を是に讓りて砲火を収め、敵と別れて翌朝の集合地點たる鬱陵島に向進した。雄大なる艦隊戰は茲に一先づ終りを告げ、莊烈なる水雷襲撃は將に起らんとして居る前夜來の強風稍衰へたりど雖も、波は尚ほ膨湃として、破潮燐青を走らし、六十隻に餘る我が驅逐艦、水雷艇は枚を銜み、燈火を蔽うて、縱横に馳突する状、勇又壯！

我が第一、第二戰隊が北方より敵の主力艦隊を壓撃せる間に、我が第三、第四、第五、第六戰隊は、南方より敵の巡洋艦隊及び特務艦隊を攻撃した。

朝來敵と觸接を保ちつ、之に我が主力艦隊の方に導きたる第一艦隊司令官出羽中將の卒ゐる第三戰隊及び曩に主力艦隊より分れたる第二艦隊司令官瓜生中將の率ゐる第四戰隊は、第一、第二戰隊の外方を迂航して、敵の後尾に迫り、午後二時四十五分頃左舷航戰を開始した。

此の時、「オレーグ」、「アウローラ」、「ドンスコイ」、「モノマーフ」、「スウエトラーナ」、「アルマーズ」、等の敵巡洋艦は、特務艦「ウラール」、「アナヅイリ」、「カムチヤーツカ」、「イルツキシ」、「コレーヤ」、「ルス」、「スウキーリ」を掩護しつ主力艦隊の右側後方に隨航せしが、武裝經弱なる特務艦船は、我が攻撃を受くるや、忽ち列を亂して、右往左往に逃げ迷ひ、巡洋艦は或は進み、或は後れて、極力之が救援に努めた。

我が兩戰隊は互いに協同連繫して、漸次敵の後尾を旋撃しつ、其の南方に出て、四千乃至五千米突の距離を測つて、益々猛烈なる砲撃を加えた。斯くて敵と並航戰を持續すること約三十分にして、敵の後尾は益々亂れ、特に特務艦隊は既に多大の損害を被りたるものゝ如く、「オレーグ」、「スローラ」、「ドンスコイ」等の巡洋艦は、之が救護の爲午前三時三十分頃針路を反轉し西方に向つた。仍て我が第三、第四戰隊も亦之を追うて西方に轉針し、爾後其の優速を利用して機宜正面を變じ、或は敵の左に現れ、或は其の右に廻り、艦種を擇ばず掃撃を加へしかば、午後四時頃に至りては、敵は愈々亂軍に陥り、火災を起すもの、進退自由を失するものなど續出し、「オレーグ」、「アウローラ」等も亦屢火災を起し、漸く苦戰の状を呈した。時に北方に於ける彼我主力艦隊の戰闘は尚ほ酣にして、殷々たる砲聲、漠々たる濛煙、南北相合して、天に轟き、海を掩ひ、凄壯たる光景天地の終も斯くやとばかり思われた。

尋いで午後四時過ぎに至り、第三艦隊司令長官片岡中將の直率せる第五、第六戰隊も亦戰闘に加はりしかば、敵陣全く潰裂し、東向するものあり、西走するものあり、唯雜然として鴉群の如く、假裝巡洋艦「ウラール」、工作船「カムチヤーツカ」の如きは、殆ど航進力を失ひ、曳船「ルス」は遂に我が砲火の爲に沈沒し、巡洋艦は特務艦を抛棄して、遠く北方に航走した。此の時我が第四戰隊の高千穂は、敵彈の爲め舵機を損じて、列外に出て、第三戰隊の旗艦笠置も、亦水線下に一彈を受けて浸水を見るに至つた。

是より先き第五、第六戰隊は、敵艦隊を我が主力艦隊に導きたる後、敵の後尾に向ひ航進中、午後三時過南方に當り、敵の病院船二隻の敵艦隊に續航せるを發見し、之が處分を遇々來會したる假裝巡洋艦佐渡丸及び満洲丸に命じた。是に於て兩假裝巡洋艦は直に敵病院船を三浦灣に引致し臨檢したるに、其の一隻「アリヨール」には、臺灣付近に於て露艦隊の爲に拿捕せられたる英國商船「オールドハミヤ」號の船員を収容せるを發見し、海牙條約違反の廉を以て、又他の一隻「カストローマ」は、同條約違反の嫌疑を以て、共に之を佐世保に回送した。

斯くて我が第三、第四、第五、第六戰隊は、ともに敗敵を掩撃しつ、尚ほも東方に航進せしに、午後四時五十分に至り、曩に北方に逃れたる敵巡洋艦は其の主力艦隊の一部と合して再び南下し來り、我が艦隊に對して攻勢を取つた。我が諸艦隊は直に之を邀へて奮闘せしも、巡洋艦は遂に戰艦に抗する能はず、第三、第四戰隊は近距離より敵の猛火に浴し、殊に第四戰隊の如きは忽ち敵の數彈を被り、動もすれば危地に陥らんとした。遇々我が第一、第二戰隊は北方より敵主力を追うて航下し來り、彼我艦隊の中間に進入したるを以て、敵は更に西方に回轉し、尋いで北方に逃走した。此の時第四戰隊の旗艦浪速は後部水線に敵彈を受けたるを以て、應急修理の爲め、第四戰隊は一時戰線外に避け、又曩に水線下に敵彈を被りたる笠置も、爾來浸水次第に增加し、遂に修理の爲め、波浪靜穏なる港灣に避難するや止むを得ざるに至り、午後六時頃戰場を退き、千歳に護衛せられつ、長門國油谷灣に向ひ、音羽、新高は第四戰隊に合した。

巳にして午後六時過浪速は應急修理を終り、高千穂も亦舵機の故障復舊して來り合した。第四、第五、第六戰隊は、更に北方に向つて敗敵を追撃する途上、敵の戰艦「スウォーロフ」及び工作船「カムチヤーツカ」の進退自由を失ひて漂蕩せるを發見し、之を包圍して猛撃を加えた、「カム

チャーツカ」、は元と是眇たる一商船「スウォーロフ」は既に殘髓に過ぎず、我が諸艦は二千米突以内の近距離に迫り、恰も教練射撃に於けるが如く、悠々射撃を加えしかば「カムチャーツカ」は、午後七時過遂に右舷に傾倒して、徐々に沈没した。是より先き同艦の乗員は、艦の運命漸く危險に瀕するや、本艦を退去して端舟に移りしも、其の多くは激浪の爲に顛覆し、二百餘名の將卒中、翌日長門の沿岸に漂着したる五十餘名の外は、悉く海底に葬られた。

「カムチャーツカ」既に沈没す、我が艦隊の砲火は、今や悉く「スウォーロフ」に集中せられた。時に同艦は全く焔煙に包まれて、砲門、彈孔等よりは眞紅の火舌を吐き、惨澹たる光景、到底人間の生存に堪へ得べしとも思われない。而も尚ほ艦尾に殘れる一門の小砲よりは、時々砲火の迸發するを見た。我が各艦より發射する彈丸は、頻に敵艦に命中し、舷側の閃く爆裂の火光は仕掛け煙花開くが如く、殆ど數へるに遑なき程である。石に立つた矢の例はあるも、巡洋艦の大砲は遂に戦艦の裝甲を碎く能はず、日は將に暮れんとするも「スウォーロフ」は尚ほ未だ沈まない。

是に於て片岡司令長官は、之が轟沈を付近に在りし第十一艇隊に命じた。同艇隊司令富士本少佐は命を受くるや、直に第七十三號、第七十四號、第七十五號の四艇を率ゐ、猛然洪波を蹴つて敵艦に向ひ驀進約三百米突に迫つて、各艇逐次水雷を發射した。やがて轟然たる大爆音と共に、黄煙敵の舷側に立ち昇ると見る間に、さしも強堅なりし「スウォーロフ」も遂に顛覆して、艦底を水面に露し、尋いで全く沈没するに至つた。時正に午後七時二十分にして、北方に於ける「ボロヂノ」の沈没と恰も其の時同じうして居る。「スウォーロフ」の沈没するや、我が各艦は茲に戦闘を中止し、我が主力艦隊を追うて北方に急航した。

（紙面の都合で引用はこれまで）

セミヨーノフ中佐著「ツシマ戦記」より

午後一時四十九分―十二隻よりなる日本艦隊のうち、わずかに三笠と敷島の二艦だけが、まったく回転を終わった、その瞬間をねらって、旗艦スワロフはまず轟然と第一弾を送った。

彼我の距離三十二ケーブル。

つづいて、全艦隊は、ただちに砲火を開いて、劣らじと巨弾をくり出した。

私は、熱心に双眼鏡を目に当てて、敵艦隊の情勢を望見していた。わが艦隊より撃ち出す砲弾は、あるいは跳越弾となって敵艦の頭上を飛び越え、あるいは不着弾となって、はるかの手前にものすごい水柱を上げ、一つとして命中するものはなかった。

わが軍の使用している砲弾は、炸裂(さくれつ)しても煙も出なければ、またその信管は、舷側をつらぬいて艦内にはいってから、はじめて破裂するようにできていたので、命中したかどうかは、敵艦内の混乱や、倒れた人があるのを見てからでないと、まるで判断がつかなかった。

だが、見たところ、日本艦隊には、一つもこのような現象は起こらなかった。

しかも日本艦隊の何たる大胆不敵さ！わが艦隊の発射する砲弾下を、彼らはあえて応戦しようともせずまるで意に介さぬかのように、ゆうゆうと落ち着き払って、例の順次回転をやっているのだ。

だが、それから二分の後、三笠、敷島につづいて、富士、朝日の二艦が、ようやく回転し終わったとき、日本艦隊は、おもむろに、わが砲撃に答えて、砲火を開いた。

日本艦隊の最初の一発は、わが艦列をはね超えて、海の中に落ちた。敵の使用しているこの長形の砲弾は、ちょうど薪(まき)でもほうり出したときのように、肉眼でもはっきりと見られて、ブーンという響きとともに、ぐるぐると旋回しながら、われらの頭上を飛んでいった。

「ははぁ、これか、例の有名な日本の鞄(かばん)型砲弾というやつは――」

「そうだ、これだよ」

鞄型というのは、旅順にいたロシア軍の士官たちが、日本の長形弾を、よくロシアで使われている彼の鞄に似ているというのでつけた綽名(あだな)である。

ところが驚いたことに、この「鞄型」は、落下したら最後、それが海中であれ、どこであれ、猛烈な炸裂ぶりを示すことだ。「鞄型」に、こんなものすごい威力があるなどということは、じっさい今の今までわれわれは知らなかったのだ。

跳越弾につづいて不着弾――しかも、その距離は、しだいしだいにせばめられてくる！

海中に炸裂した敵弾の砕片は、空中にはね上がって、うなりを生じて飛んできては、舷側や甲板の上の建造物に当たって、不気味な音を立てた。

前部煙突の向こうに、水と煙と炎との入りまじった、ものすごく巨大な水柱が立ったと見るまに、前艦橋のほうへ担架(たんか)が走って行く。何事だろうと思って、後艦橋の欄干ごしに下をながめていると、ちょうど自分の砲塔に帰ろうとしていたレドキン大尉が、私を見上げて、

「ツェレテリ侯がやられた！」

と叫んだ。ツェレテリ侯爵は少尉補の青年貴族である。

ついで飛びきたった敵弾は、旗艦中央部の六インチ砲塔に、まともに命中した。と思うまもなく、今度は、私の立っている背後の右舷艦尾で、猛烈な爆撃の響である。幕僚の士官室から、黒い煙にまじって、赤い火炎の舌がめらめらとひらめきだした。これは、士官集会室に落下した敵弾が、甲板を貫通して、士官室で炸裂し、そこに火災を起こしたのである。

戦闘に参加した経験もなく、大砲の射撃にも慣れていない乗員たちのなかには、敵弾が飛んできて命中炸裂するのを見ると、すっかり喪心したようになってしまって、うつろな瞳(ひとみ)をきょろきょろと動かしながら、

ただぼんやりとつっ立っている者が多かった。こういう連中は、ほんのちょっとした刺激によって、あるいは救うべからざる恐怖に陥り、あるいは狂的な精神の興奮をきたすものである。

艦内が火災だというのに、ホースやポンプのかたわらにいながら、彼らの一群は、消そうともせず、例の狂気じみたうつろな瞳を上げて、ただぼんやりと煙と火災を見つめていた。艦橋の上から、ふとこれを見つけた私は、たまらなくなって駆け寄っていって、一人一人彼らの背中をどやしつけ、

「ぼんやりしないで水をかけるんだ。早く！さっさとやれ！」

と、どなりつけた。

乗員たちがびっくりしたように飛び上がって、体を動かしはじめた。

私は、この第一回の火災の状況を記録しておこうと思って、ポケットから時計と手帳を取り出した。その瞬間、何か棒のようなもので腰のあたりを力まかせになぐられたように感じ、それと同時に、ひじょうに強く、だが柔らかな何者かのために背中を打たれて、空中へはねとばされた。

――気がついてみると、私は、いつしか甲板の上に平たくなって倒れていた。もちろん、時計の機械はめちゃめちゃにこわれ、ガラスは取れていた。やがて私は無意識のうちに甲板の上をはいまわって、ガラスを捜し出し、一生懸命に時計にはめ込もうと骨をおっていた。だがすぐに、益もないことに熱心になっているばかばかしさに気がついた。そして目がさめたような気持ちで、あわててあたりを見まわした。

おそらく、私は数分のあいだ、そうして人事不省に陥っていたのであろうか、いま見れば、火災はすでに消え、消火栓から出る水のためにずぶ濡れになった死骸が二つ三つ、付近にころがっているだけで、さらに人影とてもなかった。

〈おれをはねとばした砲弾のやつは、いったいどちらの方角から飛んできたのかしら〉

と、しばらく考えて、

〈そうだ。艦尾の防御塔のほうからだ〉

と気がつくと、私は、そろそろと起き上がって、艦尾のほうへ歩いていった。

そのあたりには、ノオシリッエフ大尉をはじめ、コザケウィチ少尉や、志願兵のマクシモフや数名の信号兵たちがいるべきはずなのに、今は一人の姿すらも見えず、防御塔は、めちゃめちゃに破壊しつくされて、まるで見る影もなくなっていた。そして、右舷六インチ砲塔の付近にいた十二、三人の信号兵は、ことごとくうちたおされて、肉片が、そこら一面に乱れ散っていた。

〈全部やられてしまったのだろうか〉

だが事実はそうではなかった。ノオシリッエフ大尉とコザケウィチ少尉とは、ふしぎにも、すこし負傷をしただけで助かり、そのときには、すでにマクシモフの手を借りて、包帯所へ行っていたのであった。

元気なレドキン大尉は、砲塔の中から顔を出して、

「どうだ、君は経験してきたんだから知っているだろうが、八月十日の戦闘と比較してみて――すこしは似てるところがあるかね」

「うん、まるで同じだよ」

とは答えたものの、実はすこしも似たところはなかった。

八月十日の海戦には、戦闘開始後、数時間のうちに、わがツェザレウィッチは、砲弾を十九発受けたにすぎなかった。だから私は、そのときの状況から、命中した時刻まで、細大もらさず記録することができた。ところが、きょうはとても、そんななまやさしいことはできそうもなかった。一生懸命に、敵弾命中の時刻や、場所や、損害の程度や、破壊のありさまなどを、いちいち書き止めようと努力しているのであるが、その状況をくわしく書きとめるのはおろか、単にその命中個数を数えることすら、ほとんど不可能であった。

あとからあとからと、ひっきりなしに、まるで神業のように正確に、わが艦体のどこかに命中するのだ。

日本艦隊の、このような射撃の巧みさは、かつて、見もせず、聞きもせず、想像すらしていなかったものだった。

（中略）

前艦橋へ上がってみると、日本艦隊の動静が、まるで手に取るように望まれた。

すでに全艦列の回転を終わった十二隻の日本艦隊は、一糸乱れざる統制の下に、整然たる陣形を成して、例の悠揚たる態度で、むだのない弾丸を、一発一発と、わが艦隊を目がけて撃ち出しながら、しだいにわれわれの針路の前方に出ようとしているもののようであった。

この時、彼らの距離は、約二十ケーブル強。双眼鏡をとって見ると、艦橋に立って何事かを指揮しているらしい敵将の姿までが、ありありと映った。しかも、敵艦の状況たるや、静かなること林のごとく、依然として、何の異常も混乱も認めることはできなかった。

〈何という、小づらにくい日本艦隊の落ち着きぶりだろう――〉

と考えながら、目をわが艦内に転じてみると、ああこれはまた何という痛ましい惨状であろう。

艦橋の上の建造物は、余すところもなく崩壊しつくされ、押しこわされたような甲板の上には、燃え残りの器物が、ぶすぶすと煙を立てながら一面に散乱し、死屍は累々と重なり合って、足の踏みどころもなく、信号所も、距離判定所も、着弾観測所も、ことごとく敵弾のために、こっぱみじんに砕け散ってしまって、もはや見る影もないありさまである。

後方につづくアレキサンダー、ボロジノの二戦艦も、いまや火災を起こして、もうもうたる黒煙に包まれている。

〈どうしてこれは八月十日の海戦どころの騒ぎじゃないぞ！〉

八月十日の海戦においては、結局はロシアが敗れたとはいえ、ともかくも初めから終わりまで、互角の戦いをしたのであった。

ところが、今度ばかりは、そうではない。最初から段違いの勝負なのだ。

これは海戦というよりは、むしろ「敗戦」とでもいうべきであろう。

前方に航進しつつあった日本艦隊は、やがて、突如舵を右に回して、わが針路を横断せんと試みてきた。わが艦隊も、これに応じて針路を右舷に転じ、ふたたび敵と並行して進んで行った。

時に午後二時五十分。

「艦尾の十二インチ砲塔に敵弾が命中しました！」

双眼鏡を手にしたまま、ぼんやりと敵味方の艦の動きをながめていた私の間近で、この時誰か不意にこう叫んだ。

「よし！」

と答えて、私はすぐさま艦尾のほうに走った。見ると、砲塔の鋼鉄製の屋蓋は、敵弾のために引き裂かれて、醜く上のほうにめくれ上がっていた。だが、射撃にはさしつかえないものとみえ、さかんに砲弾を発射していた。

後艦橋は、すでに完全に粉砕され、信号台も火災を起こしてもうもうたる黒煙を吹き出していて、その向こうにどんなことがあるのか、ぜんぜん見ることができなかった。

艦首へ引きかえそうにも、途中の縦艦橋は破壊され、無線電信台はさかんに燃えている最中なので、どうすることもできない。やむなく私は上甲板へ行った。

上甲板では、老練なマケドンスキー大尉の指揮する消防隊が、随所に頻発する火災に対して、血みどろの活躍をつづけていた。勇ましい、きびきびした彼らの働きぶりを、賛嘆する心でながめていたとたんに、どこかすぐ間近なところで、轟然天地をくつがえすような大音響とともに、敵の巨弾が炸裂した。その空気のあおりをくらって、私は、いやというほど甲板の上へたたきつけられた。腰をさすりながら起き上がってみると、さっきまで元気にどなっていたマケドンスキーが、弾丸の破片にでもやられたのか、よろよろと立ち上がったとみるまに、着ている白い夏服が、にじみ出してくる鮮血のために、見ているうちに、まっ赤にいろどられていった。

「担架（たんか）！担架！」

担架に乗せられたマケドンスキーは、すでに意識を失って、ぐったりと身動きもしなかった。包帯所へ着くまでに、おそらく彼は絶命してしまったにちがいない。

艦内の人員は、刻々に減少していった。あっちでもこっちでも、「手不足だ、手不足だ」とボヤく声が聞こえはじめたが、しかし、これに対して、補充員をまわすというようなことは、もちろんできるものではなかった。したがって、惨死者の死体なども、収容するひまも人手もなかったから、ごろごろところがっているままに放置しておくよりほかはなかったし、また負傷者なども、自分自身で包帯を巻いたり、手当てをしたりしなければならなかった。

興味深い戦記だが紙面の都合でこれまで

聯合艦隊参謀だった秋山眞之が大正三年郷里松山で講演した記事

（「正論」掲載）

日本海海戰今昔感

海軍少將　秋山　眞之　氏談

日本海海戰は對抗兩艦隊の兵力多大なりしと、其勝敗の差隔が著しく懸絶して露國艦隊は殆ど全滅したるに對し、我日本艦隊の損害の過少なりし點より見て、空前の一大海戰であるが、又其戰場の頗る廣大なりしと、戰鬪時間の甚だ長かりし點に就ても、古今未曾有と謂ふべきである。實に此海戰は當年五月二十七日拂曉の頃、哨艦信濃丸が二〇三地点の敵艦隊を發見したるに始まり、對馬海峽より鬱陵島（松島）附近に至る約三百哩の大海面に於て、翌二十八日の黄昏過ぎ迄二日間に亘り、晝夜連續各方面に戰はれたるもので、其間彼我艦艇の砲火を交へたる合戰は大小十ケ所に散在して居る、今其戰跡を辿つて見ると、大要左の通である。

此の一大海戰を組成せる十合戰の要領は先づ此んなものであるが、尚ほ各合戰を比較して、其の對勢と戰果を計査して見ると、頗る興味があると考へる。此の海戰大は大なりと雖も、彼我對當の決戰とも認むべき合戰は、唯だ單に二十七日午後の第一合戰のみで第二合戰より第十合戰迄の九合戰は、何れも我が優勢を以て敵の劣勢に當り、大抵其の勝敗も瞬く間に決して居る。而も其の戰果に就て見ると、第一合戰では僅かに敵艦七隻（内三隻は計數の價値なき假裝巡洋艦なり）を撃沈し得たのみで、殘餘の敵艦十隻撃沈、五隻捕獲の大仕事は、皆第二合戰以後に於ける敗殘の敵艦隊に對する追撃戰を以て仕遂げられたのである。之を以て見ると、戰勝の正味の結果は花々しき決戰の時よりは、決戰終りたる後の追撃戰にて獲得せらるることが分かると同時に、矢張り數字上の優勢を以て敵に對すれば、容易く敵を壓倒することが出來ると云ふことも證明せらるるかと思ふ。然しながら此の當初の第一合戰に於ける對當の大決戰に、敵の有力なる戰艦四隻を撃沈して被我勢力の均衡を破り、當日の勝敗を決し得たことが、此の海戰の大眼目とも謂ふべきもので、若し此の肝心なる決戰に勝を制することが出來なかつたならば、第二合戰以後の大戰果も擧がらぬのみか却て苦戰惡鬪を續行して、我が損失を增大するの惡果を生じたのである、故に海戰に於ては初めより優勢を以て敵に對するか、或は當初の決戰に勝を制すると云ふことが至極肝要である。

日本海の大海戰に於ける、我軍の大捷は前陳の如く、實に其の第一合戰の決勝より生み出されたものである。然らば此の第一合戰其物は如何に戰はれて、如何に勝敗が決したかを討究するのも、亦趣味あることゝ思はれる、實に此の第一合戰は五月廿七日午後一時五十五分、我聯合艦隊司令長官東郷大將が彼の念紀すべき「皇國の興廢此の

一戰に在り、各員一層奮勵努力せよ」の訓令信號を掲げ、我が主力たる第一及び第二戰隊を率ゐて、敵前に邁進したる時に始まり、夫より連續攻擊を續行し、日沒に至りて熄みたる、約五時間の合戰で、其の戰場は沖の島の北方である。去りながら、此の第一合戰も亦其の過半は追擊戰で其決戰の決戰たりし正味の部分は僅かに當初の約三十分間に過ぎない。日本海々戰の勝敗が僅々三十分間で決着したと云へば、或は驚く人があるかも知れんが、夫れが眞正の事實に相違ないので、東鄕大將の海戰々報にも明白に其の事が記載してある。今此の戰報を取出して、其の初めの方を見ると左の一節がある。

敵の先頭部隊は我が第一戰隊の壓迫を受けて稍其の右舵に轉舵し、午後二時八分彼より砲火を開始せしかば、我は暫く之に耐へて、射距離六千米突に入るに及び、猛烈に敵の兩先頭艦に集彈せり、敵は之れが爲益東南に擊壓せらるるものの如く、其の左右兩列共に漸次東方に變針し自然に不規則なる單縱陣を形成して、我と並航の姿勢を執り、其の左翼列と先頭艦たるオスラービヤの如きは須臾にして擊破せられ、大火災を起して戰列より脱せり、此時に當り第二戰隊も既に盡く第一戰隊の後方に列し、我全線の掩擊砲火は射距離の短縮に益々顯著なる効果を呈し、敵の旗艦クニヤージ、スウォーロフ二番艦アレクサンドル三世も大火災に罹りて戰列を離れ、敵の陣形愈亂れ、後續の諸艦亦火災に罹れるもの多く、其騰煙風に靉きて、忽ち海上一面を蔽ひ、濛氣と共に全く敵影を包み、第一戰隊の如きは爲に一時射擊を中止せるの狀況なりし、又我軍に於ても各艦船少の損害を蒙り、淺間の如きは後部水線に近く三彈を受けて舵機を損し、且つ浸水甚だしく、一時止むを得ず列外に落伍せしが、幾もなく應急修理して、再び戰列に入れり、之れ午後二時四十五分に於ける彼我主力の戰況にして、勝敗は既に此の間に決せり

此の戰報の通りに、敵の艦隊が初めて火蓋を切つて砲擊を開始したのが、午後二時八分で、我が第一戰隊が暫く之れに耐えて應砲したのが三四分後れて二時十一分頃なりしと記憶して居る。此の三四分に飛んで來た敵彈の數は少くも三百發以上で、夫れが皆我が先頭の旗艦三笠に集中されたから、三笠は未だ一彈をも打出さぬ内に、多少の損害も死傷もあつたのだが、幸に距離が遠かつた爲め、大怪我は無かつたのである。午後二時十二分我艦隊が砲擊を開始して、敵の先頭二艦に集彈したるより、午后二時四十五分敵の戰列全く亂れて勝敗の分れた時のまで、其間實に三十三分で正味の處は三十分に過ぎない、然し未だ此時には敵艦一隻も沈沒して居らぬのだ。此對戰に於ける彼我主力の艦數は、双方共に十二隻であつて我は戰艦四隻、裝甲巡洋艦八隻、彼は戰艦八隻、裝甲巡洋艦一隻と裝甲海防艦三隻より成り、其勢力は略對當であつたが唯だ較や我軍の戰術と砲術が優れて居つた爲に、此の決勝を贏ち得たので、皇國の興廢は實に此の三十分間の決戰に由つて定まつたのである。然し戰術とか砲術とか或は勇氣とか、膽力とか云ふものの矢張り形而下の數字的勢力は爭はれぬもので、若し此對戰に於て、我海軍が十二隻の主力戰隊を戰線に出すことが出來なかつたならば、此勝敗は未だ孰れとも云へないのである。實に此戰線に參加した我が裝甲巡洋艦日進、春日の如きは開戰眞際に伊太利より購入せられ、開戰后に我國に到着したのであるが、若し此二艦が無かつたならばと想ふと、吾人は今日も尚ほ戰慄せざるを得ない、獨り日進、春日のみならず、三笠にあれ敷島、朝日、富士にあれ、或は出雲、磐手、淺間、常磐の如き、何れも我海軍の當局が多年の慘憺たる經營に依りて製艦されたもので而も之を用ふるは、主として僅々三十分間の決戰であつた、吾人が十年一日の如く武術を攻究練磨しつつあるのも、亦此の三十分間の御用に立つ爲めである、去ればこそ決戰は僅に三十分であるが、之に至らしむるには十年の戰備を要するので即ち取りも直さず連綿十年の戰爭である、吾人は素より至尊の御威德が直接間接に戰勝の大主因を成し、皇軍には常に天佑神助あるを確信する者であるが、去りとて吾々臣民が人事を盡さずして、神靈の加護を仰ぎ得らる可きではないと考へる。過去の大海戰は、斯くして皇軍の大捷に歸したが、未來の海戰は如何なる結果を呈するであらうか。今や三笠、敷島の如き當時の戰艦は己に全盛を過ぎて、舊式と化し去り、所謂ドレッドノート型若くは超ド型ならざれば軍艦にあらずと謂ふ時代となつた。吾人は勿論火繩銃でも竹槍でも、與へられたる武器を以て極力奮闘し、唯だ斃れて後已むのが本分であるから、敢て彼是と道具選みをする譯ではないが、過去の經驗より將來を推度すると、如何にしても皇國の興廢が気に懸つて、安んぜざる處がある、日本海々戰の決戰は三十分間で片が付いたが、武器の進歩したる未來の海戰は十五分間で勝敗が決するのであらう。

最後に述べられていること、今次大戰に顧みて、我々の肺腑に迫るものがある。

（同型戰艦「朝日」）
戰艦「三笠」

排水量15,400トン、速力18ノット、30cm砲×4、15cm砲×14、発射管×4、英ヴィッカース建造、明治35年就役

聯合艦隊解散の辞

連合艦隊は戦終り明治三十八年十二月二十日をもって解散し、翌二十一日横須賀で解散式が行はれた。その時東郷司令長官の述べた所信は流石である「勝って兜の緒を締めよ」という言葉は、初めて使はれた例えではないが、「百発百中の一砲能く百発一中の敵砲百門に対抗し得る」とはこのとき初めて言はれた言葉で、後世によく引用されるに至った。秋山参謀の起案したものと伝えられている。原文には句読点はないが、読み易いように句読点をつけて引用する。

二十閲月の征戦已に往事と過ぎ、我が聯合艦隊は今や其の隊務を結了して、茲に解散する事となれり。然れども我等海軍々人の責務は、決して之が為に軽減せるものにあらず。此の戦役の収果を永遠に全くし、尚益々国運の隆昌を扶持せんには、時の平戦を問はず先づ外衝に立つべき海軍が、常に其の武力を海洋に保全し、一朝緩急に応ずるの覚悟あるを要す。而して武力なるものは、艦船兵器等のみにあらずして、之を活用する無形の実力に在り。百発百中の一砲能く百発一中の敵砲百門に対抗し得るを覚らば、我等軍人は主として武力を形而上に求めざる可らず。

近く我が海軍の勝利を得たる所以も、至尊の霊徳に頼る所多しと雖も、抑亦平素の練磨其の因を成し、果を戦役に結びたるものにして、若し既往を以て将来を推すときは、征戦息むと雖も安じて休憩す可らざるものあるを覚ゆ。惟ふに武人の一生は連綿不断の戦争にして、時の平戦に由り其の責務に軽重あるの理無し。事有れば武力を発揮し、事無ければ之を修養し、終始一貫其の本分を尽さんのみ。過去の一年有半彼の風涛と戦ひ寒暑に抗し、屢頑敵と対して生死の間に出入せしこと、固より容易の業ならざりしも、観ずれば是れ亦長期の一大演習にして、之に参加し幾多啓発するを得たる武人の幸福、比するに物無し、豈之を征戦の労苦とするに足らんや、苟も武人にして治平に偸安せんか、兵備の外観巍然たるも、宛も沙上の楼閣の如く、暴風一過忽ち崩倒するに至らん。洵に戒むべきなり。

昔者神功皇后三韓を征服し給ひし以来、韓国は四百余年間我が統理の下にありしも、一たび海軍の廃頽するや忽ち之を失ひ、又近世に入り徳川幕府治平に狃れて兵備を懈れば、挙国米艦数隻の応対に苦み、露艦亦千島樺太を覬覦するも、之と抗争すること能はざるに至れり。飜て之を西史に見るに、十九世紀の初めに当りナイル及びトラファルガー等に勝ちたる英国海軍は、祖国を泰山の安きに置きたるのみならず、爾来後進相襲で能く其の武力を保有し、世運の進歩に後れざりしかば、今に至る迄永く其の国利を擁護し、国権を伸張するを得たり。蓋し此の如き古今東西の殷鑑は、為政の然らしむるものありしと雖も、主として武人が治に居て乱を忘れざると否とに基ける自然の結果たらざるは無し。我等戦後の軍人は深く此等の実例に鑒み、既有の練磨に、加ふるに戦役の実験を以てし、更に将来の進歩を図りて時勢の発展に後れざるを期せざる可らず。若し夫れ常に聖諭を奉体して孜々奮励し、実力の満を持して放つべき時節を待たば、庶幾くば以て永遠に護国の大任を全うすることを得ん。神明は唯平素の鍛錬に力め、戦はずして既に勝てる者に勝利の栄冠を授くると同時に、一勝に満足して治平に安ずる者より直に之を褫ふ。古人曰く勝って兜の緒を締めよと。

聯合艦隊司令長官
東郷平八郎大将

下瀬火薬と伊集院信管

聯合艦隊の砲弾の特徴は、下瀬火薬と伊集院信管にあった。

海軍技師下瀬雅允が、爆発試験に傷つきつつも開発した下瀬火薬は、ピクリン酸を主成分とした爆発力及び瞬間燃焼力の極めて強い火薬だった。その力はロシヤの砲弾の二倍もあった。

また海軍大佐伊集院五郎の開発した伊集院信管は、砲弾が飛行中にその旋回によって遠心子が作動し、安全装置が外れる仕組みで、非常に鋭敏な信管だった。

そのため我が砲弾は、貫徹力はなかったが、敵艦に触れるだけで大爆発を起し、艦上の構造物を破壊し人員を殺傷し、大火災を起した。敵艦に命中しなくても近くの海面に着弾して爆発しても、艦上の人員を殺傷した。

通常艦砲の砲弾は装甲板を貫徹し、内部で爆発し船体に穴を開け、浸水により艦を沈めようするものであるがこの海戦で我が方が使った砲弾は、火災を起しやがて沈没に導くというものだった。火災によって戦闘力を失い、漂流したロシヤ艦が多かった。

日露戦争百周年に因んで両軍の挺進隊活躍の跡を辿る

挺進隊とは主力から遠く離れ、敵後方施設の破壊、交通遮断、擾乱等に任ずる部隊で、航空機の無い時代には騎兵が担当した。日露両軍ともこの作戦行動を採用したので、両者を対比しその依って来るところを眺めてみたい。

その前に両軍の保有していた騎兵の兵力について、認識しておく必要があるので、先ずそれを述べる。

彼我騎兵の兵力

[ロシア軍]

当時のロシアの騎兵総兵力は一〇八五個中隊で、開戦前極東に九八個中隊が配置されていた。本国からどれほど派遣されて来るか、我が情報見積の正確な数字は残っていないが、現に満洲に進出したものは、二二二個中隊に及んだ。我が三倍半である。

この膨大な騎兵をどのように編成していたかというと、歩兵師団には騎兵一個中隊を、歩兵軍団（二個師団）にはこれとは別に三個中隊を持っていた。これは日本の師団騎兵（三個中隊）に該当すみもので、我と大差はない。彼の特色というよりは欧州先進国では、騎兵師団や騎兵軍団を持っていた。騎兵軍団は騎兵師団二個と狙撃旅団一個より成り、騎兵師団は二個旅団、旅団は二個聯隊、聯隊は六個中隊、従って師団は二四個中隊で、そのほか騎砲一個大隊（一二門）と乗馬工兵を持っていた。戦争末期に満洲にいた戦略騎兵は、六個師団と九個聯隊計一九八個中隊だった。あとから述べるが、彼の戦略騎兵に対抗する我が方は、編成上は僅か二個旅団、一六個中隊と二機関砲隊に過ぎなかった。

[日本軍]

我が国は日清戦争に勝利を得たものの三国干渉に屈した。相手はロシアである。約五年間に陸軍の常備兵力は七個師団から一三個師団に倍増した。中でも名にし負うロシア騎兵を相手に満州の野で戦うとなると、日清戦争当時の各師団二個中隊、計一四個中隊の騎兵では手も足も出ないのは明らかである。当時ロシア騎兵の総兵力は、先に述べた通り千個中隊を越している。そこで先ず手始めに師団騎兵を三個中隊として軍旗を授与した。日本には軍団という単位はないが、師団についてみれば彼我同等である。恐るべきは敵の騎兵師団や騎兵軍団である。

我が国の戦略騎兵は三十三年から三十五年にかけて第一旅団と第二旅団が創られた。馬匹資源の制約でそれが精一杯だった。十三乃至十六聯隊で習志野に駐屯した。聯隊は平時は五個中隊で動員編成は四個中隊、なお動員により旅団に機関砲隊が創られることになっていた。機関砲と言っても砲ではなく野砲の砲架に機関銃を載せたもので、二騏で輓曳した。一隊は六門だった。

二個旅団で一六個中隊、騎兵中隊数ではロシアの一個師団に近いものになるが、騎砲などはなく師団編成をとるには程遠いものだった。なお戦争中に四個師団新設されたので、戦争末期には師団騎兵はもう四個聯隊増えたことになる。

この劣勢な騎兵でどのように戦ったかは追々述べるが、秋山好古は明治三十六年ロシアのシベリヤで行われた大演習を視察し、帰ってから言うには、

――騎兵は数に於いて勿論比較にならず、馬匹も亦彼が勝っている。それであるから我は戦術と馬術と勇気とにおいて勝つほかはない――

彼我騎兵の装備

携帯兵器については大同小異なので省略するが、ロシアは騎兵の種類によって槍を持っているものがある。

ロシアの騎兵師団は二乃至四の機関砲隊を持ち、機関砲はマキシム式で後の機関銃である。我が騎兵旅団には機関砲六門を持ち、それはホチキス機関銃である。

ロシアの騎兵師団には二個中隊の騎砲大隊があり、中隊は口径八七ミリの騎砲を六門を持つ。

我が両旅団は編制上騎砲はなかったが、第一旅団は第二軍より野砲一個中隊の配属を受け、第二旅団は第三軍より戦利速射砲と人員の配属を受け、それぞれ騎砲とした。

31式野砲
騎兵第１旅団が騎砲として使った

活躍の跡

（日本軍）日本騎兵の父と言われた秋山好古はかねてから騎兵挺進行動のことに思い巡らしており、明治30年乗馬学校（後の騎兵学校）長当時騎兵監に提出した「本邦騎兵用法論」にも、一項日設け挺進騎兵について論述している。

後で詳しくのべるか、偉勲をたてた永沼挺進隊長永沼中佐は、自分は秋山将軍に習った通りやったに過ぎない、と述懐している。

日露戦争では永沼、長谷川の両挺進隊が敵の後方で大活躍し、単に物的損害を敵に与えただけでなく、後方警備のため多くの決戦兵力を割かざるを得ないようにした。以下資料の比較的豊富な永沼挺進隊について述べ、長谷川挺進隊については若干を付記する。

明治37年の終わりから38年にかけて、沙河の対陣間我が満洲軍の左翼の広大な地域を秋山支隊が守っていた。秋山支隊とは騎兵第1旅団長秋山好古少将（士官生徒3期）の指揮下に、固有の旅団のほか6個の師団に属する各騎兵聯隊を抽出して指揮下に納めたもので、我が軍としては最大の騎兵部隊だった。秋山将軍はかねてから挺進隊の派遣を考えており、總司令部の認可をえて先ず永沼挺進隊を編成し派遣した。その編成は騎兵第5、13、14の聯隊から各一個小隊を騎兵第8聯隊長永沼秀文中佐（士官生徒8期）の下に差し出し、二個中隊総勢176騎の部隊とした。

挺進隊の出発光景

行動開始

挺進隊は明治38年1月9日秋山支隊長以下に見送られ蘇麻堡を出発した。弾薬や爆薬は所要量を携行していたが、人馬の糧秣は行く先々で調達しなければならない。総行程2千粁70余日、極寒の地を行動したのであるが、その中で新開河の橋梁爆破と張家窪子の乗馬戦について述べる。

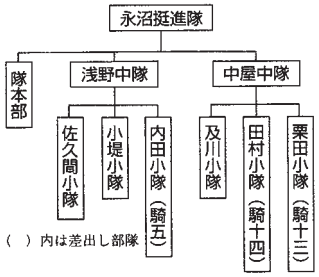
新開河の橋梁爆破

敵の第一線から500粁ほど北方の新開河の鉄道橋梁を目標にして、遠く西に迂回して北進した。日本軍に協力する馬隊が同行していたので、途中敵小部隊に遭遇したが馬隊に対処させた。2月11日夜午前2時頃目標の手前4粁半位と思われる袁家屯という小部落に到達し、ここで下馬し徒歩で東進し新開河に出て、凍結した河の上を南進した。やがて前方に汽車の走るのが見えたので攻撃の為展開した。浅野中隊は右岸、中屋中隊は左岸の援護隊、宮内大尉（本部付）は小堤、栗田の両小隊を指揮して爆破作業という部署だった。

前進するや先ず右岸の浅野中隊が敵斥候と遭遇し撃退した。左岸には石造の監視家屋があり、中屋中隊の田村小隊はこれに突入し混戦乱闘となった。敵弾は作業隊にも注がれ、負傷者も出た。すべては暗夜のなかである。作業隊は橋脚の3箇所に合計120kgの爆薬を装着したが、敵弾があたり燃焼した個所もあり斉発せず、3回復行し橋脚が傾き軌条1本が落下した。作業小隊長小堤辰次郎少尉は頭と背中を敵弾で負傷したが、装着の不備個所を直して廻り最後に退避した。

左岸の戦闘では田村少尉と望月上等兵が石造家屋に突入し戦死した。暗夜のことで両名の戦死は確認できなかったが、露軍が鄭重に埋葬し休戦後墓標が確認できた。挺進隊は田村少尉と望月上等兵を探したが見当たらず、夜が明けかかったので小堤少尉以下8名の負傷者を扶けて、手馬の位置袁家屯に引上げた。

さきに馬隊が敵から奪取した馬車が



隊長　中　　佐　永沼秀文
本部　大　　尉　宮内英熊
　　少　　尉　沼田浜之助
　　三等軍医　軍地三郎
　　下士2　兵卒10　蹄鉄工長1
　　看護卒1　通訳2　計19

浅野中隊
　中隊長　大尉　浅野力太郎
　　下士1　通訳1
　小隊長　中尉　佐久間武志
　小隊長　少尉　小堤辰次郎
　小隊長　少尉　内田　登
　　各小隊下士以下24　計78

中屋中隊
　中隊長　大尉　中屋重業
　小隊長　中尉　及川虎彦
　小隊長　少尉　田村馬造
　小隊長　少尉　栗田博愛
　　計78

総員隊長以下176騎

あるので、負傷者を馬車に乗せ同行したが行進捗らず、途中二晩宿営し14日午後4時頃要坨子という部落に着いた。これよりさき馬隊の通報により、敵の騎兵が追跡していることを察知していた。

張家窪子の乗馬戦

宿営の準備をしていると砲撃を受けた。敵との距離4千米位あったが、毛の帽子をかぶり白馬を交え敵の騎兵であることは明瞭だった。騎兵の戦闘はたとえ敵を撃破しても、我が方も損害を被ることは覚悟しなければならない。既に8名の負傷者を馬車に乗せて連れてきている。これ以上損害を出せば行動はますます鈍重となる。戦闘の決心は容易につかないところであるが、永沼隊長は断固攻撃するに決した。本部付の宮内大尉との問答「やりますか」「やる」「本当にやりますか」「本当にやる」と言ったと伝えられている。

戦後永沼中佐は次のように述懐している。

・従来大目的の為敵に対しては主として馬隊をしてあたらしめたるも、既に第一の目的を達したる刻下の時期において、なお戦闘を避くるときは将来馬隊との協同上面白からぬ関係を生ずべきこと。

・たとえ今日離脱し得ても敵は更に追撃し来るは当然なり。先日来昼夜兼行したる挺進隊は離脱するの余力の存せざること、若かず寧ろ死地に投じて活路を求めんとする決心は忽ち胸中に確立せり。宮内大尉に命じて背進しつつある本隊に対し左の命令を伝えしむ云々と。

かくして史上有名な永沼挺進隊の張家窪子月下の襲撃となった。

挺進隊は乗馬のまま突進し、千700米ばかり先の高地に到着して見ると、敵は既に退却し前方700米の林に進入しつつある。直ちに徒歩戦を命じ林の中の敵に射撃を加えると、敵も射ち返してきたがやがて日没となり目標が見えなくなった。

隊長は直ちに乗馬追撃を命じ沼田少尉以下6騎を尖兵とし、その後を隊長を先頭に中屋中隊、浅野中隊と縦隊で張家窪子に向かい突進した。張家窪子の北端に至るや、突如砲弾が頭上を掠め小銃の乱射を受けた。部落は土塀に囲まれていて突入出来ない。隊長は先頭に立って右に迂回し、土塀に沿って南進した。敵砲兵は土塀の内側にあって繋駕して退却を開始、敵騎兵約50騎がこれに跟随するのが月明かりで認められた。疾駆すること約千米土塀の切れめがあった。隊長の「左へ回れ！襲え！」の号令で本部と中屋中隊は砲を有する敵の中へ突入、忽ち混戦乱闘となった。名状すべからざる混戦の後敵の砲一門を奪い、万歳を叫んだ。

一方浅野中隊は中屋中隊に続行していたが、砲撃をうけたので横隊に開いた時、中屋中隊が右に迂回したのを見失い、土塀の低い所があったのでこれを飛び越え部落内に突入し、敵主力と格闘となった。敵は200騎、我は70騎、しかも我が馬は連日の行軍で疲労甚だしく、遂に浅野中隊長以下16騎を失ったが、敵も若干の死傷者を残して潰走した。この戦闘で戦力半減した挺進隊は、3月5日大蘭営子に到着しここで再編成し、小部隊ごとに分かれ敵の通信線の破壊や糧秣集積所の焼夷などを行った。

帰　還

3月24日騎兵第8聯隊の所在地大石橋に全員帰着し、3月29日、編成以来84日をもって挺進隊は解散した。

戦　果

敵に与えた物的損害は僅かだったが、そのあとの長谷川挺進隊の活躍も併せて敵に与えた脅威は甚大なものがあった。露軍が新に鉄道警備に割いた兵力は、歩兵、騎兵、砲兵あわせて3個師団分にも及んだ。

ロシヤの騎兵

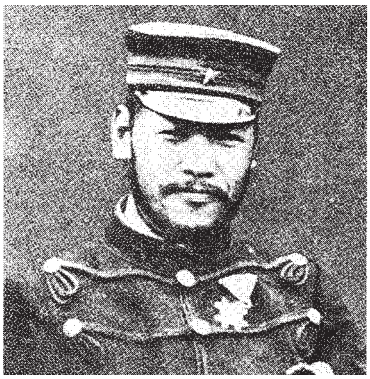
ドイツの画家の描いた日露騎兵の戦闘
張家窪子の戦闘を描いたものではない

長谷川挺進隊

挺進隊第2陣として1月16日出発した長谷川戌吉少佐（1期）の率いる第2挺進隊は、永沼挺進隊より更に遠い長春西北方農安付近を目標に前進した。2月18日午前2時張家湾停車場北方において鉄道及び通信線を破壊した。更に松花江を渡って北進し、2月21日夜社里店の兵站司令部を襲撃した。3月8日西シュルガに於いて敵騎兵約500騎の包囲をうけたが、一角を破って脱出し3月19日奉天に帰還した。

長谷川少佐は騎兵第1旅団縦列（大行李）長だったが、挺進隊に参加したいと熱望し永沼挺進隊出発に際し脱走して参加しようとし、永沼中佐に諭されて思いとどまった。その熱意が認められ第2挺進隊の指揮官に選ばれた。長谷川挺進隊の行動は、永沼挺進隊のような華々しい戦闘はなかったが、松花江の北まで足跡を伸ばし敵の後方に脅威を与えたことは著しいものがあった。出発地から社里店までは、直距離にして450粁、東京から大きく迂回し姫路まで行く距離に相当する。63日間一物の補給も受けず極寒の広野を行動した成果は、遥か北満まで敵の決戦兵力を割くに至らしめたことにある。

長谷川少佐は、その後戦争中に編成された騎兵第18聯隊長（14D）に補せられた。この師団は戦争終結後も暫く満洲に駐留した。聯隊が公主嶺に駐屯していたとき、部下経理官に不正事件があった。長谷川中佐は功三級金鵄勲章を賜る内示があったが、部下監督不行届を痛感し拝辞を申し出た。しかし容れられず勲章が送達されると聞き、聯隊長室で自決した。



長谷川少佐

永沼少尉

（露軍）ミシチエンコ騎兵団の営口挺進

総司令官クロバトキンは、38年1月1日旅順が陥落し、乃木軍が北上するので、大騎兵団を挺進させ海城、大石橋、蓋平の地区における鉄道を徹底的に破壊すると共に、営口を占領して、同地にある日本軍の物資を灰燼しようと遠大な計画をたて、これをミシチエンコ中将に命じた。

ミシチエンコの指揮下部隊は騎兵約75個中隊、砲22門を擁する大部隊で、それを次の縦隊区分で南下した。

各縦隊の名称をその指揮官名で呼んだが、記述を簡単にするため、東側（日本軍に近い方）から番号をつける。

〔第1縦隊〕長テレシコフ少将、ドン哥騎兵第4師団、コーカサス哥騎兵旅団、護境哥騎兵第8中隊、後貝加爾哥騎砲兵第2中隊

〔第2縦隊〕長スウェシニコフ大佐、チタ哥騎兵第1聯隊、護境哥騎兵第40中隊、駄馬輸送隊5隊（1500頭）

〔第3縦隊〕長アブラモフ少将、ウラル後貝加爾哥騎兵師団（一部欠）、猟兵隊4隊、護境哥騎兵第41中隊、後貝加爾哥騎砲兵第1中隊　赤十字衛生隊1隊

〔第4縦隊〕長サムソノフ少将、集成竜騎兵師団、護境哥騎兵第3中隊、騎砲兵第20中隊、砲兵半中隊、赤十字衛生隊一隊

縦隊区分は右の通りで、第1縦隊には別に鉄道破壊に任ずるコザック騎兵6個中隊が同行する。

各兵は弾薬200発を携行するほか、一聯隊につき2万4千発を馬車輸送する。糧食は兵2日分、馬1日分を携行し、別に人馬とも2日分を駄馬輸送隊で輸送する。

第2縦隊は出発にあたり輜重の手違いで遅れたため、第3縦隊に続行するようになった。とにかく、恐るべき大部隊であった。

ミシチェンコ

南下途中の戦闘

各縦隊は1月8日四方台（奉天西南五十粁）地区に集結し、翌9日南進を開始した。大遼河と渾河の中間地区を南下し、蛤蜊河付近で渾河を渡り、牛荘城を経て営口に向い、途中一部を派

遣して鉄道を破壊する計画だった。

この進路添いの地域は我が方では遼東守備軍の担当で、要地に後備歩兵の大隊以下の部隊を配置しており、第三軍は北上にあたり騎兵第一聯隊をもって側背掩護に任じさせていた。

騎兵団の南下するにつれ数個所において日本軍と衝突したが、中でも小馬泡（遼陽西方50粁）では、1月10日我が守備隊である後備歩兵一個中隊に騎兵第一聯隊の一部が加わった部隊とアブラモフ少将の縦隊とが激戦を展開した両軍の兵力は露軍が桁違いに優勢で、日本軍は囲みを破って脱出し牛荘城にのがれた。ミシチェンコはこのような途中の戦闘にかかわることを嫌ったが、戦闘した部隊は死傷者収容に手間取ったという。

次に衝突したのは牛荘城（営口東北方70粁）である。此所の守備隊も後備歩兵一個中隊と後備騎兵若干だったが、小馬泡から脱出した部隊が加わっていた。二日アブラモフ少将の縦隊が近着くと守備隊は射撃を開始したので、砲兵を展開して砲撃を始めようとしたところ、日本軍は退却してしまったと、露軍は記録している。到底かなわぬ敵とみて守備隊は営口に撤退したのであろう。

鉄道破壊

ミシチェンコは出発にあたり鉄道破壊に任ずる部隊を編成し、テレショフ少将の縦隊と同行させた。各隊は騎兵一中隊より成る。10日4時55分蛤蜊河付近を南下中、第一隊を海城北方に、第二隊を海城南方に向はしめ、第三隊はどういう訳か出さなかった。第一隊は道に迷い目標にした橋梁を発見できず、海城北方の線路には出たが、明け方になったので線路の一部を爆破して、牛荘城付近でテレショフ縦隊に戻った第二隊は海城南方に向う途中で土民の言より、目標としていた橋梁には日本軍の砲を有する歩兵二個中隊が警備していると聞き、進路を変更し海城北方二粁の鉄道線路上に出て軌条を爆破したが、偶々遼陽方向から列車が来て無事通過して行った。そこでなおも橋梁のある所を探していたが、5時30分になっても発見できず帰途についた。

以上は露軍の記録だが、我が軍の記録には敵兵約一万二縦隊となり南下しているのを知り、各兵站司令官をして益々警戒を厳にさせていたところ、午前5時30分頃海城北方約二里に於いて敵の設置した爆薬が列車通過の際爆発し、機関車の車輪が破損したが、徐行して海城に到着することが出来た。調べてみたら爆薬二六個を装置したらしく、うち爆発したのは一二個で軌条二〇本電柱二本を破壊されたが、九時には修理は終わった。となっており、露軍の記事と若干違うところがあるが、同一事実であろう。要はたいした成果を上げていないことが窺える。

10日に派遣されなかった鉄道破壊の第三隊は、牛荘城奪取後の11日夜半大石橋北方に派遣されたが、終夜道に迷い鉄道線路に到着出来ず一度帰ったが、再び派遣され大石橋北方約三千米のところで、鉄道及び電信線六百米を破壊した。またサムソノフ少将縦隊の龍騎兵の斥候は、12日午前6時大石橋営口間の鉄道線路及び電信線を破壊した。

日本軍の対応

1月10日小馬泡が攻撃を受け、その夜鉄道が破壊され、敵騎兵大部隊の南下に対応して総司令部では、11日後備歩兵第十七聯隊を遼陽で遼東守備軍司令官の指揮下に入れ、更に第三軍に属し北上中だった第七師団及び第九師団より各歩兵一個聯隊を、海城及び牛家屯に向い鉄道輸送するよう手配した。

11日午後牛荘城が危ういとの報に接し、また海城付近にも敵の騎兵二百ほど現れたので後備歩兵第八聯隊（一個大隊欠）を営城子（大連西北22粁）より鉄道で牛家屯に差向けた。そして途中普蘭店と金州の守備隊から一個小隊を抽出し、これに加えさせた。

牛家屯の警備と露軍の一部の攻撃

牛家屯は営口の東に隣接した町で、営口兵站司令部は此所にあった。後備歩兵第三十三聯隊第一大隊（約半分は他方面に在って欠）が警備していたが牛荘城守備隊が退却してきて加わり、補助輸卒隊の執銃者二百もあり、工事を急ぎ警戒を厳にしていた。

12日午後四時過ぎ、大石橋より後備歩兵第八聯隊第二大隊等を載せた列車が行進して来たが、敵の砲兵がこれに射撃を加え、騎兵の小部隊も現れたので車上から射撃し、強行突破し牛家屯に到着した。

夕刻敵砲兵は営口にある倉庫を射撃し火災が起きたが、補助輸卒や軍夫が危険を冒し消火した。射撃は夕刻止んだので、敵の放列のあった部落に対し夜襲しようと、一個中隊が出撃したが有力な敵が来襲したので陣地に戻り防禦した。この夕刻それ以外の陣地も攻撃をうけたが、守備隊の奮戦により撃退した。この晩増援の後備歩兵第十七聯隊（一個大隊欠）は、途中まで列車で来て後は徒歩で到着した。

ミシチエンコの営口攻撃部署

11日夜ミシチエンコ騎兵団主力は牛荘城南方曽家屯付近に宿営し、営口攻撃を準備した。攻撃部署は次の通り。

一、ホラノフ大佐の集成支隊（騎兵十五個中隊、猟兵四個隊）営口停車場を攻撃

二、シユワロフ大佐支隊（騎兵五個中隊）大石橋―営口間の鉄道破壊

三、テレシヨフ少将縦隊（騎兵二十二個中隊）前石橋子に至り同地北方道路の東側に開進　但しストヤノフ少将は騎兵第四師団を率い崔家蓆房に前進し牛家屯に向い脅威す

四、サムソノフ少将縦隊（騎兵十一個中隊、騎砲兵一個中隊、砲兵半中隊）前石橋子北方道路西側に開進

五、アブラモフ少将縦隊（騎兵十一個中隊）後石橋子に至り予備隊となり輸送隊と連絡

六、スウェシニコフ大佐縦隊（騎兵五個中隊）東昌堡付近に至り車廠を作り予備隊と連絡

注　部隊は数だけのせたが部隊名が書いてある。宿営地出発時刻、前進経路も示してある。

攻撃開始

12日諸隊より一時間早く出発して大石橋より来る鉄道を遮断する任務のシユワロフ大佐支隊は、爆薬携行部隊の到着が遅れた為、他の縦隊より出発が遅れた。鉄道線路に来たとき日本軍の兵員を載せた列車に強行突破されてしまった。日本軍の部隊は後備歩兵第八聯隊だと思う。

テレシコフ少将及びサムソノフ少将の縦隊は、前石橋子（営口東北方4粁）に午後四時頃到着した。同時騎兵団の全砲兵はミシチエンコの命により花英台及び付家屯（何れも営口東北方3粁）付近に陣地を占領し、5時30分より営口停車場に向い射撃を開始し、停車場や倉庫に火災を発生させた。ストヤノフ少将の率いる部隊は崔家蓆房（牛家屯東方1粁）に前進し牛家屯に脅威をあたえた。（ロシアの書物に載っていることだが、これらの縦隊は何をしたのか次の部隊以外はよく判らない）

営口停車場攻撃に任ずるホラノフ大佐支隊は、砲兵の停車場射撃が始まったので攻撃前進準備中、ミシチエンコ中将より停車場に敵はいない砲兵射撃を中止するのですぐ停車場を破壊せよと命ぜられた。そこで徒歩前進を開始したところ、停車場の火災に照し出され、俄然日本軍の猛射を受け隊伍混乱し、勝手に退却する者も出始めた。ホラノフ大佐は日本軍の防備堅固なところに奇襲しても勝目がないとして、手馬の場所に引上げた。

この時ミシチエンコは砲兵陣地に在ったが、日本軍の部隊がなお大石橋方面から営口に増援し、更に牛荘城付近にも日本軍が増強し、大遼河の渡渉場を遮断するかもしれない。鉄道線路の警備も強化され、鉄道を遮断することも覚束ない。故に断然退却し本軍の右翼に合しようと決心した。

ミシチエンコの退却行

わが満州軍総司令部では営口が攻撃されるより前、敵騎兵大部隊の南下の情報に接しこれを掃討するため、歩兵第五聯隊（一個大隊欠）、第三十一聯隊の一個大隊、砲兵第十七聯隊の一個大隊（一個中隊欠）、騎兵第一聯隊（一個中隊欠）、後備騎兵一個中隊をもって歩兵第五聯隊長津川大佐指揮の下、一支隊を編成しこれに当たらせた。津川支隊は11日行動を起したがなかなか敵の所在が掴めなかった。

14日に至り敵主力の存在判明し、牛荘城西方遼河右岸の三叉河においてテレシヨフ少将の縦隊と交戦し、これを北方に敗走させた。

ミシチエンコ騎兵団は16日沙河対陣中の第二軍主力の位置に到着し、編成を解いた。第二軍が攻勢に出て黒台会戦が起きたのは25日である。

日本軍の後方地域に配置した兵力

ミシチェンコが活躍した時点に、遼東守備軍が持っていた警備兵力を示す資料は見当らないが、4月27日付で遼東守備軍は遼東兵站部に改編されるのであり、そのとき警備部隊について「機密日露戦史」に出ているので、転記する。

後備歩兵第四旅団

後備歩兵第八聯隊（2個大隊より成る以下同）

後備歩兵第九聯隊

後備歩兵第三十八聯隊

後備歩兵第三十三聯隊

後備歩兵第三十七聯隊

後備歩兵第四十一聯隊第一大隊

後備歩兵第四十五聯隊第一大隊

第二師管国民歩兵第一大隊

第四師管国民歩兵第一大隊

第三師団後備騎兵第一中隊

第六師団後備騎兵第一中隊

第三師団後備工兵第一中隊

第十一師団後備工兵第一中隊

臨時電信隊

右以外に補助輸卒隊（陸上）三六隊

当時の兵制では現役部隊は現役三年と予備役四年四月の兵をもって充て、後備部隊は予備役終了後五年間の後備役の兵をもって充てる。国民兵役は後備役または第一補充終了者が服す。第一補充とは所謂籤のがれで七年四月間となっていた。

彼我両者の挺進隊の比較

兵力の差異は比較にもならない。ミシチェンコ挺進隊の主体である騎兵中隊は七五個、これに比べ我が永沼挺進隊は二個中隊、長谷川挺進隊は一個中隊に過ぎない。両軍の手持ち騎兵の兵力については冒頭でのべた通りであるが、我が軍は大部隊を出したくても出せなかったのではない。初めから小部隊の方が行動に適していると思っていたからである。挺進隊を出したのは秋山支隊長だが、永沼中佐に一個中隊の差出しを指示したが、永沼中佐は自ら部隊を率いて行くことを懇望したので秋山少将は固有の部下である騎兵第一旅団の十三、十四の両聯隊から各一個小隊を、更に当時指揮下にあった騎兵第五聯隊から一個小隊を永沼中佐のもとに差出させ、二個中隊の挺進隊を編成した。集成部隊であったことは両者同じである。違うのは指揮官の決意にある。

ミシチェンコは主任務である営口襲撃で、砲撃によって停車場と倉庫に火災を起こさせただけで、退路が遮断されることを恐れ撤退してしまった。永沼中佐は違う。新開河の橋梁爆破の際途中で敵の反撃があったとしても、全滅を賭して強行したであろう。永沼中佐の気迫の片鱗は、張家窪子の乗馬戦に見ることが出来る。

張家窪子の敵に対し断固攻撃の決心をしたことは既に述べたが、そのあとまた凄まじいばかりの闘志を現している。砲を有する敵を潰乱に陥れた直後、浅野中隊はもとより中屋中隊長とも連絡がとれなかった時期があった。月あかりを透かして見ると、前方を100騎以上の敵が移動している。永沼中佐は両中隊を全滅させて引上げつつある敵と判断し「中屋浅野両中隊の弔い合戦だ」と、手元にあった僅か20騎ばかりでこの敵を襲撃しようとした。及川中尉が必死になって止めたので隊長も思いとどまり、戦闘は終わりを告げたという。

この敵は戦闘に敗れ砲まで奪われ、相手が100騎ばかりの小部隊とはとても思えなかったろう。そして砲を奪われたことを繕うため、日本の騎兵大部隊と戦ったと報告したのだろう。唯でさえ後方に対する感受性の強い総大将クロパトキンをして後方警備に大部隊を割かせることになった。

次はこれに従う将兵のことだが、小堤少尉については前号で述べたので、それを見て頂きたい。もう一人、新開河橋梁爆破の際左岸掩護隊に属し、敵の石造家屋に突入戦死した田村少尉と望月上等兵の奮戦振りは、暗夜のことで判らず伝はっていないが、敵が感心して鄭重に埋葬し墓標を建て、次のように書いてあった。

〔ここには、范家屯停車場より二四七露里の鉄橋攻撃で、一九〇五年一月二九日夜戦死せる日本軍将校と下士官を埋葬してある、安らかに眠り給え〕

ロシア兵をしてこのように鄭重な行動をとらしめたのは、さだめし勇敢に突入したのであろう。これに比較して営口停車場攻撃に任じたホラノフ大佐支隊はどうであろう。彼ら自身の書いた戦史にも七〇〇米の距離で日本軍の猛烈な射撃を蒙り、隊伍混乱し指揮の統一を欠き…と述べている。そして支隊長は退却の決心をしたのだから全くお話にもならない。

それともう一つ腑におちないのは、ホラノフ支隊の構成について書かなかったが、同一聯隊から出ているのは四個中隊で他は一一個の聯隊から各一個中を出して計一五中隊となっている。破れるべくして破れたと言はざるを得ない。まだ挙げれば沢山あるがこのくらいにしておく。

我ら明治の軍人に学ぶことが少なくない。

ロシヤ軍は、左岸の石造家屋に突入して戦死した田村少尉と望月上等兵を埋葬し、このような墓標を建てた。停戦になってから鉄道を何処まで日本に譲るか決めるにあたり、日本軍は此処まで進出したという物的証拠となり、長春までが我が領有と決った。

田村少尉

望月上等兵

日露戦争中の御製に拝す大御心

よもの海みなはらからと思ふ世になど波風のたちさわぐらむ

あらはさむときはきにけりますらおがとぎし剣の清き光を

うつせみの世のためすすむ軍には神も力をそへざらめやは

末つひにならざらめやは国のため民のためにとわが思ふこと

吹上のそのふの花をいかにそと問ふ日もなくて春のくれゆく

はなとりの上も思はでよろづ民くにに心をつくす春かな

ゆくすゑはいかになるかと暁のねざめねざめに世を思ふかな

暑しともいはれざりけりにえかへる水田に立てるしづを思へば

こらは皆軍の場にいではてて翁やひとり山田もるらむ

国おもふみちにふたつはなかりけり軍の場にたつもたたぬも

ひさしくもいくさのにはにたつひとは家なる親をさぞ思ふらむ

いたでおふ人のみとりに心せよにはかに風のさむくなりぬる

寝覚めしてまづこそ思へつはものの たむろの寒さいかがあらむと

暁のねざめのとこにおもふこと国と民とのうへのみにして

わがこころ千里の道をいつこえて軍の場をゆめにみつらむ

軍人すすむ山路をまのあたり見しは仮寐のゆめにぞありける

窓をうつ霰のおとにさめにけりいくさの場にたつとみし夢

国のためあだなす仇はくだくともいつくしむべき事な忘れそ

たたかひの場にすすみて乗る人と共にたふれし齣はいくらぞ

つはものの上にそへても思ふかなひきたる齣もつつがなきやと

たたかひのいとまある日は軍人手なれの齣をいつくしむらむ

たたかひの場はいかにと思ふかないななく齣の声をきくにも

いさみたつ齣をつらねて軍人かへりこむ日もちかづきにけり

人ならばほまれのしるし授けましいくさのにはにたちしあらごま

谷寿夫著「機密日露戦史」より

著者が陸大教官当時学生に講義したもの

挺進騎兵隊および遠距離斥候活躍の真相

その一、永沼挺進騎兵隊

説述の理由

後方擾乱の特別任務隊と相まちて研究の要あるをもってなり。挺進騎兵隊行動は戦史第七巻末第三七五頁に詳記しあるをもって、これを省略し単に裏面上の件のみを左に述べようと思う。

永沼秀文中将談

㈠ 挺進隊派遣の動機について

（戦史第三七五頁にあるもその真相は大に異なる）

本挺進隊の行動は一見大規模なるが如きも大局より見れば小規模なり。

そもそも満州の結氷期を利用し且つ敵の後方鉄道破壊その他の擾乱をして、あたかも目前に迫れる奉天会戦の初期に及ぼさしめんと欲したる永沼中佐（当時騎兵第八聯隊長）は、三十七年末よりこの壮挙を満洲軍総司令部に意見具申する所ありしが、兒玉総参謀長は未だ時期過早なりとの一言の下にあえて賛辞を与えざりき。けだし総参謀長この言辞の裏面には未だこの種の行為の成功が優勢なる露騎兵散在裏に予期し得べからざるものとして当時の総司令部は研究の価値なきものとして不問に附せしを裏書するものであった。

然るに第二軍司令部にありてはこの挙を耳にし一日永沼中佐を招致し具体案をそれとなく聴取する所ありしが、その結果当時総司令部の隷下にあった第八師団中より騎兵第八聯隊を第二軍中の秋山支隊に配属することとなり遂に表面上秋山少将の発意の下に第一挺進騎兵隊を生起するに至れり。

而して第二挺進騎兵隊の出現は長、長谷川少佐がかねてこの種行動に至大なる興味を有しおりし関係上、永沼中佐の壮挙が事実となるに到れるを耳にし、直ちに該挺進隊内に加えられんことを切望したるに始まった。ここにおいて永沼中佐は秋山少将と謀り、同時に数個の挺進隊を派遣するの利を説きて同意を得、ついに長谷川少佐をもって第二挺進騎兵隊を統率せしむるに到れるなり。

㈡ 効果につき

以上両挺進騎兵隊派遣の動機を回顧せば、当時この種行動が如何に一般に

奏効不可能視せられありしやを察知すべく、この種の大行動が総司令部統轄裡に実現せられざりし真因を察知するを得べし。

而してこの間挺進隊の行動がその鉄道破懐の効果充分ならざりしといえども、別に大胆なるわが遠距離騎兵将校斥候の行動と相俟ちて露軍の側方及び後方に多大なる脅威を感ぜしめ、ために奉天会戦時に露軍をして歩兵十二大隊余、騎兵三十中隊、砲四十門内外を牽制するを得、なかんずくわが第三軍の行動をして容易ならしむるに多大なる貢献を附与せしを認知すべし。

而して遠距離騎兵将校斥候建川中尉の行動は参考のため本人より講話を聞かんとす。(後述)

㈢　挺進隊行動につき参考となるべき事実

両挺進隊の行動については日露戦史第七巻第三七五頁より第三九一頁に亘りて詳述しあり。(経路要図指示)

主として永沼中将の述べたる裏面上の重要なる事実を記せば、次の如し。

A　挺進隊出発にあたりミシチェンコ騎兵団の来襲と時を同じくしたるは真に偶然の事実にして、彼我共に同一の考案を執りし結果があたかも時を同じくして合致したるに過ぎず。

然り而して最も興味ある問題は、わが派遣の動機に対し露軍がミシチュンコ騎兵団派遣の動機との対照これなり。従軍記者アニチコフ氏及びドイツのスーチェン大尉の著書中に述べたるものをもってせば、露軍においてもこれが派遣に関し総司令部参謀副長とザバイカル師団長、第四ドン師団長との間に意見の杆格を生じ、派遣の時期及び地点に関し議論あり。即ち会戦未だ開始せざる時機に挙行するは単に精神上に及ぼす影響のみなる上沈且堡攻撃を秘するためには不可なりとなし、会戦開始時期を可とするの論者と現時を最良とするの案との二あり。又派遣方向も遼河が三夾河以南結氷状態不明なるに拘わらず、この方向をとれるの可否につき意見の相違ありしが、ミシチェンコ将軍の断固たる決心とその英傑に信頼せられて実行を見るに至れるなり。而して露軍はわが第三軍が該方面に集中することは予期せざりしをもって、戦後戦史を研究して大いにその派遣方面の不可なりしを覚ったという。

B　第一挺進隊は、康平附近「叭哈套海(ハラトーカイ)」に到るまでは、計画的に行動したが、爾後は全然その日その日の敵情等により行動を律せり。而して該行動は井戸川中佐の指揮する馬隊(日本人を長とする馬賊よりなる)の成形する騎網と連繋し遠距離捜索は馬隊に委し、挺進隊は目視し得る程度の範囲に小斥候を派遣して掩護警戒を行なうのみ。故に兵力大なるときはその行動益々困難をきたすを感ぜりと。而してこの種馬賊は満洲と蒙古と各その種族を異にするをもってその地方の実情を明かにし、彼等が自然に地方在住民と結束力あるを利用せずんば、この種の行動は実行至難なるを痛感せりと。

C　本軍との連絡は途中は一部隊を残せしも、殆んど用をなさず。その証拠には黒溝臺戦も知らざりしをもって知るべし。

D　地図は全然不明なりしかば、途上馬上測量をなす。而して新圖河攻撃の際、永沼中佐は馬尻に附せし地図を落失し遂に僅かに写しをもって満足した。

E　行動は整齊となすを必要と感じ、昼間のみ行動し軍服を着用し変装せず。

F　給養は通過地帯の関係上最も困却したために往復の通路を更え、僅かに給養し得たり。この点よりして大兵力は実行至難なるを証すべく、土人は金銭を欲せざる故、物々交換の方法による外なく予め研究して宮内大尉の意見を容れ土人の嗜好品たる茶を多量に携帯し鶏、牛肉と交換した。

以下總合的に将来戦を考慮して一言述べようと思う。

凡そ東亜の地勢はここ教十年蒙古満州一帯の地の文化並に交通状態は到底中央欧羅巴(ヨーロッパ)の如く進化を見ざるは疑うの余地なく、又顔色(東洋人種)の関係上この種小部隊の奇襲的行動は比較的秘し得べく、頗る価値あるものと認む。従って将来戦に実現少なからざるべきを信ず。現に露軍の如き優勢なる騎兵に対し而かも奏効したる吾人の自信ある経験は大いにその効果の大なるを予期せずんばあらず。殊に同胞の国民性は如何に文化的になろうともこの種行動に率先自ら任ぜんとするものはけだし必有と称すべく、現に小官の旧友たる当時の田村馬造少尉が新圖河鉄橋監視家屋に突入せしが如きは偶然の敢行にあらずと認むるべく、又該班内の宮内大尉が第八師団副官なるの栄職を抛ちて許可なくして一行に加わりし

事実は、無形上の志気を称して余りありというべし。

故に以下平時訓練に関係して注意すべき一、二の事項を述ぶれば次の如し。

一、この種行動に任ぜしむべき兵力の多寡は一に目的によりて差異あるべく、防備ある敵を突破するの要あれば、自らその兵力編組に相違あるべくもミシチェンコ集団の如き砲を有する騎兵七十二中隊、生牛六十頭の大部隊はその任務たる単に日本軍背後の鉄橋破壊には反ってその行動鈍重となり成功覚束なかるべし。これに関し永沼中将の経験上の所感は同官の受けたる訓令の要旨（貴官は遠く左側より露軍の右側背に撓出して敵の背后を擾乱すべし）に対しては約二百騎の兵力を手頃とした。但し集成部隊の団結力に多大の困難を感じたると沿道の土民に威力を示すため火砲を有する必要を痛切に要求せりと（帰路敵砲を分捕り大に威力を添ゆ）

将来戦は多数の自働火器の携行を必要とせん。

又大兵力をもってせば、寒村の給養に大なる難儀を生じ、井戸水を得るにも困難を感ずべしと。殊にその派遣の時期は満洲の結氷期以外にその行動至難にしてむしろ小斥候を可なりとせん。

二、この種行動に最も重要なるは指揮官その人を得ることこれなり。永沼聯隊長の寡黙と沈着と且つその剛胆はよくその任を達成せしなり。該中佐は将来の行動に関し必要以外は秘して語らず。危機に際し躊躇することなく自ら迅速に処断するを憚らなかった。而も中佐の部下に対する深情は日露戦役十三年の後同地に到りて戦没者の遺骨を弔せられし事実をもってもその一端を知るを得べし。

ミシチェンコ将軍に関しては敵ながら天晴にして、沈着豪放事に臨み部下に計らずして自ら処断し部下亦心服す。現に退却の文字を用いるを禁じたるをもってもその一端を窺うべし。而してその通過する沿道の人民には慈善的行為を忘るることなく、常に支那人を操縦したりと。

長谷川少佐は公主嶺にて自殺せし人なるが、馬賊と争いその行動大いに困却せりと。

三、この種行動特に鉄橋爆破が日露戦役間において常に戦争に大なる成功を得ざりしは、全く爆薬の使用拙なりしに起因せずんばあらず。即ち当時第一挺進隊使用の爆薬は第二軍の参謀より歩騎兵の各兵用の爆薬を集めたる故、各方式品種を異にしたために使用に統一を欠きしや大なり。又装着法の研究も不充分なる点大であった。

これらは将来特に平時より研究を要する問題に属す。

新開河の橋梁
その時は凍結していた

炉辺談話②

ロシヤ革命の前徴「死の日曜日事件」

この事件は一九〇五年（明治38年）一月九日に起きた。この事件の指導者僧侶ガボンの正体はよくわからない。彼は民衆にまだ強く残っていたツアー（皇帝）に対する信頼感を利用して、ツアーに庶民の生活救済の誓願運動起こそうとした。

一月九日、十数万の労働者とその家族は聖像とツアーの肖像を捧げ持ち、賛美歌をうたいつつ冬宮に行進した。誓願書には「私達ペテルブルグの労働者は正義と保護を求めて陛下のもとに参りました。私達は堪え忍んできましたが、専制政治暴政の為息づまりそうです、この堪えきれない苦痛を続けるよりもむしろ死んだ方がましだと思います」と書かれ、労働者の窮状を訴えてその政治的経済的救済を求めた。

ガボンは前もって内相と宮中にこの誓願運動を無事終らせるように書き送っていたにも拘らず、軍隊は発砲し千人以上の労働者が射殺され、二千人以上が負傷した。ガボンはいつ早く姿を消した。

この事件はツアーのみが人民の父として、自分達を救ってくれる唯一人の存在だと信じていたロシヤ民族の目をひらかせ、結局革命につながった。

日露戦争の我が勝利の一因ともなった事件である。

日露戦争百周年に因んで
陸軍の軍神

前号に旅順口閉塞の広瀬中佐のことを書いた。広瀬中佐が戦死したのは37年3月26日（正確には27日の未明）で残った肉片は遺骸として内地に帰り、4月13日青山斎場で海軍葬が行はれ、会葬者は数千人、勅使まで御差遣になられた。広瀬中佐が軍神と崇められたのはこの作戦が決死的なものであるのに加え、部下を三度も探し求めた結果戦死したことにある。

海軍から軍神が出たのだから、陸軍からもという気持は陸軍内のみならず国民の間にもあった。それに応えたのが橘中佐だった。

勇戦奮闘して戦死した指揮官は沢山いるのに、橘中佐だけが軍神の名を恣いままにしたのは、日頃の言動が軍神たるに相応しかったからである。

先ず奮戦の状況を認識するため軍歌集を繙いてみる。

橘中佐（上）

鍵谷徳三郎　作詞
安田　俊高　作曲

一、遼陽城頭夜は闌けて
有明け月の影すごく
霧立ちこむる高粱の
中なる塹壕声絶えて
目ざめ勝ちなる敵兵の
胆おどろかす秋の風

二、わが精鋭の三軍を
邀撃せんと健気にも
思い定めて敵将が
集めし兵は二十万
防禦いたらぬ隈もなく
決戦すとぞ聞こえたる

三、時は八月末つ方
わが籌略は定まりて
総攻撃の命下り
三軍の意気天を衝く
敗残の将いかでかは
正義に敵する勇あらん

四、「敵の陣地の中堅ぞ
先ず首山堡を乗っ取れ」と
三十日の夜深く
前進命令たちまちに
下る三十四聯隊
橘大隊一線に

五、みなぎる水を千仞の
谷に決する勢いか
巌を砕く狂瀾の
躍るに似たる大隊は
彩雲たなびく明けの空
敵塁近く攻め寄せぬ

六、かくと覚りし敵塁の
射注ぐ弾丸の烈しくて
先鋒数多斃るれば
隊長怒髪天を衝き
「予備隊続け」と太刀を振り
獅子奮迅と馳せ登る

七、剣戟摩して鉄火散り
敵の一線先ず敗る
隊長咆哮躍進し
率先塹壕とび越えて
閃電敵に斬り込めば
つづく決死の数百名

八、敵頑強に防ぎしも
遂に砦を奪い取り
万歳声裡日の御旗
旭に高く翻えし
刃を拭う暇もなく
かれ逆襲の鬨の声

九、十字の砲火雨のごと
寄るべき地物さらになき
この山上に篠つけば
一瞬変転ああ悲惨
伏屍累々山を被い
鮮血漾々壕に満つ

十、折しも咽喉を撃ち抜かれ
倒れし少尉川村を
隊長みずから引っ下げて
壕の小蔭に繃帯し
再び向う修羅の道
ああ神なるか鬼なるか

十一、名刀関の兼光が
鍔を砕きて銃丸は
腕を削りてさらにまた
つづいて打ち込む四つの弾丸
血煙さっと昇れども
隊長さらに驚かず

十二、儼然として立ち止まり
なおわが兵を励まして
「雌雄を決する時なるぞ
この地を敵に奪わるな
疾く打ち払えこの敵」と
天にも響く下知の声

十三、衆を恃める敵兵も
雄叫び狂う我が兵に
突き入りかねて色うごき
浮き足たてし一刹那
爆然敵の砲弾は
裂けぬ頭上に雷のごと

十四、辺りの兵に浴びせつつ
弾丸は霰とたばしれば
打ち倒されし隊長は
「無礼ぞ奴」と力こめ
立たんとすれど口惜しや
腰は破片に砕かれぬ

十五、「隊長傷は浅からず
しばし此処に」と軍曹の
壕に運びて労るを
「否見よ内田浅きぞ」と
戎衣を脱げば紅の
血汐は淋漓とほどばしる

十六、中佐は更に驚かで
「隊長われは此処に在り
受けたる傷は深からず
日本男子の名を思い
命の限り防げよ」と
部下を励ます声高し

十七、寄せては返し又寄する
敵の新手を幾たびか
打ち返ししも如何にせん
味方の残兵少なきに
中佐はさらに命ずらく
「軍曹銃を執って立て」

十八、軍曹やがて立ち戻り
「からくも敵は払えども
防ぎ守らん兵なくて
この地を占めんこと難し
後援きたるそれまで」と
中佐を負いて下りけり

十九、屍ふみ分け壕を飛び
刀を杖に岩を越え
ようやく下る折りも折り
虚空を摩して一弾は
またも中佐の背を貫きて
内田の胸を破りけり

橘中佐（下）

一、嗚呼々々悲惨惨の極
父子相抱く如くにて
共に倒れし将と士が
山川震う勝鬨に
息吹き返し見かえれば
山上すでに敵の有

二、飛び来る弾丸の繁ければ
軍曹再び起ち上がり
無念の涙払いつつ
中佐を扶けて山のかげ
辿り出でたる松林
僅かに残る我が味方

三、阿修羅の如き軍神の
風発叱咤いま絶えて
血に染む眼うち開き
日出ずる国の雲千里
千代田の宮を伏し拝み
中佐畏み奏すらく

四、「周太が嘗て奉仕せし
儲けの君の畏くも
生れ給いし佳きこの日
逆襲受けて遺憾にも
将卒数多失いし
罪はいかでか逃がるべき

五、さはさりながら武士の
取り佩く太刀は思うまま
敵の血汐に染めてけり
臣が武運はめでなくて
ただ今ここに戦死す」と
言々悲痛声凛々

六、中佐はさらに顧みて
「我が戦況は今いかに
聯隊長は無事なるか」
「首山堡すでに手に入りて
関谷大佐は討死」と
聞くも語るも血の涙

七、わが勝鬨の声かすか
あたりに銃の音絶えて
夕陽遠く山に落ち
天籟閑寂静まれば
闇の帳りに包まれて
あたりは暗し小松原

八、朝な夕なに畏くも
うち誦じたる大君の
勅諭のままに身を捧げ
高き尊き聖恩に
答えまつれる隊長の
終焉の床に露寒し

九、負いし痛手の深ければ
情け手厚き軍曹の
心尽くしも甲斐なくて
英魂ここに留まらねど
中佐は過去を顧みて
終焉の笑を洩らしけん

十、君身を持して厳なれば
挙動に規矩を失わず
職を奉じて忠なれば
功績常に衆を抜き
君まじわりて信なれば
人は鑑と敬いぬ

十一、忠肝義胆才秀で
勤勉刻苦学すぐれ
情は深く勇を兼ね
花も実もある武士の
君が終焉の言葉には
千歳誰か泣かざらん

十二、花潔く散り果てて
護国の鬼と盟いてし
君軍神と祀られぬ
忠魂義魄後の世の
人の心を励まして
武運は永久に尽きざらん

十三、国史伝うる幾千年
ここに征露の師を起こす
史ひもときて見るごとに
わが日の本の国民よ
花橘の薫りにも
偲べ軍神中佐をば

橘中佐

文部省唱歌
尋常小学唱歌（四）
大正元年12月

一、かばねは積りて山を築き
血汐は流れて川をなす
修羅の巷か向陽寺
雲間を洩るる月青し

二、「味方は大方うたれたり
しばらくここを」と諫むれど
「恥を思えやつわものよ
死すべきときは今なるぞ

三、御国のためなり陸軍の
名誉のためぞ」と諭したる
ことば半ばに散りはてし
花橘ぞかぐわしき

著書「経験余録」に人柄を偲ぶ

将校ノ徳操

将校ノ責任タル重且大ナリ何トナレバ軍隊ニ在リテハ教官タリ指揮官タリ社会ニ対シテハ徳義模範者タリ国民ノ光明タレバナリ此ノ至重ノ責任ヲ有スル将校ハ果シテ如何ニ己ヲ省ミ行ヲ節スベキヤ吾人ハ感ズル所ヲ述ントス乃チ徳義ハ次ノ諸項ニ就テ誠実ニ行ハレザルベカラズト信ズ

墓参　慰問　吊慰　敬神
家庭　交際

一、墓参　所属隊ハ是レ己レガ生命依託シタル一家族ナリ家族ノ墳墓ニ墓参ヲ行フハ人間自然ノ礼儀ナリ至情ナリ吾人常ニ以為ク故山ニ帰省スル者ハ帰省ト共ニ墓参ヲ口ニシ又之ヲ実行セザル無シ翻テ軍人ガ衛戍地墓地ニ対スル観念如何ヲ想像スルニ或ハ其心薄ク為ニ其所属隊ノ墓所ニ詣ル者ハ甚ダ僅少ナルナキ乎ト是レ豈ニ徳義ヲ以テ世人ノ光明ト為スベキ将校ノ行為ナランヤ又至誠ヲ以テ部下ヲ率ユルノ道ナランヤ彼ノ口ニハ徳義ヲ唱ヘ以テ得タリト信ズルモ其行為ニ欠クル所アラバ何ゾ模範ノ実ヲ致スヲ得ンヤ

遼陽会戦における橋大隊

日露戦争で満州において、初めて三軍が並んで戦闘したのは、遼陽会戦である。右から第一、第四、第二軍と展開し、遼陽を中心に陣地を占領している二二万余の敵に対し一三万余をもって8月30日から攻撃を開始し、9月1日夜に至って概ね大勢決し敵第一線は退却を始めた。第三師団は第二軍に属し、第三十四聯隊は師団の左翼隊、第一大隊（橋大隊）は聯隊の右第一線で攻撃した。

以下歩兵第三十四聯隊史より主として橋大隊の部分抜すいする。

当時、前面の敵情は北大山から標高一四八高地にわたって数層の散兵壕を構え、要点には堅固な堡塁があり、その上、防御線の前方五十メートルから百メートルに一連の鉄条網を設け、地雷や狼穽（おとし穴）も所々に設けられていた。また向陽寺以北の地形は、敵陣の高地から見下され、そのうえ畑の高粱を倒して障害物とするなど、敵にとっては極めて良好な射界となっていた。

八月三十日午前九時、聯隊は左翼隊の主力として楊家林東南の小流の線に展開し、彼我の歩兵戦の結果を待った。この間、右翼隊（歩兵第五旅団）方面も、敵火のため戦況の進展を見なかった。

左翼隊長児玉少将から攻撃命令を受けた聯隊は、午後三時、第一大隊、第三大隊（第十一中隊欠――聯隊予備）を第一線に、第二大隊（第五、第八中隊欠――旅団予備）を第二線として、遼陽街道の両側を敵に向った。この時、首山堡南方高地から猛射で死傷者が続出したが、わが砲兵の援護を得て午後四時、向陽寺西方の小流の線に達し、右翼隊の進出を待った。しかし、右翼隊は攻撃前進を起こさず、加えて午後二時ごろからは大雨が襲来、日没になってもやまず、聯隊は泥濘の中で掩壕を掘って夜を迎えたのである。

首山堡高地の激戦

昨三十日の首山堡南方高地に対する第二軍の攻撃は進展せず、右方の第四軍および第一軍方面の戦況も楽観を許さなかった。この状況から、第二軍が速やかに首山堡南方高地を奪取することは、日露両軍の勝敗の分かれるところと判断され、第三師団は軍命令に基づいて、三十一日払暁、全力をもって、首山堡南方高地の攻撃を断行することとなった。

三十一日午前一時、聯隊は左翼隊長児玉少将から「右翼隊は午後四時を期して前面の敵を攻撃する予定、歩兵第三十四聯隊（第五、第八中隊欠）は午後四時前進を起こし、首山堡南方高地（一四八高地）を強襲奪取すべし。工兵一小隊を付す」との命令を受領した。そこで関谷聯隊長は次のように部署した。攻撃目標は一四八高地（当時饅頭山とも呼んだ）

第一大隊、第三大隊（第十一中隊欠）

第一線

第二大隊（第五、第八中隊欠）第二線

第十一中隊は軍旗中隊、聯隊長とともに第一大隊の左翼後を前進

このころ前夜来の雨はやみ、雲間からは月光さえもれてきた。聯隊は午前四時、敵前約千メートル付近から前進を開始し、一面の泥濘と高粱を折って作られた障害物に悩まされながら、敵前約二百メートルの高地脚にある鉄条網の線に到達した。

右第一線方面

第一大隊は、第一中隊（大築中隊）、第三中隊（安藤中隊）を第一線に、第二中隊（青山中隊）、第四中隊（木下中隊）を第二線とし、昨夜苦心偵察した障害物の隙間から、一四八高地斜面に進入した。

この時代は中隊単位の密集戦法であった。中隊は各小隊の横隊はまたは縦隊で敵に接近し、射撃が必要となると散開したが、中隊の前進停止、射撃、突撃は大隊長の命令により、中隊長の号令で行った。突撃は中隊長、小隊長が先頭となり、突撃ラッパを吹き喊声（ときの声）をあげるのが正式であった。

しかし、この攻撃では、特に夜間の射撃と喊声を一切禁止し、前進停止も小笛によることが決められた。

また、接敵間の着剣も禁止された。剣光によって敵に発見されるのを避けたのである。

第一線の前進に伴い天は漸く白みはじめ、高地中腹の敵散兵壕から猛射が開始された。大隊長の命令で第一線は突撃に移ったが、第一中隊は大築中隊長を失って頓挫し、第三中隊は一時散兵壕に突入したところ、敵の逆襲と安藤中隊長らの死傷で中隊は撃退された。続く第二中隊も敵の十字火を浴び、小隊の大部分を失って中腹に停止する状況となった。

この時、橋大隊長は第四中隊を率いて突進したが、敵火力と中隊長以下の死傷で、敵前近くで停止を余儀なくされ、付近には残存する幹部を中心としたいくつかの集団が、辛うじて敵火を避けて存在する状態であった。ここで

大隊長は、率先陣頭に立ち軍刀を振るって敵散兵壕に突入した。敵の銃剣はたちまち大隊長の身辺に集まり、付近の兵も大隊長に続いて突入し、壮烈な格闘戦の末ついに敵の第一塁を奪取した。時に午前五時二十分であった。

この戦闘で、橘大隊長は露兵三名を斬ったが、自身もまた右手を敵に突かれ、左手に軍刀を握って指揮したという。

これより先、第二線の第二大隊（鈴木大隊・第五、第八中隊欠）は、夜間第一大隊の右後方を続行していたが、暗夜のため連絡を失い、鈴木大隊長は第一大隊を求めて先行中にまた大隊とも離れ、ために第六、第七の両中隊は、それぞれ銃声や喊声を頼りに高地に向った。そのうち第七中隊（内田中隊）は、高地上で苦戦する第一大隊を認めて、直ちにその右翼に前進、折から来攻した敵の増援に対し突進したが、中隊長内田大尉の戦死のほか、多くの損害を受けて中腹に撃退された。

続いて第六中隊（長谷川中隊）が到着し、高地上で激闘中の第四中隊救援のため敵陣に迫り、この時ようやく追及した鈴木大隊長とともに、高地頂上を目指したが、これまた将兵の大半を失って前進が出来なくなった。

左第一線方面

左第一線の第三大隊（国司大隊・第十一中隊欠）は、午前四時右の第一大隊に連繋し、第九中隊（篠田中隊）、第十中隊（幡川中隊）を第一線に、第十二中隊（三浦中隊）を第二線として、遼陽街道西側地区を街道西方高地に向かい前進した。途中暗夜のため第十中隊が連絡を失い、また右の第一大隊とも離れ、――これは地図上の遼陽街道のほかに、新設の道路があったことも原因といわれた――第九、第十二中隊をもって、夜明けごろに街道西方高地の敵前三百メートルに到達した。

大隊の第一線は、障害物を越えるころから敵の集中火を浴びたが、これをおかして敵前約三十メートルに達し、死角内で突撃の準備を行った。やがて大隊長および両中隊が先頭となって一挙に敵陣地に突入し、ここに彼我の乱戦となった。しかし反復する敵の逆襲と、右方の第一大隊正面の一四八高地が再び敵の手に奪われてから、その側射を蒙ることとなって戦況は苦しくなった。大隊長国司少佐は身に五弾を受け、中隊長、大隊副官以下の幹部の大部分が死傷するにおよんで、高地上は再び敵に奪われたのである。

先に主力と連絡を失った第十中隊は、夜明け前、第一線の後方五百メートルの高地脚に達し、大隊の左翼を援護するとともに、敵の逆襲に備えた。

関谷聯隊長と軍旗

三十一日朝、第一大隊後方にあってその苦戦の状況を知った関谷聯隊長は、手もとの第十一中隊（松本中隊）に第一線増加を命じた。同時に旗手中山諭吉少尉に、「自分は今から聯隊とともにこの高地で戦死する。軍旗は右翼にある藤本聯隊（歩兵第三十三聯隊）に捧持してその安全をはかれ。」といって、軍旗に最後の訣別を行い、第十一中隊とともに第一線に向かったが、前進を起こして間もなく、敵弾のため戦死を遂げた。その状況は次のように伝えられている。

軍旗と別れた聯隊長は、旅団予備から増援された第五中隊（馬場中隊）主力に高地上への救援を命じ、数歩前進したとたん、一弾は聯隊長の右大腿部を貫通した。従卒和田平作が繃帯を施そうとするのを退け、左に軍刀を杖とし右に従卒に支えられながら、なおも高地頂上へと前進中、再び敵弾は聯隊長を貫き、壮烈な戦死を遂げた。

聯隊長に従った青島愛次郎書紀（軍曹）、従卒の和田平作、小沢安太郎は、聯隊長の遺体を抱いて最期を悼むうちに、敵の一榴弾はまたも爆発し、青島軍曹以下三名も倒れるに至った。

戦闘後に、聯隊長の乗馬を引いて後方から追及した馬丁は、聯隊長の戦死を知って「遠くお傍を離れず今日までついてきた甲斐もなく、聯隊長の最期を見とどけることができなかったとは、どの顔で家族の人に会えようか」と声を立てて泣き崩れた。

一方、聯隊長から軍旗を托された旗手中山少尉は、出発後数歩で敵の散弾を受けて人事不省となり、護衛兵もまた負傷して下田銀蔵一等卒だけが残った。下田一等卒が軍旗を監視しながら旗手を繃帯中、脚を負傷した和田順雄少尉を背負った山本恵作軍曹と、祖父江小作伍長（いずれも第十一中隊）が来合わせた。和田少尉、山本軍曹らが相談し、軍旗をご紋章（旗頭）と旗と旗竿に分け、和田少尉らが最も近い向陽寺に向かうこととした。向陽寺への途中、今江弘毅（第五中隊）土屋益（第七中隊）の両中尉に会い、敵の狙撃を避けるため、ご紋章と旗は今江中尉が軍衣の下に隠し、三名の護衛兵とともに約二千メートルの高粱畑を、あるいは走り、あるいは匍伏して、午前十時ごろ向陽寺西北方の児玉旅団長のもとに届けたのである。

高地の争奪と橘大隊長

楠大隊が一四八高地の敵第一塁を奪取したとき、敗退した敵は約二、三十メートル後方の第二塁によって抵抗を続けた。大隊長は、すでに負傷した第四中隊長木下大尉にかわって指揮をとった中村昌次中尉に、約五十名の兵をつけて突撃させた。格闘の末、第二塁をも占領し、はじめて高地上に日章旗をあげた。午前五時四十分ごろのことである。

しかし、敵はなお高地の北端陣地に残って逆襲を図ったので、大隊長は部下を督励し、高瀬少尉に兵二十名をつけ突撃させたが、衆寡敵せず後退を余儀なくされた。

このころ児玉旅団長は、高地上の戦況をみて、旅団予備のうち第五中隊（馬場中隊）の二個小隊を聯隊に復帰させた。中隊は敵火のなか約千二、三百メートルの泥濘をおかして高地脚に達し、聯隊長の命令で頂上の救援に向かったが、たちまち中隊の大半が死傷して、救援は挫折した。

一方、高地上には彼我の砲弾が集中、わが損害はますます増加して残兵は少なくなり、弾薬も次第に欠乏してついに石まで投げて防戦につとめた。そのうえ、敵の手にある北大山からは側射を受け、その西北方鞍部からは、約一大隊の敵部隊がわが右翼に攻撃を加えてきた。午前十時ごろ身に数傷を負いながら督戦中の橘大隊長は、さらに敵弾を受けて再び立つことができなくなった。

このころ橘大隊では中野正次中尉、鈴木大隊では稲生正詔、土屋益の両中尉（共に第七中隊）のほかは、将校の悉くが死傷し、高地上はついにまた敵の手に帰した。僅かに残った将兵は、稜線下に後退して抵抗するのやむなきに至ったのである。橘大隊長も重傷の身を横たえてこの中にあったが、あくまで高地を去らず、夕刻ころには、ついにその生命を絶ったのであった。その前後の状況は次のように伝えられている。

橘大隊長が敵弾に倒れたとき、大隊副官片寄佳樹中尉が手当てのため駈けよると「自分は軍旗をこの高地に立てることを聯隊長に誓ったが、これを果たすことができず誠に残念である」と語った。――聯隊長に誓ったとは、前夜関谷聯隊長が橘大隊長のもとを訪れて激励した際「明日は必ず軍旗を首山堡高地に立てる」と誓ったことを指すのである。

また橘大隊長の重傷をみて、本部付の内田清一軍曹らが仮繃帯所まで下ることを勧めたが、大隊長はこれを退け「一歩でもこの高地を下がることはできない。今日は自分がお仕えした皇太子殿下（注・後の大正天皇）のご誕生日であり、このめでたい日に戦死することは自分の本望である。しかし忠勇な多数の部下を失ったことは、不忠このうえもない」と、遙かに東方を拝し、やがて息を絶った。

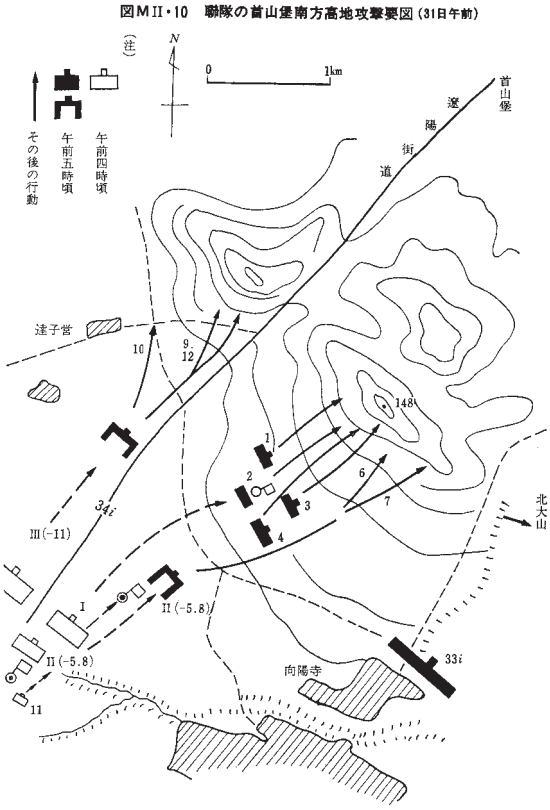
その後の聯隊

これまで主として関谷聯隊長以下各大、中隊長の状況を掲げたが、戦場の各所で発揮された多くの将兵の奮戦と苦闘は、まことに数限りなくあった。しかし、任務上他隊にさきがけて、最も堅固な敵陣地正面に攻撃をいどんだ聯隊は、将兵の努力にもかかわらず、午後になると高地上は全く敵の手に移り、高地斜面は僅かに生存した者と、死体や負傷者で埋まった。この状況を見た軍は、後備歩兵第十一旅団（長・隠岐重節少将）主力を師団に増援させた。

後備旅団主力は、午後、遼陽街道西側から攻撃を起こしたが、聯隊はすでに聯隊長以下千余名の死傷を出し、射撃によってこれを支援するほかはなかった。

また右翼隊（第五旅団）は、正午過

図MII・10　聯隊の首山堡南方高地攻撃要図（31日午前）



ぎ北大山東南の第一塁を占領したが、その後の進撃は阻止されて夜を迎えたのである。

このため聯隊は、旅団命令によって日没後、向陽寺西北方の遼陽街道に沿う地区に集結し、第二大隊長鈴木少佐が聯隊長代理となり、部隊の整理と死傷者の収容にあたった。各中隊の生存者は逐次ここに集まり、午後十一時ごろには将校以下約九百名となって、楊家林東北の前日の散兵壕で夜を徹することとなった。また関谷聯隊長、橘大隊長以下の多くの遺体は、日没後それぞれ戦場から運ばれ、夜半には楊家林の衛生隊に移されたのである。

露軍の退却と遼陽占領

八月三十一日夜、当面の敵は退却した。これは首山堡正面に対するわが軍の猛攻とともに、第一軍が太子河上流を渡河して、遼陽の左側背に迫ったからでもあった。

九月一日未明、師団の右翼隊である歩兵第三十三聯隊は、敵の退却に追尾して北大山を占領し、続いて遼陽方面へ敵を追撃、その他の諸隊も前進を起こした。

聯隊は朝までに部隊の整理を終わり、午前六時、敵の去った一四八高地を占領した。付近にはなお友軍の死体が残り、殊に敵側の北斜面には、日露両軍の死体が枕をならべ、その中には息のある重傷者も混っていた。聯隊長代理鈴木少佐は生存将兵を整列させ、軍旗を朝風に翻して君が代のラッパのもとに、遙かに東方を拝して万歳を三唱し終わって関谷聯隊長以下の戦没英霊に、深い黙祷を行ったのであった。

昨夜までに楊家林に収容できた関谷聯隊長以下の遺体は、この日、村のはずれで火葬し、翌二日、骨上げをして遺骨箱に収め、内地に無言の帰還を行った。

駿府城跡はかつて歩兵第34聯隊の兵営だった。営門のところに橘中佐の銅像があった。

祖国の護り

作詞　西条八十
作曲　村越国保

一、海涛天を衝くところ
燃えて火を吐く桜島
薩摩が生める快男児
姓は大山　名は巌

二、十八剣をひっさげて
夙くも尽くす勤王や
血風すさぶ鳥羽伏見
花は蕾の稚児桜

三、皇国のため海を越え
遠き旅寝の欧羅巴
君が究めし戦術は
日本を照らす新曙光

四、奉天、沙河の大戦に
颯爽たりや司令官
よく三軍を叱咤して
祖国の急を救いたり

五、壮烈、義烈、尽忠の
至誠に燃ゆる勲功は
実に大山の名の如く
万古不朽に聳ゆらん

総司令官・元帥大将
大山　巌（薩摩）

炉辺談話 ①

臥薪嘗胆

明治二十八年日清戦争に勝利した我が国は、下関条約で朝鮮の独立を承認させ、台湾、膨湖島、遼東半島を獲得した。ところが条約調印からわずか六日後、ロシヤはドイツ、フランスを誘い三国干渉の挙に出た。日本が遼東半島を領有するのは東洋平和に害があるとて、還付を迫った。遼東半島は自分が狙っていたからである。

我が国はこの頃ロシヤを相手に戦う国力は到底ないので、涙を呑んでそれに応じた。ところが明治三十一年ロシヤは清国と旅順・大連租借条約を結び此処を領有してしまった。我が国内には「臥薪嘗胆」の言葉が澎湃として起った。

呉と越が覇を競った春秋時代、越王勾践に敗れて死んだ呉王・闔閭の子夫差は薪の上に寝て悔しさを忘れず、勾践と戦いこれを破り父の仇を報じた。敗れた勾践は苦い胆をなめ報復の気持を奮い立たせ、遂に夫差を破り復讐を遂げた。明治の時代誰が言い出したか「臥薪嘗胆」

今の日本人にこの気持は全くない。奪いとられた北方四島、仮初めの平和に酔っていては取り返せない。

日露戦争における特別任務班の活躍
壮烈横川省三と沖禎介

さきに騎兵挺進隊のことを紹介したが、敵後方に脅威を与えたこと挺進隊に劣らぬものに、特別任務班がある。これについて先ず谷寿夫の「機密日露戦史」に載っている個所を転記する。

特別任務班の活躍

一、人　員

特別任務者と称するものは概ね左の如し。

将校

- 大佐一（青木大佐にして兼務なり）
- 中佐一（橋口勇馬）
- 少佐四（花田、守田、土井、井戸川）
- 大尉五（内に佐藤安之助、宮内英熊あり）
- 中、少尉七

計十八

准士官、下士

- 特務曹長七
- 曹長　四

計十一

右の内予備十三名を算す。外に奏任待遇及び通訳として延人員四十二名（内沖禎介、横川省三等生死不明、月収八十円乃至五十円

総計　七十一名（明治三十八年四月調）

二、行動区分及び各班の任務

（特別任務者の活動については記録の存するものなく、その詳細を綜合するに一大苦心を告げたるをもって共にその要領のみを示すに止む。経費十七万円）

いよいよ開戦に近づくや、兒玉次長は山根武亮大佐と交代せる青木大佐、新北京武官の補佐官たりし坂西大尉を保定に送り立花中佐と交代せしめ、新に佐藤安之助大尉を北京の補佐官たらしむ。かくして支那通の威容を揃え開戦に入れり。

青木武官は露兵後方撹乱の任務達成のため、先ず北京にて日本人決死隊を編成す。応募中五十名を採用（内に応募叶はざるため自殺者を生ぜり）する外馬賊を利用するに決す。

（一月中旬）

当時諜報勤務として青木大佐の派遣せしもの（武官に非ず）は次の地点である。

張家口、熱河、錦州、赤峰（家庭教師年齢三十歳、川原操現今の正金銀行一宮夫人）井戸川辰三大尉は四川より招致す。井戸川大尉また橋口少佐を内地より招く。

大体の編成を次の如く定む

第一、二班十二名目的はハイラル、チチハル鉄橋破壊。本班は赤峰まで行き同地北方馬丹城より伊藤班新第一班と横川班新第二班とに分つ。

第三班（津久井大尉班）ハルピン鉄橋破壊を予定せるも警戒厳なる報あり。よって中止し長陽を経てその東方牡丹臺鉄橋破壊に変更す。

以上は鉄橋破壊の任務にして各六名よりなる。計十八名第四班（井戸川班）、第五班（橋口班）は共に馬賊操縦、敵後方の撹乱に任ずるものにして、第一乃至第三班は二月二十二、三日の頃出発せしも、第四、第五班は三月に入り出発、先ず朝陽に到る。各班共に支那服を着し支那語を用いるも、充分匿るるを得ざるため袁の同意を得て、袁軍兵営より各班へ下士以下五、六名を配属することとなる。

袁は六十名の間諜（内に呉佩孚あり）を派遣す。

以下各班の区分及び行動予定を示す。

班別	目的の主要点
伊藤大尉一行	ハイラルの鉄道破壊
橋口班	遼陽、昌圖、朝陽間の地区に活動、支那馬賊を指揮す
井戸川班	鐵嶺、昌圖、康平間に活動、馬賊を指揮す
津久井班	奉天北方地区に活動
宮内班	同右
花田班	鳳凰城、寨乗馬集及び朝陽鎮方面に活動
沖、横川の一行	チチハル方面鉄道破壊
馮馬隊班	遼陽、昌圖間に活動
趙軍、李軍、綦軍の各支那馬隊	鐵嶺、昌圖附近の地区に活動

三、電線の破壊

大本営は開戦と同時に敵の利用する電線の破壊を企図し、大要次の如く実施す。

(A) 八達嶺電線破壊

二月上旬大本営は青木大佐に命じ、北京より蒙古を経て露都に通ずる電線破壊実施のため、先ず八達嶺（北京西北方張家口附近）の電線破壊を命ず。津久井大尉これに任じ動員下令直後見事に破壊を実施す。

(B) 大石橋附近の電線破壊

大本営は旅順を孤立ならしめんがため、大石橋附近の電線破壊を予

定し、一月十日すでに兒玉参謀次長は在錦州川崎大尉に命じてこれが能否を問合わし、後ち破壊の準備を命じ、いよいよ動員下令と同時に二月五日破壊を実施す。これがため六日仁川の海戦は八日旅順沖の海戦当時まで旅順に在る露軍に知られることなく、七日には旅順露軍司令部は舞踏に酔いつつあったという。

四、各班の行動経過概要

第一班及び沖、横川の両班は明治三十七年四月上旬すでにハルピン以西にありて鉄道破壊に任じ、井戸川、橋口、津久井、花田、宮内の各班は概して同年六月上旬頃より活動を始め、遼陽戦後には遼西に召集せるものを解散し、専ら遼東より召集することに方針をとり、これを満洲忠義軍（義軍）と称せしが支那馬隊は同年七月頃より翌年に亘り漸時活動の努力を増加した。井戸川、橋口、花田等の各班の報告は、各々六十七回に亘り有力なるものも少なからずといえども、今その記録の大部を発見し得ざるにより、左に簡単に当時の状況を述べよう。

㈠ 伊藤大尉の第一班の行動

伊藤大尉には前田、若林、吉原、大島、森田の諸通訳及び有志者を属しあり。一行四月十二日ハイラルに達し、南方沙漠の穴に入り偵察に従事す。然しハイラル町を通過せざれば鉄橋を破壊し得ざるため偵察として河の右岸より若林、森田派遣せらる。然るに露軍の歩哨に発見せられ通路の側に伏す。森田不明となり若林は帰る。（六月ブレーマー、ハーフェン発電森田より来る。彼は帰来敵に捕らわれしも書類を捨てここに支那人のレフェーシュとともにドイツに送られ九月帰朝す）同地鉄橋破壊を試みしも警戒厳にして目的を果すに至らざりしをもって、同十七日夜同地西方二十清里附近の鉄道上数箇所の小破壊を実施して五月二十九日北京に帰退後翌三十日更に錦洲方面に進み橋口班の隷下に入る。

㈡ 横川、沖の第二班の行動

一行は両名の他田村脇、中山、松崎等の志士を加え、天津を出発し遺髪及び写真を仙波少将の手に残置して伊藤一行と相前後しチチハル南方四十清里に到着せしが不幸目的を果さずして敵手に帰す。表面は四月十八日ルーターに死刑発表をみたるも、その顛末は次の如く明瞭となった。

五月十日のノウオウレミヤの示す所によれば、チチハル南方四十清里の波状地内の空屋に入り、沖、横川炊事をなし他の四人及び支那人斥候勤務に服す。

時に露騎兵斥候二十騎来襲、炊烟を見て怪しみ屋内に侵入す。一行語学出来ざるため弁明に由なく又駱駝あり、よって露兵は屋内捜索をなせしところ、ビックフォード現われしため一同は直ちに拉し去らる。後ち一度は皇帝に特赦を乞いしも許されず。ついにハルピンにおいて死刑に処せらる。他の四人はこれを知り南方に向って逃れしが以前この地通過の際掠奪を行って土人の忿怨未だ去らず、よってその殺害するところとなれり。又徒歩の支那人は途上官憲に申告し、あたかも佐藤安之助大尉の使用人たる李杏榮の購馬者に会い全部の状況を告げたるをもって明瞭となる。

㈢ 津久井班（第三班）の行動

同班は明治三十七年五月末までに白土墻辺門附近において己に金壽山及び馮麟閣の配下の馬賊五、六百を準備し、六月六日同地を出発し胡里坡に至る。途中石丸、宮内の指揮する部隊と合して爾後東北方に進み、主として奉天、鐵嶺間の地区において露軍の背後並にその翼側の妨害並に諜報に任ぜしが農安に出でて失敗せり。

㈣ 井戸川班（第四班）の行動

井戸川大尉は日露戦前四川省重慶に駐在して支那軍の利用に従事した。当時松浦寛威大尉は成都に、高山公通大尉は貴州にあり。戦役始まるや井戸川大尉は命により北京に到り、青木大佐の指揮を受け特別班編成に着手す。当時これらの人は蒙古服をまといマラ教の僧侶に化けたるも、行動を陰蔽し難く在北京邦人のことごとく参加を希望せしもその一部を採用せしに過ぎざりしをもって、選に洩れたるものにて自殺者を出したるごとき有様であった。

後ち井戸川大尉は日本人のみを率い、五月下旬迄に彰武縣附近にて配下二百六十名を得て六月五日巳に叺哈恰套海附近に現出し、更に蒙古の馬賊二百を加うるに到り、当時敵兵六百の守備する公主嶺附近に前進し、黒林子附近の鉄道破壊を企図し爆薬六七〇個を携行し約六日間の連続行軍により小破壊を実施せり。爾来該地及鄭家屯方面に駐在して活動を継続し主として敵背後の攪乱及び諜報に任じた。

後ち新に露騎兵の行動妨害のため法庫門に帰り地方警察等を手に入れ大に馬賊を収集す。時に三十七年八月頃一報あり。

「鐵嶺より西方へ一縦列支那監視兵の下に前進中」と。すなわち法庫門において捕えしに旅順へ送るべき敵の弾薬三百五十車輛（小銃弾二百万、砲弾数十万発なりき）すなわちギリシア商

人露兵と称してこれを監視し支那兵六百五十名あり。よってわが馬隊には各自車輛に関係せざる監視者の懐中の奪掠は勝手たることにせしに、彼等大に喜べりと。この車輛は爾後ラン河より山海關に出て旅順に送るはずなりしと。この種旅順への密輸入は新民屯、天津、芝罘等よりすこぶる多なりしと、現に弾薬箱が芝罘税関にて木綿と称せられしに苦力これを倒して発見せられたる例あり。その後この分捕弾薬が遼陽戦の軍に送られ使用せられたりと。

また北京在住日本人商人中露探のものを発見して殺した例もあり。また中には日本人船長を利用せる露軍の糧秣弾薬満載の船を出帆後わが手に収めしこともあり。

(五) 橋口班（第五班）の行動

橋口勇馬中佐は五月下旬朝陽附近山塞において義民団の募集に従事し約六百名を得、六月上旬劉龍臺に集合の上遼陽方向に前進せり。当時義民募集に努力せし旧支那兵の營官王文革は中立違反に問われ、建昌縣監に逮補せられて朝陽府知事のために捕はれたる同様の数名とともに投獄せられしも須臾にして袁世凱の斡旋により釈放せらる。

爾後わが軍遼陽附近に達するや、橋口中佐は露軍行動の報告を支那人に托して露軍とともに退却せしかば、わが軍属この有利なる報告を入手して得る所大なるものあった。

爾後橋口班は露軍とともに奉天を経て昌圖に退き、三十八年休戦の頃には康平を根拠地として諜報及び馬賊の指揮に任じた。

(六) 宮内班の行動

宮内騎兵大尉はその神出鬼没の行動をもって馬隊（金壽山配下のもの）を率い概ね津久井班と同様の任務に服せり。

(七) 花田班の行動

花田少佐（目下武徳会に従事）は日清戦後ウラジオに到り、本願寺僧侶に化け成功せしも、時の田村次長この行動を不同意なるため帰朝を命ぜらる。爾後終生諜報勤務に任ぜんとし、兒玉次長よりその手腕を認められ現役に服す。

花田少佐の特別班は前記諸班と方面を異にし主として鳳凰城以北の地区に活動し第一軍より派遣の堀米大尉一行の特別勤務者と行動し、しばしば露兵と戦斗し第一軍並に鴨軍のため有利なる報告をもたらせり。

(八) 馮馬隊の行動

馮及び金壽山の活動はともに最初山崎大尉（營口）と錦州の山塞に入るを約せしに始まれり。而して馮麟閣は明治三十七年七月の頃錦州に赴きたる青木大佐の指導にもとづき拉立山と称する良参謀を有し、主として遼陽附近より昌圖附近に亘りてその勢力を有せしを利用せしものにして青木大佐は大重、古荘の両通訳等を附して活動に便ならしめたり。露軍この報に接し大湾の田義本を操縦し且つ新立屯に歩、騎兵千、砲八門を派遣して対抗せしむる所あり。該隊は六月中旬青木大佐の与えたる資金により、二週間以内に三千の馬賊を徴集し、爾後下力馬附近を中心として活動しわが遼陽戦末期には該方面より露軍の背後を威嚇し同会戦後しばしば大湾附近において露軍右翼方面の攪乱に努め、小戦斗を開始して効果あり。且つわが左翼軍と連絡を密にす。

爾後田義本は、わが籠絡に服し、ついにわが軍の間諜たるに至れり。

次いで十一月中旬に入って、馮の配下は法庫門附近で露国糧食用の牛二百を押収し且つ露兵八十と衝突しその若干を斃し捕虜若干、砲二門を分捕り、馬賊の行動としては天晴なる出来栄であった。

翌年に入ってからは特記すべきことなきも、依然相当の活動を継続せるは事実なり。

(九) その他の行動

その他松本、松岡の両通訳はチチハルの偵察を決行し、宮内大尉は第一騎兵挺進隊に入りて案内に任じ、又遼陽戦の末期には三百船（奉天、法庫門の中央）にある李金鑄並に臥牛山（彰武臺門の北）にある綦東明に各百個の爆薬を与え、敵背後の交通線破壊に任ぜしめたが、その効果に関しては不明なり。又康平の趙軍は、橋口中佐の指導に基ずき成田通訳を附した。

五、兵器弾薬並に爆薬の補給

特別班の活動に最も必要なるは兵器弾薬にして、花田班に対しては第一軍より分捕銃器等を支給し、弾薬またこれが輸送の途容易なるも他の諸班に対してはわが軍遼陽以北に進出までは主として錦州方面より輸送せざるべからずして同地駐在川崎大尉の苦心容易ならざるものあり。即ち支那側はわが塘沽附近より山海關に輸送する兵器弾薬に対し故障を申出でざるも、露国側の監視下に中立地帯を通過するの難は一方ならざるものあり。遼陽戦後にはこの影響の然らしむるにや露軍は旅順方面に弾薬の密送を企てたるため、わが派遣員はしきりに秦皇島その他の乗船地を警戒し、厳密に監視するところありてしばしば押収せるも不徹底なりしかば、支那側官憲を利用して実行の確実を期した。

沙河戦前後における諸班の弾薬補給

には、井戸川班主としてこれに任じ、遼陽より支給することとなり、馮隊には一時に鹵獲銃器千挺を支給せしことあり。

六、蒙古要点の監視について

わが作戦行動を有利に進捗せしめ、且つ露軍の物資徴集、情報収集を妨害する目的をもって蒙古地境上の要点占領の必要なることに関しては、わが満洲軍においても、これら特別班の各班長においても着目したのは事実で、伯都訥は既述の如く江木中佐の計画案施するに至らざりしも、鄭家屯、庫倫及び小庫倫の占領は概ね所期の目的を達せしが如し。庫倫領有に関しては成田安輝の努力に待つべきもの多く、よってもって蒙古各王及び活佛等を操縦するに便を得たり。又小庫倫（直隷蒙古の交界点）占領に関しては三十七年九月青木大佐の意見具申にもとづくものにして、当時袁世凱は同地に電線を延長するの企図ありしをもってこれをわが方に利用せしめ、且つ露軍の物資徴集を妨害するため清国兵を先遣せしむることに一決した。

七、平和克復後義軍の処分

平和克復に先だち特別班長をはじめ青木大佐等より福島少将のもとに達した義軍（既述守田少佐の忠義軍とは別）等の処分解散に関し幾多の意見あり。特に井戸川中佐の如きは満蒙処分につき国家的意見を提案し、大に参考に資するものありしも、この詳細は別に他日戦役間及び戦後の支那操縦という別題目の下に論述することとし、ここには単にこれら特別班及び義軍の処置の大要を述べるにとどめる。

特別官服務諸官はあるいは両者密実の関係より遼東民政署の要員に入れるもの又は満洲駐屯軍中に残留せられしもの、あるいは北京天津の方面に使用せられしものあり。その内地に帰還せしものは一部に止まりしは国家のため慶事と称すべく、ために戦後の満蒙経営に利するところ大なりき。

また馬隊へは一ヶ月一兵卒二十円内外を支給したので解散に決せる際、二又は三ヶ月分の兵餉を給し、自活の道を与うるとともに充分なる褒賞をなした。而してその統領たるものは支那側において要職につかしむる如く尽力し概ね所期の目的を達せり。

橋口中佐は、特に鉄路巡警及び水路掩護の必要上、日本人指導のため満蒙馬隊各五千を存置するの要を具申する所ありしも、諸種の関係上採用せられなかった。

なお一言すべきは、これら諜報勤務者の進級及び論功に関し当時非難ありし点にして、これらは当局の大いに顧慮すべき重要事項にて、往々等閑視せらるる事実なるを記憶せざるべからず。

結言せば、以上骨の折れた割合に馬賊の効果は小なりき。これ資力、兵器弾薬等の関係上思う様にやれなかったことと訓練不足が大原困であった。

かくの如く満洲においては馬賊を利用したが、将来比島の作戦等にありても、又西班牙系の土族を利用する等大いに研究の要ありというべし。

その他これ等に関する教官の対英香港、シンガポールにての土人の利用、蘭領印度土族利用等の体験はこれを口述に止めここに省略す。

特別任務者全般のことは以上の通りであるが、その最後が壮烈だった横川班について、「明治の群像横川省三」という本に拠って述べる。

横川班は横川省三、沖禎介、松崎保一、脇光三、中山直熊、田村一三の六人で、青雲の志を抱き大陸に渡りそれぞれ仕事に就き活躍していた。日露の風雲急をつげるや、北京公使館にあった青木宣純大佐は殉国の志士を求め、四二名を採用したのであって、軍人ではない。身分は軍属で奏任待遇（将校待遇）である。

横川班は鉄道破壊の任務をもってラマ僧や苦力などに変装し、2月21日北京を立ち北上した。途中蒙古のカラチン王府に立ち寄り、王家の顧問をしている日本人の世話になったりしたが、それ以外は極寒の荒野を只管歩き、目的地嫩江の橋梁近くに到着したのは、出発してから五〇日後の4月11日だった。その辺には部落はなく風のあたらぬ所に天幕を張り露営した。

翌12日早朝松崎ら四人は橋梁の偵察に行き、横川と沖が朝食の支度をしている時露軍の騎兵に発見されてしまった。二人共ラマ僧になりすましていたが、持っていた湯呑みがラマ僧の使うのと違うので怪しまれ連行された。その後天幕内を捜索され怪しい物はなかったが、近くの墓地に隠してあった爆薬類が発見されたので、総てが露見してしまった。

松崎らが偵察から帰ってみるとこの有様なので、失敗したときは小庫倫で落合うことになっていたので、南下しジャライト王府近くまで来たとき、一同は毛皮商に化けていたので強盗に逢い、格闘したが遂に殺されてしまった。

さて捕らえられた横川と沖は何も臆することなく、横川は少佐、沖は大尉と名乗り、まだ何組も鉄道破壊に潜行していると答えた。ハルピンに送られ

軍事裁判にかけられ、4月21日銃殺されたが、その前日日本に残した娘に次の遺書をしたためた。

拝啓父は天皇陛下の命により露国に来たり四月十一日露兵の為捕へられ今彼等の手に依り銃殺せらる是天なり命なり汝等幸に身を壮健にし尚国家の為に尽くす処あれ我死に臨んで言ふ処なし母上は勿論宜しく汝等より伝ふ可し富弥にも宜敷伝ふる処あれ

明治三十七年四月二十日　満州哈爾賓　横川省三

横川律子殿
横川勇子殿

編者註　ある資料によれば横川の妻は既に亡いので母上というのは自分の母を言うとある。
また富弥は実弟。

横川はこの手紙を裁判長に託し、持金五百両（支那銀行の手形）を露国赤十字社に寄贈するとさし出した。裁判長が家族に送るなら手続きすると言ったのに対し、これは公金なので私することは出来ぬと答えたと言う。沖については詳しく伝えられていないが銃殺にあたり露兵が付けようとした眼隠しを、不要として除けたと伝えられている。何れも明治の志士の面目躍如たるものがある。

横川省三

沖　禎介

中山直熊

松崎保一

脇　光三

田村一三

日露の激動期に花と散った六烈士の横顔

蒙古来る

頼　山陽

筑海の颶気天に連なって黒し
海を蔽って来る者は何の賊ぞ
蒙古来る　北より来る
東西次第に呑食を期す
趙家の老寡婦を嚇し得て
此を持して来る擬す男児の国
相模太郎膽甕の如し
防海の将士人各　力む
蒙古来る　吾は怖れず
吾は怖る関東の令山の如きを
直前敵を斫って顧るを許さず
吾が檣を倒して虜艦に登り
虜将を擒にして吾が軍喊す
恨む可し東風一駆大涛に附し
韃血をして盡く日本刀に膏らしめざりしを

頼　山陽

日露戦争勝利百周年の節目にあたり
戦争間に見る特攻精神②

騎兵の遠距離斥候

航空機のない時代遠距離の戦略捜索は、すべて騎兵斥候に頼らざるを得なかった。僅かな人員で主力から遠く離れ敵中に入って行くことは、その気持において特攻隊と相通ずるものがあろう。無事任務を果たし帰って来た者もあるが、杳として消息を断った者もある。ここに主な事例を挙げてみる。

[古賀斥候]

騎兵第3聯隊の古賀伝太郎少尉15期は、沙河会戦前の9月30日、鉄嶺付近の敵情捜索の任務を受け、部下9騎を率い李大人屯を出発し新民まで進出したが、敵の警戒厳重でこれ以上前進できない。そこで新民庁東北方地区で、我に協力する馬賊の家を連絡拠点とし、吉田達治軍曹以下をそこに留め、富永簾次上等兵と古荘通訳を伴い、満人に変装して鉄嶺に潜入した。

古賀少尉

騎兵斥候

鉄嶺付近の列車の運行状況を確め、連絡拠点を通じて総司令部に報告した。その後陣地設備の有無を調べるため、さらに潜入したところ敵に見破られ投獄された。しかし、幸にして我に好意を有する敵の通訳に助けられ脱出し、出発から18日目の10月17日に全員無事帰還した。古賀伝太郎は満洲事変のとき錦西で戦死した古賀聯隊長である。

[小林斥候]

変装して潜入した事例をもう一つ。

騎兵第13聯隊の小林環少尉14期は、37年8月18日、海城付近の敵情捜索に出たとき、満人に変装して巧に敵の警戒線内に潜入した。敵に怪しまれて捕えられること2回、いつも聾と唖の真似をして押し通し、敵情を詳にして帰った。

翌年の3月20日といえば、奉天会戦が済んだ後のことになるが、小湾屯にいたとき旅団命令により、部下3騎を率いて長春、吉林方面に斥候に出た。数日後、兵2名に乗馬を持たせ、報告に帰えし、自らは向後上等兵1人を伴い変装して潜入したが、消息を絶った。

戦争が終っても杳として生死が判明しなかった。次に述べる山内斥候の山内少尉は、後に少将にまでなったが、同じ旅団で隣の聯隊、しかも同期生である小林少尉のことが念頭から去らず、八方手段を尽して調査した結果、昭和10年になって事情が判明した。

小林少尉と向後上等兵は敵に捕えられ、スパイとして取扱われ、長春で銃殺刑に処せられたのである。当時、それを目撃した満人も判り、遺骨も収拾できた。小林少尉は東京は神田の出身で、昭和10年、遺骨が帰ったとき、盛大な葬儀があったと語る人もいる。また、神田明神境内に慰霊碑が建立されたと言うが、今はない。

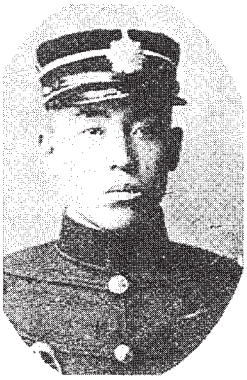
[建川斥候と山内斥候]

沙河対陣中のことである。我が総司令部では、次期作戦を奉天を中心とする地域と予定し、敵は果して奉天において決戦を企図するか、それとも鉄嶺（奉天北方130キロ）まで退いて我を迎え撃つか、これが状況判断の重大事だった。

そこで秋山支隊長に将校斥候の派遣を命じ、騎兵第9聯隊の建川中尉13期と騎兵第14聯隊の山内少尉14期が選ばれた。

両斥候に与えられた任務は次の通りである。

建川中尉


山内少尉

建川斥候

鉄嶺附近ニ挺進シ左ノ任務ヲ遂行スベシ

一、敵部隊ノ移動状況並ニ兵力ノ偵察

二、敵軍ノ陣地工事ノ状況偵察

三、敵軍鉄道輸送ノ状況並ニ搭載物件ノ偵察

四、成シ得レバ遙カニ遠ク撫順方面ノ敵情及ビ地形偵察

五、成シ得レバ敵ノ鉄道電線ノ破壊

並ニ倉庫ノ焼夷

山内斥候

一、鉄嶺及び撫順街道ニ於ケル敵情偵察

二、吉林―鉄嶺街道ニ於ケル敵情偵察

三、奉天―鉄嶺ニ於ケル敵列車ノ運行状況偵察

四、成シ得レバ鉄嶺附近ニ於ケル敵情地形偵察

両者の与えられた任務を見ると若干の違いがある。山内斥候には、鉄嶺を中心とした比較的広い範囲を見てこさせようとし、建川斥候には、冒頭に鉄嶺附近に挺進しとある通り、地域を絞っているように思う。山内斥候が1月4日に出発し、建川斥候は9日に出発している。この5日間にスパイ情報か何かで狙を絞るような情報が入ったのかも知れない。

両斥候の編成

建川将校斥候

長　騎兵中尉　建川　美次

〃　軍　曹　豊吉新三郎

〃　上等兵　野田　新作

〃　上等兵　神田卯三郎

〃　上等兵　大竹　久

〃　一等卒　沼田　与吉

山内将校斥候

長　騎兵少尉　山内　保次

〃　伍　長　清水織右衛門

〃　上等兵　館沢　豊

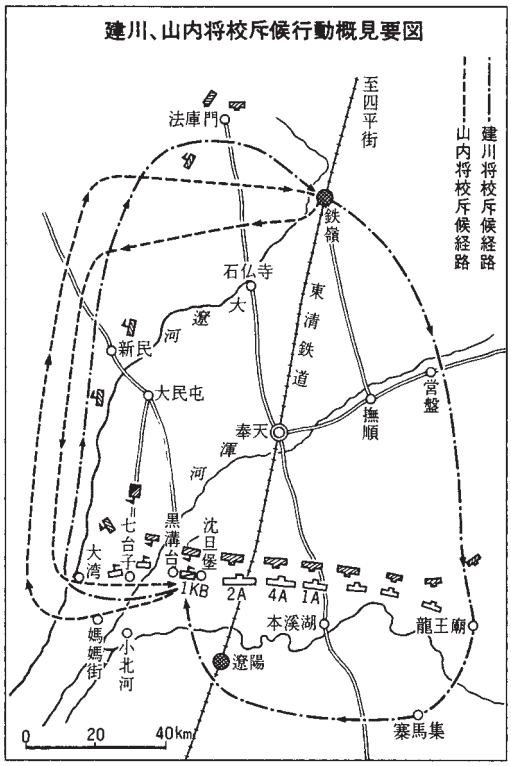
〃　一等卒　神崎　文三

通　訳　満人一名

両斥候とも変装して潜入することは考えないで、その代り白馬1頭を混えたり、帽子や頭巾をロシア兵と同じようなものにして、敵の目を欺く工夫をした。

山内斥候は沈旦堡、建川斥候は韓山台とそれぞれ所属聯隊の所在地を出発し、遼河右岸に大きく迂回して北上した。我と相対している敵の最右翼よりも更に西に寄っているので敵の歩兵に出合う気遣いはないが、ミシチェンコの騎兵団には警戒を要した。また、この地方に盤踞している馬賊の中にはロシア軍に協力しているものもあって、油断ならなかった。

両斥候とも幾度か危機に遭遇したが、その都度沈着剛胆、しかも小人数の利を生かして機敏に行動し、危地を脱出した。偵察行動は主として鉄嶺附近で行い、山内斥候は18日間、総行程1千キロ、建川斥候は23日間、総行程1千200キロを踏破して帰還した。山内斥候は帰路も西方に迂回したが、建川斥候は東方に大きく迂回して帰還した。これがため行程が延び日数も多くかかっている。



両斥候の報告と判断は共通点が多く、要約すると次の通りであった。

一、鉄嶺にある敵部隊は後方守備隊で、總予備隊というようなものではない。

二、鉄嶺附近では土民を使って工事を行っているが、これも軽易なもので、決戦のため準備をしているとは思えない。

三、鉄嶺よりの鉄道の運行は夜間も間断なく行われ、1日約30列車が南行しまた北行している。

四、列車には軍需品並びに兵員を搭載しているが、北方から輸送されて来る兵員は、鉄嶺で下車することなく、ホームで休憩後又列車に乗って南下しているのに対し、南方から来る列車には空車が多い。

五、鉄嶺には沢山の倉庫があり、支那人でも証明がなければ街に入ることが禁じられている。

そのほか地形についても詳細に報告している。

この報告によって、敵は奉天において決戦を企図していることが明らかとなり、またその重点が鉄道以東の地域におかれているのも判ったので、我が作戦に確乎たる根拠が得られた。

世界の戦史で、これだけの偉大な斥候があっただろうか、寡聞にしてまだそれを見出し得ない。

日露戦争における特攻
乃木将軍と白襷隊

第一、第九、第十一師団より成る第三軍は、8月19日より旅順要塞に対する攻撃を開始した。十年前の日清戦争では一日で陥した地域だったので、強襲により難なく占領できると思っていたのに、各師団とも攻撃不成功だった。初めて遭遇する要塞攻撃で、参加戦闘員五万七百余、死傷一万五千八百という惨憺たる結果に終った。

第一回攻撃の失敗に鑑み正攻法を採用することになり、9月1日より各師団は攻撃陣地を推進し、9月20日一部の前進堡塁を奪取した。その後28榴十八門の増加を得たが弾薬は充分ではなかった。

10月26日第二回攻撃を開始した。砲撃の成果大と見て30日突撃を敢行したが、堡塁の壕を通過できず、一戸堡塁を奪取できただけで、他は不成功に終った。四万四千百の戦闘参加で死傷三千百三十だった。

10月15日バルチック艦隊が出港の情報があって、遅くとも翌年1月上旬には我が近海に到着する虞があり、我が海軍は旅順の封鎖を解いて艦船の整備をしなければならないので、旅順攻略はいよいよ急を要する事態となった。第三軍には新に第七師団が増加され、次の勅語まで賜った。

旅順要塞ハ敵ガ天険ニ加工シテ金湯トナシタル処ナリ其ノ攻略ノ容易ナラサル固ヨリ怪ムニ足ラス朕深ク汝等ノ労苦ヲ察シ日夜軫念ニ堪ヘス然レトモ今ヤ陸海軍ノ情況ハ旅順攻略ノ期ヲ緩ウスルヲ得ザルモノアリ此時ニ当り第三軍総攻撃ノ挙アルヲ聞キ其時機ヲ得タルヲ喜ヒ成功ヲ望ム甚切ナリ汝等将卒夫レ自愛努力セヨ

第三軍の将兵の感激唯ならざるものがあった。就中乃木軍司令官の胸中如何ばかりであったらうか。

攻撃部署は同様だったが、軍司令官自ら第七師団を率い各師団に先だち突進することも考えていたが、軍参謀達は必死になってこれを止めた。そこで代わりに「白襷隊」が編成された。各師団から決死の士三千があつめられ、第一師団第二旅団長中村覚少将が指揮し、好機に乗じ水師営付近より要塞内に突入する計画をたて、友軍識別の為全員白襷をかけた。

11月23日軍司令官は各師団に攻撃命令を下達し、軍内の全砲兵は砲門を開いた。各師団は26日午後1時突撃を開始したが奏功しない。軍司令官は午後4時自襷隊の投入を決心し、隊員に悲壮な決別の辞を述べ激励した。隊は6時出発し松樹山西麓に前進し、午後8時50分松樹山砲台に突入したが、敵は探照燈で照らし射撃熾烈にして我が軍は混乱し、中村少将以下敵弾に倒れ死傷多く敵兵増加し奇襲は失敗に帰した

一旦は全面的に攻撃頓挫したが、爾霊山に重砲の射撃を集中し予備隊だった第七師団をこの方面に増加し力攻した。11月30日山頂を奪取したが敵の逆襲に逢い奪いかへされ、2日より4日の間彼我争奪を繰り返し、5日になって確実に占領した。この高地は標高二〇三で、爾霊山とは日本軍のつけた名称だが、ここに観測所を設け港内の艦船を射撃し、敵を降伏に導くことになった。

爾霊山

爾霊山の瞼豈攀じ難からんや
男子功名克難を期す
鐵血山を覆い山形改まる
萬人齊しく仰ぐ爾霊山

乃木大将のこの詩によって山の名となった。

話は遡るが中村少将は進軍の途すがらと題し次の歌をのこしている。

みちすがらあだの屍に野の花を
一もと折りて手向けつるかな

この歌は明治天皇の御製

国のためあだなす仇はくだくとも
いつくしむべき事な忘れそ

をうけて詠んだものと思はれる。

第三回攻撃に参加した戦闘員は六万四千、死傷約一万七千だった。旅順攻略の全死傷者は五万九千、それは日露戦争全死傷者の三分の一に近かった。

凱旋感有り　乃木希典

王師百万　強虜を征す
野戦攻城　屍　山を作す
愧づ我何の顔あってか父老に看えん
凱歌今日　幾人か還る

乃木将軍

敗れるべくして敗れたロシヤ軍内部及び国内の実情

一、高級将校の無能と腐敗が著しかった妻子を車輛内に住まわせたり、新鮮なミルクが欲しいとて乳牛を連れているものもあったという。ミシチエンコ中将は営口を砲撃しただけで撤退してしまうのだが、途中で足を怪我して包帯している写真があるが、その後には妻が写っている。妻を戦場に呼びよせるなど、我々の考え及ばぬことである。

黒溝台会戦の第二軍司令官グリツペンベルグ大将は、総司令官クロバトキンの仕打ちに腹を立て、職を投げ出して帰国してしまった。我が国にも第四航空軍司令官の職を放棄して、ルソン島から逃出した富永恭次の如き不規弾はあったが、日露戦争当時そのような者はいなかった。

二、第一線の指揮官にもひどい者がいたらしい。ロシヤ国内の自由主義者によって発行された「オスヴオボジエーニェ」（解放の意味）誌の一九〇四年九月号によれば〝今回の戦争で最も驚くべきことは将校の腐敗である。その欠点として指摘される点は多いが、なかでもその臆病な振舞は目に余るものがある。日本軍に遭遇するや、ある将校は前へ前へと号令しながら自分は物蔭にかくれて出ないので、憤慨した兵士がその場で斬りすてたという例が二、三にとどまらない。将校でありながら、わずかに擦り傷を受けたぐらいですぐに戦列を離れ後送されることを願い出る。軍医に聞くと包帯を巻くにも気恥かしくて巻けないような傷もある。〟彼等は本国にいて示威運動を弾圧する時には、学生や労働者に対して極めて勇敢であるが、戦場で敵軍と交戦するとなるとこのような具合になる〟ときめつけている。さらに同誌はロシヤ軍の無統制、無計画、将校の無能さを攻撃し誰もこれを組織ある軍隊ということは出来ない、と述べている。

またイギリスの「タイムス」紙上である軍事評論家は、ロシヤ軍上級指揮官の作戦の拙劣について、初歩的原則も理解していないと、酷評している。

そしてこれらの無能、腐敗は偶然的のものではなく、国家体勢の腐朽によるものである。レーニンは言った、「文武の官僚は農奴制度の時代と全く同じで寄生虫的である。将校は無教育で未熟で、訓練を欠き、兵士との緊密な結びつきをもたず、彼等の信頼を得ていない」。（以上二項目に書いたことは山川出版社のロシア史に拠る）

三、ロシヤの庶民は当時日本ほど義務教育が普及しておらなかった。従って字が読めない、勘定ができないという兵隊が少なくなかった。二列横隊でならんでいて、番号をかけ右向け右で四列縦隊を作る時、偶数の者は一歩右前に出て四列になるのだが、ロシヤ兵の中には、いち、に、さん、し、ご、ろく、という番号をかけても、奇数偶数の区別がわからないで四列が作れなかったという。そこで、いち、に、いち、に、という番号をかけた。そんな兵隊にこの戦争の意義などわかる筈がない

「敵より下士官の鞭を恐れさせよ」とは徴兵制を始めた時、ナポレオンが言ったというが、そんな兵で構成された軍隊は強いときは強いが、ひと度崩れると止めどもなくくずれてしまう。ロシヤ軍が正にそれであった。

もう一つロシヤ軍には弱味があったポーランドやフィンランドはロシヤが武力をもって征服した国で、そこからも壮丁を徴集していた。軍内におけるこれらの地域出身者は15％という資料もある。従って満州のロシヤ軍のなかにも多数の異民族兵がいた。これらの兵はツアーに対し反感を抱くことがあっても、忠誠心など持つ筈がない。特に独立の願望の強いポーランド人はロシヤ軍にとって獅子身中の虫だった。欧州にあってロシヤに対し謀略活動を行っていた明石大佐はポーランド独立運動の組織を掌握していたので、満州軍内にあるポーランド人に呼掛けさせた。我が軍が収容した捕虜の数は八万六千百五名という記録があるが、その中に異民族の捕虜がどれほどいたのか、また別の資料では捕虜約七万二千人の内ポーランド人は約四千七百人と記録されているが、そうなると六・七％となるが、外征にはポーランド人を余り使はなかったとも思はれる。

四、一般の民衆にとって、戦争は皇帝の欲望と宮廷勢力の利益の為行はれるものと理解しており、全く人気のない戦争だった。国民の政府、資本家、地主に対する不満や敵意を外に向けるために戦争が必要だった。内相プレーヴエは「革命と戦う秘訣は戦争である」と言ひ、クロバトキン将軍に向い「国家は革命の危険に瀕している。それを阻止することの出来るのは対外的勝利以外にはない」と語ったという。

上層部がこんなだったから、国民の中には自ら身体を傷つけ徴兵を免れようとする者があとを絶たず、バルチック艦隊が本国を出ようとするとき、水兵が自傷により入院するという事件がいくつもあった。（以上の記事も出所は第二項と同じ）

大西中将の遺書について

講師　門司　親徳
（元第一航空艦隊副官）

演題につきましては、貴田さんとご相談の結果、私が海軍の最後の頃お仕えした大西長官の遺書のことについて述べさせて戴くことにいたしました。

大西中将は昭和十九年十月第一航空艦隊長官に補せられて比島に着任されたのでありますが、それはいわゆる捷一号作戦の始まる直前でありまして、栗田艦隊がレイテ湾に突入するという直前のことでありました。比島の航空兵力が少なくて悩んだ結果特攻隊を出すことになり、特攻隊の生みの親といわれているのはご承知の通りでございます。その後比島の航空戦が終わりを告げる頃、昭和二十年の一月初め、一万五千人もいるクラークフィールドの地上員と一緒に山籠もりをする、複郭陣地を作って抗戦するつもりでおられたのですが、命令が参りまして、後髪をひかれる思いで台湾に転出されました。そして台湾で四月に沖縄に対する特攻隊を続け、五月中旬に軍令部次長になって内地に帰られ、そして徹底抗戦を唱えられて終戦の翌日自刃されましたことは、ご承知かと思います。

大西中将の遺書

私は台湾から転勤される長官について内地に参りまして、宮中に参内するまでお供して、再び台湾に帰りましたので、大西さんの最後の三ヵ月の様子は傍で見ていた訳ではありません。しかし終戦後長官の残された遺書とか辞世の句とか奥さん宛の遺言などを繰り返し読んでいる内に、大西さんの真意はどういうことであったのかということについて、いろいろ疑問と興味を持つようになりました。それで本日はこの遺書について、遺書を手がかりにして、大西さんの真意について考えましたことの一端をお話してみたいと思う次第でございます。

それでは遺書を読んでみましょう。

遺　書

特攻隊の英霊に曰す
善く戦ひたり深謝す
最後の勝利を信じつつ肉彈として散華せり然れ共其の信念は遂に達成し得ざるに至れり吾死を以て舊部下の英靈と其の遺族に謝せんとす
次に一般青壯年に告ぐ
我が死にして軽擧は利敵行爲なるを思ひ聖旨に副ひ奉り自重忍苦するの誠ともならば幸なり
隠忍するとも日本人たるの衿持を失ふ勿れ
諸子は國の寶なり　平時に處し猶ほ克く特攻精神を堅持し日本民族の福祉と世界人類の和平の爲最善を盡せよ

海軍中將　大西瀧治郎

そしてこの遺書は封筒に入っており、その封筒には「八月十六日　〇二四五　自刃ス」と書いてあります。

さてそこで最初に私が疑問に思いましたのは、徹底抗戦をぎりぎりまで強烈に叫んでおられた大西さんが書いた遺書としては、誠にこの遺書は冷静であるという風に考えられることであります。

最初の部分は特攻隊に対する、或いはその遺族に対する謝罪の言葉であり、いわば大西さんとしては最初に言いたかったことだろうと思います。

また大西中将は、特攻隊のほかに、クラークフィールドに残してきた一万五千人の地上員のことを忘れることが

靖国神社遊就館展示

できなかったと思います。遺書のなかには触れて居ませんが、台湾に出てからのち、落下傘でクラークに降りたいと冗談めかして言っておられました。一度はピナッポ山麓で地上員と共に死ぬつもりで居られたのです。ピナッポ山麓で戦死した一万数千の地上員のことも、中将の自決する気持ちの中にあったと私は思っています。

中程の文章は、自分は徹底抗戦を先頭切って述べてきたけれども、もはや聖旨に副い奉って和平に応じなさいということが書いてありまして、この軽挙という意味は徹底抗戦を続けるという意味もありますし、特攻隊の責任は自分だけでよい、司令とか飛行長は責任を持って自刃するような、自決するようなことは考えなくてもよい、という意味も含んでいるかと思われます。

そして最後に隠忍するとも日本人たるの矜持を失う勿れということと、特攻隊員は身を捨ててくれた国の宝であり、自己犠牲の現れでありますが、平時においてその自己犠牲の特攻精神を以って日本民族の福祉と世界人類の和平のために尽くせと、残った若者に後事を託しているという訳であります。

極めて冷静であり、行き届いた遺書でありまして、この三つの①特攻隊に対する謝罪と、②抗戦はしたいけれども聖旨に副って抗戦は止めよう、しかし③日本人としての矜持を失わないで特攻精神を平時においても持ち続けて世界と日本の平和のために尽くせということでありますから、いわばこの遺書は第二次世界大戦の終わりのころの三つの事項を象徴しているような見事な後世に残すべき遺書であると私は考えておる次第であります。

キョウジのキョウはどう書くか

この遺書の中の日本人たるのキョウジというキョウの字が衣偏になっておりますのはお気づきかと思いますけれども、間違っておりまして、本当は衣偏ではなくて矛偏が正しい字であります。そのことにつきまして一寸興味あるエピソードがありますのでご紹介いたします。それは阿川弘之さんのお書きになった『米内光政』という本がある訳ですが、その下巻の終戦の日の出来事として書いてあるところに次のような文章があります。

米内大臣の後任秘書官古川勇少佐は、目黒の雅叙園（当時海軍病院分院）に入院中の多田次官のところへ書類を届けに行って、大西軍令部次長に出会った。この一週間ばかり、物の怪に取り憑かれたようだった大西が、すっかりもう、吹っ切れた穏やかな顔をしていた。この分なら大丈夫だろう、気持に余裕が出来て親友の多田中将を見舞いに来ておられるんだろうと思った古川に、

「おい、古川秘書官。日本人としてのキョウジという時のキョウの字はどう書くんだったかな」

と、大西が妙なことを聞いた。古川は頭に浮んだ字を教えたが、あとで間違いと気づき気になった。その晩（十六日未明）大西中将は自刃した。遺書の後段に「日本人たるの衿持を失ふ勿れ」とあって「矜」が古川少佐の数えたのとも違う誤字になっていた。

つまり終戦の日の午後、同期生であり次官をやっておられた多田中将が入院していた病院に見舞いに行って、たまたまそこにいた古川さんにキョウジのキョウの字を質問したということを書いてある訳であります。阿川さんに話を聞いてみましたところ、阿川さんは「米内光政」を書くにあたって、古川さんに会ってこういうエピソードを聞いたのでその通りあの小説の中に書いた、というお話でありました。

そこで気になることは、というか興味のあることは、大西中将は既にその時遺書を書いてあって、それでキョウジという言葉を使ったけれども、書いたけれども、どうも間違っているような気がして気になるということで古川少佐に尋ねたのか、或いはこれからあと自決する前に遺書を書くのだけれども、その時日本人たるのキョウジという言葉を使いたいけれどもどうもキョウの字というのがはっきりしないので、古川さんに教えて貰うような質問をしたということなのか、どっちなのだろうかということになる訳であります。これは考えようによっては阿川さんがこういうことを書いて下さったので一つの示唆に当たる訳で、遺書をもはや書いてあったという方が普通考えられることではないだろうか。これから書く字について、殊にキョウジという余り使い慣れないような言葉をこれから書く場合に質問するのかどうか、そう考えてみますと、どうも既に遺書は書かれていたのではないかという風に私には思えてならない訳であります。皆さんはどうお考えになりますでしょうか、一つ考えてみて戴いたらと思います。

私が何故この遺書が十六日なのかそれ以前なのかということにこだわりますのは、私は大西長官には大西長官の一つの考えがおありになって、そして行動されていたのではないかという風に思うからであります。

注目すべき三度の訓示

比島から台湾にかけて長官が出かけられる時には何時も随行しておりましたが、長官は三度注目すべき訓示をされたという風に思っております。

最初の訓示はいうまでもなく、昭和十九年十月二十日、関大尉の最初の神風特別攻撃隊を編成された時に集まった二十数名の体当たり隊と直掩隊に対する訓示であります。これはいろんな本にも書いてありますし、特に申し上げなくても良いかと思いますが、何れにしても最初の体当たり命令でありますから、長官も悲痛な顔で命名訓示をされ、一人一人に長い時間をかけて握手されておりました。この時は栗田艦隊掩護のための、いわば限定的な小規模な特攻隊の編成でありました。

次の二回目の注目すべき訓示というかお話は、敷島隊が成功した十月二十五日の夕方のことであります。この時大西長官は、応援のために台湾から比島へ進出してきた福留さんとお話し合いをされて、二航艦も通常攻撃から特攻攻撃をやるということに福留長官の賛同を得て、それでマニラからクラークフィールドに夕方出かけられました。そしてクラークの一軒の七六一空の本部に一航艦、二航艦の飛行隊長以上の士官を集めて、そこで敷島隊が大きな戦果をあげたことと、レイテ作戦で水上艦隊が大きな打撃を受け、もはや今後の戦争は特攻作戦より外はないと自分は考えるので、航空隊、飛行機による体当たり攻撃は続行する、或いはもっと言えば拡大して特攻中心にいくより外仕方がないと思うという、訓示というか宣言をされました。これが第二回目の注目すべき発言であったと思います。

第三回目は年が変わって台湾に転進されてから後、二月末から三月初めにかけて沖縄作戦が始まるまだ前の段階でありますが、各基地を廻って基地の連中並びに特攻隊の隊員がいる基地ではその隊員達に向って訓示をされましたが、その内容はもはや単なる特攻作戦の話ではなくて、徹底抗戦の話でありました。つまり航空機による特攻作戦どころではなくて、極端にいえば国民総特攻というような徹底抗戦の覚悟をしなければいけないという話でありました。とにかく機会があれば敵を殺せ、敵を殺せということを繰り返し述べられて、特攻隊員の人たちには、君達は上手く体当たりをすれば一人で何十人或いは何百人の敵兵を殺すことができる飛行機という貴重な道具を預けられているのだから、飛行機を大切にしなければいけないのはもちろんであるが、君達自身もそれまでは大事な身体であるというようなことを、各基地に言って廻られました。今までに日本のあちこちの孤島では皆玉砕している。それが内地に敵が来たからといって降参する、降伏するということは不公平であると、そういう意味の強烈な徹底抗戦論を台湾中に話して歩かれました。

徹底抗戦論は米国へのメッセージ

私は戦後になって考えたのでありますけれども、これは日本の人達にもちろん言っている訳でありますけれども、アメリカに対するメッセージではなかったかという風に思うようになりました。つまり内地にはどれだけ特攻隊員がまだ残っているか判らない。仮に上陸してきても皆玉砕するまで抗戦する。そうすれば連合軍の本土決戦に当たっての被害は甚大なものになる。そういうようなことを、徹底抗戦を述べ続けることによって、連合軍に知らせて、そして連合軍の方から本土決戦の前に何か和平或いは戦争終結の機会が出てくるのではないかと、そういう期待を長官は持たれたのではないかと思う訳であります。

あとで海幕長になられた五十四期の中山（定義）さんの回想録の中にこういう話がありました。

大西さんが台湾から内地に帰って軍令部次長になってからあと、予備役になった海軍出身の代議士の方達のグループに招かれて、その席に中山さんが陪席したことがあったそうですが、その席上で某氏が「お前は多勢の若者達を体当たりさせておめおめ帰ってきたのか」という話が出たそうであります。その時大西さんはしばらく考えた後に「自分は亡くなった特攻隊員達を生かすために帰ってきたのだ」という風に答えて納得させたという風なことが書いてあります。一寸説明不足でありますけれども、あとで中山さんに伺いましたらば、大西長官はやはり特攻隊を、あらゆる特攻を盾にして本土決戦に備えて抗戦論を唱えれば、必ず連合軍の方から何か反応がある筈だというような説明をされて、納得されたのだという風に伺いました。

大西さんは若い頃、足掛け三年英仏両国で航空術を習ってこられた訳であり、帰りにアメリカを経由して帰ってこられましたが、アングロサクソンと戦争すべきではないということを言っておられたという証言がありますし、またアメリカでは人命を非常に大事にするから、多くの人を殺傷すれば必ず

反戦論か何かが起こって軍隊にも影響してくると、台湾の訓示の中でも述べられておりました。

以上は私の勝手な推論も随分入っておる訳でありますが、結局七月下旬にポツダム宣言が発せられて、その第一条にはご承知と思いますけれども、「連合三国は日本に和平の機会を与える」という第一条の文章になったのだろうと思います。

富岡少将への添え書き

次に遺書の欄外に書いてある富岡少将宛の添え書きについて触れてみたいと思います。不思議なことには、遺書の本文には末尾に八月十六日と書いてないのにかかわらず、この添え書きにはわざわざ「八月十六日　大西中将」と書いてあって

富岡海軍少將閣下
御補佐に対し深謝す
總長閣下に御詫申上げられ度し
別紙遺書青年將兵指導上の一助と
もならば御利用ありたし

と細い筆で書いてあります。

富岡少将は軍令部第一部長であり大西次長の次の方でありますから、その富岡さんに後事を託するという意味でこの添え書きが書いてある訳です。

総長閣下に御詫び申し上げられたということは、抗戦論を強硬に唱えて豊田総長を後ろから押しまくったというようなこともあるようですし、総長の意に背いて若干勝手な行動をしたというようなこともあったようなので、富岡さんを通じて御詫び申し上げられたしという風に書いたのだと思います。

そして最後に別紙遺書青年将兵指導上の一助ともならば御利用ありたしという意味は、抗戦論の人たちにこの遺書を見せて、この遺書を利用して、先頭に立って抗戦論を唱えたが、自分は死ぬからもう抗戦はやめろという意味のことを述べておられるのと、更に一番最後に書いてある、平時における特攻隊の精神を忘れずに隠忍自重して日本と世界の平和のために尽くしてくれということも伝えてくれ、ということを言い残したかったのだと思います。

私は台湾で終戦を迎えたのでありますけれども、富岡少将が手を打ったせいか、台湾の新聞にはすぐこの遺書が掲載されて、皆が読みました。大西さんにいわれた通り、富岡さんが各新聞に手を打ったのではないかと想像されます。

さて次に申し上げておきたいのは、遺書の入っていた封筒には「遺書」とあって、その横に「八月十六日　〇二四五　自刃ス」とありますが、この字は、靖国神社の説によりますと、大西さんが書かれたものではないようだという風に言っておられます。

自決される人が「八月十六日」はともかくとして、自分が自刃する前に「〇二四五　自刃ス」という風に遺書の封筒に書くのは一寸不思議だと思っていましたが、靖国神社ではこの遺書が飾ってありますけれども、この「八月十六日〇二四五　自刃ス」というのは後の人が付け加えたのだという風に解釈しておられます。

夫人への遺言

次に奥さん当ての遺言というか遺書でありますが、これを読んでみます。

瀧治郎より
淑惠殿へ
吾亡き後に處する參考として書き遺す事次乃如し
一、家系其の他家事一切は淑惠の所信に一任す
淑惠を全幅信頼するものなるを以て近親者は同人の意志を尊重するを要す
二、安逸を貪ることなく世乃爲人の爲につくし天壽を全くせよ
三、大西本家との親睦を保續せよ但し必ずしも大西の家系より後繼者を入るる要なし
以上
之でよし百萬年の假寢かな

この奥さん宛の遺書は、お子さんがなかったのと、大西さんは丹波の生まれでありますけれども奥さんは東京の生まれであって、その辺親戚としては遠方にある訳でありますから、長官は少し気にしてこういう遺書を書かれたのだと思います。

長官は晩婚で三十八歳で結婚されておりますが、奥さんはいかにも江戸の下町育ちのようなさっぱりした庶民的な方で、長官夫人というような印象を与えない方でありました。

この遺言の通り戦後慰霊祭にも出て、兵隊さんとも仲良くつきあって本当に皆から親しまれておりました。大西長官は自刃されたので、特攻隊の一人という風に特攻隊の生き残りも遺族の方達も思ったようで、長官夫人もそのような感じで、本当に母親みたいな感じを出してつきあっておられました。昭和五十三年に七十七歳でお亡くなりになりました。

さてこの遺書には封筒にも遺書にも

日付が入っておりません。これは間違いなく自決する直前ではなくて、もっと前に書かれたのだと思います。そして奥さん宛のこの遺書の最後に次の辞世の句が書いてあるのです。

「之でよし百萬年の假寝かな」とは？

そこで問題はこの辞世の句でありますけれども、「之でよし百萬年の假寝かな」という句の「百萬年の假寝」というのは死ぬことでありますからそれはよいのですが、「之でよし」というのはどういうことなのか。奥さん宛の遺書を書き終わって私的なことはもうここに書き置いたから「之でよし」ということなのか、戦争が終わって和平がきたので「之でよし」なのか、いろいろと考え方が違ってくると思うのです。小さく考えれば、奥さん宛の処置が終わったから「之でよし」、これで自分は自決するよという辞世の句になる訳ですが、それでは小さすぎて勿体無いような気がしていろいろと考えてみたのですが、「百萬年の假寝かな」いうのは死ぬことであり自決するということであります、自決するということは戦争に決着がついたから自決するということであって、やはり和平なら和平がきた、或は陛下の聖断が下った、そういうようなことで戦争が終ったので、自分は自決するということから考えますと、やはり「之でよし」というのは個人的なことではなくて、何らかの決着がついたということで「之でよし」という言葉がある、大きい意味の「之でよし」という風に考えて良いのではないかという風に私は考えることにいたしました。戦争に決着がついて、もう若者を死なせることはないということで「之でよし百萬年の假寝かな」という風にとって然るべきではないかと私は考えておる訳であります。

辞世の句はもう一つあって

すがすがし　暴風のあとに　月清し
爲淑惠殿　瀧治郎

とあります。

これは自決される直前に書かれたものであるという風に考えられます。というのは自決を知らされて駆けつけた児玉誉士夫さんが、その回想記の中で、この辞世の句が柱に貼ってあって、大西長官が苦しい息のなかで「あの句は良いだろう」という風に言われたという風なことを書いておられますので、先ず当日書かれたのは間違いないと思います。

終わりに

以上で大西長官の遺書及び辞世の句についてはすべて触れましたので、私のお話は一応終わりますが、大西中将の言動については、私は大西贔屓でありますので、少し偏り過ぎているところがあったり間違いがあったりするかもしれませんが、私は五年間海軍におり、八十五年間生きて参りましたけれども、大西長官にお仕えした七ヵ月は非常に重たい貴重な七ヵ月でありまして、大西長官を何時も忘れることができませんので、どうしても大西贔屓になってしまいます。

今から三年前、二〇〇〇年の八月十六日に、この大西長官の遺書と「之でよし百萬年の假寝かな」という辞世の句を長官の筆跡通り石に彫りまして、鶴見総持寺の大西長官のお墓の傍に建てることができました。これはもちろん有志の方がおられた訳でありますけれども、丁度その頃総持寺の貫首さんが七十六期の板橋興宗さんであられたので、板橋さんのお世話になって作ることができました。二〇〇〇年八月十六日の御命日に除幕式ができたのですけれども、七十六期や航空関係その他の方々が集まって下さいまして立派な除幕式ができ、後世に残したいと思った長官の筆跡通りの遺書の碑ができたのを有り難く思っております。

ついでに言えば、矜持のキョウの字は間違いのまま彫るべきか、直すべきかという意見がありましたが、板橋さんに長官の字に似せて正しい字を書いて戴きましたので、遺書の碑には正しい矜持という字が書いてあります。もし川崎・鶴見方面にお出かけの時には、総持寺にお立ち寄りになって見て戴いたら有り難いと存じます。

なお大岡昇平さんの『レイテ戦記』という本は、陸軍のレイテ島の詳細な戦記でありますが、特攻隊のことについて、少し触れています。それを引用しますと、「むろんパイロットは常に死の覚悟が出来ていなければならない。三度は帰還しても四度目には撃墜されるのである。しかし生還の確率ゼロという事態を自ら選ぶことを強いられる時、人は別の一線を越える。質的に違った世界に入るのである。（中略）

想像を絶する精神的苦痛と動揺を乗り越えて目標に達した人間が、われわれの中に居たのである。これは当時の指導者の愚劣と腐敗とはなんの関係もないことである。今日では全く消滅してしまった強い意志が、あの荒廃の中から生まれる余地があったことが、わ

れわれの希望でなければならない……。（中略）」「大西中将は特攻が統率の外道であることを意識していた。部下に死を強いる時に、多くの心のやさしい将官がする決意、自己の死を定めていた。彼は終戦時は軍令部次長で、徹底抗戦を主張し、八月十六日自刃した……。」この大岡さんの文章は、私にとって何よりも好きであり、うれしい言葉であります。

最後になりますけれども、台湾にいる三月末のある日、長官と二人で、長官のお供をして高雄の飛行場近辺を散歩している時に、長官が「俺のことは百年の後にも知己を得ないかもしれないし、棺を蔽うても定まらないかもしれないな」というようなことを独言のように言われました。この言葉はその後私が草柳（大蔵）さんにお話しして、草柳さんが本の中で取り上げたせいもありまして、いろいろな方が何か何時も長官がこんなことを言っておられたような風に書かれてしまいましたけれども、大西さんがしょっちゅうそんなことを言われる筈はないのでありまして、たまたま私と二人の時に独言のようにいわれた言葉であります。私はこの言葉が忘れられないのでありますけれども、今日は長官の話を皆さん方にいたしましたけれども、本当に長官のことを判ってお話したのかな、どうだろうかという風に矢張り思わざるを得ない訳であります。

百年の後に知己を得ない、或いは棺を蔽うて定まらずと長官が自分でいわれた通り、ことによるとなかなか長官の真意あるいは評価などというものは判らないのかもしれませんが、私としては一生懸命で私なりに解釈しようと思って、本日のようなお話を申し上げた次第であります。

それではこれを以て終わりにさせて戴きます。御静聴有り難うございました。

編者註　この記事の出所

銀鷹会（海兵出身で東京大学に学んだ者の会）は年一回総会を開催し、その都度講師を招いて講話をしてもらっており、十五年度の講話の録音を文章化したものが我が協会に寄せられたので、ここに転載した。なお講師の略歴は次のとおり。

昭和十六年　東京大学経済学部卒業
同年　四月　日本興業銀行入行
十六年四月　第六期短期現役主計科士官として中尉任官
ハワイ作戦をはじめ主要作戦に参加
十九年八月　第一航空艦隊副官として大西長官に仕える
二十年終戦　九月主計少佐
二十一年三月　日本興業銀行へ復職、後、取締役
四十五年　丸三証券社長
五十六年　同社相談役
現在　ラバウル会会長

鶴見総持寺の墓所にある

鳥の将に死なんとするやその鳴くや悲し　人の将に死なんとするやその言うことや善し　（論語泰伯篇）

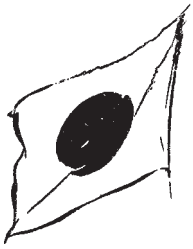
終戦六十年に懐う

会員　金森　明

愛国の炎と燃えて征きし友
　我安閑と年老ゆる今
靖国の桜の下で駄々踏みて
　何事をかと君を弔う
平らかに靖らかにとぞ日の本が
　栄ゆる事を只祈るのみ

百雷に打たれし如き敗戦！　打ちひしがれ、よれよれになって帰って来た六十年前、二十才に満たぬ小倅が「俺が守らねば誰が此の山河を守るのか」涙の滴る顔を拭こうともせず、明けても暮れても食糧増産に励んだ六十年。振り返るともはや老境だが、幸にも現役農民の今、細々ながら最後の御奉公の心算で、一日一日を大切に生きさせて頂いているにつけても、故郷を愛し平和の日を希った英霊に報いたい。

今の心境は、「老驥櫪に伏するも志は千里に在り　烈士暮年壮心已まず」今こそ正しい愛国心を呼び醒ます時であると叫びたい。時危くして偉人を念う今日この頃。



特攻に、なぜ日本の若人たちは参加したか

小灘　利春

六十年前の戦争末期、およそ六千人におよぶ日本の若人たちが、空に海に、特攻隊員となって散華していった。彼らはただ命令されるままに前進した魂を持たぬロボットではない。自分自身の判断によって志願し、少なくとも自らの死の意義を納得した上で、それぞれに一つしかない生命を捧げた。これは日本人の歴史の上で無視できない出来事である。

今では、特攻に参加した彼らに、共感どころか理解さえできない日本人が多い。占領軍の指令と統制、また東京裁判による捏造史観に今なお盲従をつづけ、真実を歪曲し、正しく伝えないマスコミ、教育者などがこれまで多すぎた。「強制された」の、「騙された」などと言い出す欠陥・元特攻隊員さえ、後になると現れてきた。それらの影響もあって、戦後久しい今でも特攻を顧みることなく、戦没者を無視、軽蔑する向きさえある。

行動が正しかったか、間違っていたか、是非はその当時の状況に身を置いて判断するのでなければ、正当な評価はできない。

大戦の後段、昭和十九年六月のマリアナ沖海戦で日本海軍の機動部隊が敗北して以来、米軍との質、量ともに隔絶した戦力の差が、目の前に大きく広がってきた。日本の将来は、もはや絶望的であった。

このまま推移すれば我々の国は、国民はどうなるか。連合国軍がやがては日本の本土に上陸し、望みのない悲惨な陸上戦闘に入るであろう。そうなっては、我が陸海軍が如何に勇戦奮闘しようとも、この国土と国民は甚大な損害を蒙むり、国体はもとより民衆の生命、財産も、また歴史も、文化も、伝統も、すべてが破壊し尽くされるであろう。後に現実のものとなった沖縄の惨憺たる陸上戦闘が、間もなく日本の各地で起ころうとしていた。終戦の一年あまり前、われわれはその事態を予測した。

現実の戦場は、日本の艦艇、飛行機は通常の方法では敵に近づくことさえ困難になっていた。戦う手段は、我が身を弾丸に代える特攻しかない。日本本土への上陸を防ぎ止める手段は、もはや「若人一人の命によって敵艦一隻を撃沈する特攻」しか残っていなかった。

そしてこの戦法は、少ない人命の代償で、大きな戦果を挙げることが出来るのである。在来の戦闘方法よりも効果的、かつ効率的でさえあった。ことに、人間魚雷「回天」は一艇で敵の有力艦一隻を轟沈し、戦局を一挙に転換する能力を秘めていた。

やがて父母、家族へ訪れようとする運命は、日本人全体の運命と共通であった。陸上戦闘を目前に控えたこの絶望的な状況にあって、我々の両親、兄弟、姉妹や友人、ひいては国民、国家を護る手段は、われわれ若い者たちが自分の一身を捨てて戦うほかない。これが当時、日本の国が直面していた現実なのである。

軍人である以上、責務として最善を尽くして戦わなければならない。戦争が続くかぎり、国民を護り通さねばならないのである。

特攻は、我々が最も愛するもの、さらには国民全体を救おうとする我々の決意のあらわれであった。それは「大いなるものに命を捧げる愛」の行動である。多くの人々の生命を救う至上の博愛なのである。

特攻は人命の軽視どころか、比類のないほど他に尽くす「人命の尊重」である。

「死にたくて死んだ特攻隊員はいない」のである。「十死零生」というように、特攻隊員にとって死は、使命を遂行した直後に続く不可避な事態であった。自らの死に直面したとき、理性は納得しても、若く健康な青年の肉体は、本能的な烈しい死への拒絶感、嫌悪感を覚えて当然である。それを意識するか、別の抑圧として感じるか、強烈な使命感が圧殺するか、人により様々であろうが、回天の搭乗員たちの場合、困難な専門的技術を体得するまでの長い期間、死に直面しながらも爽やかな日々を過ごし、潜水艦に搭載した回天に乗り込むときも、平常心を保っていた。生死のこのような感情さえも超越し、自分の死を平然と受け入れた。

それは諦観ではない。「われわれが最も大切に思うものに尽くすことの満足感」からであった。

回天の搭乗員たちの出撃前の写真は笑顔のものが多いが、「金剛隊」の出撃搭乗員を中心に隊員たち二七人が集まった写真がこのほど発見された。一同は普段どおりの明るい微笑みを浮かべている。回天隊の第一陣であった菊水隊の潜水艦が帰還したあと、次の金剛隊が出撃する前の昭和十九年十二月中旬の撮影である。写真に入った顔触れの大部分は出撃搭乗員であり、一月十一日の夜明けに、何処で、自分の身が艇とともに爆発、飛散することを既

に承知している。その上での笑顔であった。

この写真に入った搭乗員たちは略全員が出撃し、終戦時生き残った者も一名が自決した。あとも戦後死去して、生存者は私ひとりだけである。

特攻の論議は、「行かせられた」側に立っての苦情、また「特攻を命じた」側の擁護に終始すれば、卑小であろう。当時の若者たちは、自分が今ある日本の状況はどうかを考え、自分はどうあるべきかを判断し、行動を決断した。特攻を自ら志願して突撃した人たちの心情を洞察し、後の世に長く伝えてこそ、真の特攻論議であると考える。

「自分から戦争を仕掛けさえしなければ、いつまでも平和」と思い込んでいる識者?が多い。しかし人類の歴史に見るとおり、多くの善良な国家、民族が滅びた。「勝ったほうが正義」である実例が、今の世にも目の前にある。「戦争は見ない。聞かない。考えない」では、裏目に出ることがある。

「日本には平和憲法がある」というが、侵略者、恫喝者を排除できる十分な機能を持たないで、国家、国民の安全を自力で保つことが出来るのであろうか。「一頁目にお祈りの言葉が書いてあるから、憲法が平和を護ってくれる。平和憲法を死守しよう」というような御仁を、健全な頭脳の持ち主とは誰にも思えない筈である。

「国があっての憲法」である。

平和憲法とは「平和な時期にしか通用しない憲法」という意味であろう。

自尊自衛、自ら護る力と気概のない国は、何か事があれば消えてゆくであろう。将来若し、この国に生存の危機が迫ったとき、国民は如何に対処するであろうか。少なくとも「自ら護る気概を持たぬ国民を、護ってくれる他人はいない」ことは確かである。

元・回天搭乗員、第二回天隊長、
全国回天会々長

第二回天隊出撃壮行式
昭和20年５月　於 光突撃隊本部

前列八名　回天搭乗員
左端 隊長 小灘海軍中尉（六月一日任大尉）
左手前 第二特攻戦隊司令官 長井満少将

金剛隊員中心の集合写真
昭19.12中旬　於 大津島基地

第二回天隊（八丈島出撃）
大津島隊　昭20.４月

付・小灘隊＝第二回天隊＝大津島隊＋光隊

回天特攻・振武隊、轟隊出撃搭乗員
昭和20年５月

付・振武隊（轟隊の前に出撃）残死者が二人はいっている

回天特攻・大津島基地搭乗員
昭和19年12月

世田谷山観音寺の慰霊碑紹介(2)

三、神州不滅特別攻撃隊之碑

世田谷山観音寺の境内、特攻観音堂の向って左にこの碑が建っている。碑文に見る様に今田達夫中尉以下10名の勇士は、昭和20年8月19日不法に進入して来たソ連戦車群に体当り攻撃を敢行、壮烈な最後を遂げられた。

この部隊は仙台陸軍飛行学校で、当時全国の大学の航空部で構成される学生航空連盟の出身者の特別操縦見習士官3期生で編成され、19年9月に満州に移駐した。訓練生は入隊前に既に高練の単独飛行を習得していた。20年4月に全員振武隊を編成、盛大な出陣式を行って出撃した。

神州不滅特別攻撃隊の隊員は、この3期生の教育に当っており、教え子が国の為に命を捧げられたのに我々が生きている訳にはいかぬと、教官達は突入を決意し、敗戦の混雑のなか大虎山の分屯隊から本隊のいる錦県に集合をすべく命令を受けたのに拘わらず、8月19日14時大虎山飛行場を離陸、錦県と反対の北西の方向に飛び立ち、その後の確認は出来なかった。

然しながら命令に違反した行為として、自爆として処理されて取り上げられる事がなかったが、当時の部隊長野村　透少佐（士53期）を中心に顕彰会が結成され、在京の特操一期生の腰塚守正氏（現在一期生会会長）他が力を合わせて行動を開始した。

有志の募金によって先ず顕彰碑が建立され、昭和42年5月5日に除幕式が行われた。その後、遺族会・厚生省と折衝を続けて戦死者としての認定を受けて靖国神社に合祀、ご遺族に年金が給付される様になった。そして特攻観音の胎内に納められている霊名簿にも書き加えられて、33回忌を前にすべてが解決した。

10勇士の出身は、今田中尉は幹部候補生8期、馬場中尉は同9期、岩佐、大倉、谷藤、北島、宮川の各中尉は特操一期、日野、波多野両中尉は航空機乗員養成所、二宮少尉は、64戦隊（加藤隼戦闘隊）の生き残りの勇士であった。

尚戦後判明した処によると、出撃した3期生達は北支と中支で作戦に従事して戦死した2名を除いて、昭和21年に復員した。

以下碑文を記す。碑文中今田　均少尉となっているが、今田達夫の誤りである。

碑　文

第二次世界大戦も昭和二十年八月十五日祖国日本の敗戦と云う結果で終末を遂げたのであるが終戦后の八月十九日午後二時当時満州派遣第一六六七五部隊に所属した今田均少尉以下十名の青年將校が　国敗れて山河なし生きてかひなき生命なら死して護国の鬼たらむと又大切な武器である飛行機をソ連軍に引渡すのを潔しとせず谷藤少尉の如きは結婚間もない新妻朝子夫人を後に乗せて前日二宮准尉の偵察した赤峰附近に進駐し来るソ連戦車群に体当り全員自爆を遂げたもので　その自己犠牲の精神をこそ崇高にして永遠なるものなり　此處に此の壮挙を顕彰する為記念碑を建立し英霊の御魂よ永久に安かれと祈るものなり

陸軍中尉　今田　達夫　広　島
〃　馬場伊与次　山　形
〃　岩佐　輝夫　北海道
〃　大倉　巌　北海道
〃　谷藤　徹夫　青　森
〃　北島　孝次　東　京
〃　宮川　進二　東　京
〃　日野　敏一　兵　庫
〃　波田野五男　広　島
少尉　二宮　清　静　岡

昭和四十二年五月

神州不滅特別攻撃隊顕彰会建之

なお碑文には出ていないが、大倉中尉機には伊予屋旅舘の親戚の女性スミ子さんが加わったという。

谷藤徹夫少尉の見習士官時代
朝子夫人とともに

四、天山隊之碑

神州特別攻撃隊之碑の右、少し奥まった所に天山隊の碑がある。

昭和20年4月6日特攻出撃された、菊水部隊天山隊攻撃第二五一飛行隊嘉戸　乞（イサム）少尉の御両親は、戦後は毎月6日に特攻観音にお詣りに来られる様になった。

観音様の胎内に納められた霊名簿を何時も拝することは出来ないので、父上は息子の頭を撫でる気持ちでお詣り出来る様にと、技術屋であられたので頭部が卵形の供養塔を自ら設計されたそうである。

碑文字は高橋三吉海軍大将の筆による。碑裏面には、昭和三十六年十二月天山隊遺族会建之と刻まれている。

或る日霞浦から息子が帰宅したので好きな物を食べさせたが、一眠りして御馳走様と帰隊したのが最後の別れとなってしまった。父上は、今でも子連れの女性が或る日突然、息子さんの忘れ形見ですよ、と訪ねて来て呉れたら嬉しいのだが、とその胸の内を賢照和尚に明かされたそうである。

碑　文

大東亜戦争末昭和二十年四月六日鹿児島県串良基地進発沖縄周辺に来寇中の敵機動部隊に体当り攻撃を敢行し戦艦五隻空母二隻及艦種不詳三隻を轟沈或は大破し多大の戦果を挙げ全員散華せり

神風特別攻撃隊菊水部隊天山隊員

攻撃第二五一飛行隊海軍少佐　斉藤　録郎
海軍少尉　牧島　治二
〃　田辺　實
〃　高山　要
〃　野田　栄
〃　堤　勉
〃　嘉戸　乞
〃　原　敬治
〃　岡　和夫
〃　太田　末広
〃　高島　知善
〃　豊田　誠

攻撃第二五四飛行隊海軍大尉　熊澤　庸夫
海軍少尉　萩原　武
〃　川添多喜男
海軍大尉　桝見　良雄
海軍少尉　野口　吉正
〃　望月九州男

攻撃第二五六飛行隊海軍少佐　吉岡　久雄
海軍大尉　武下　明
海軍少尉　山口　武雄
海軍大尉　山村英三郎
〃　植島幸次郎
海軍少尉　飛田与四郎
〃　田中　和夫
〃　大倉　由人
〃　河瀬　厚

串良基地天山

串良基地の碑

特攻隊員の心情を偲ぶ

菊水の旗幾度か
　我が陣頭に翻り
今宵限りの上弦の
　月に沈める山波は
命に替える我が祖国
今書き残す一言に
　忠即孝と称えしも
断ち難き思いたらちねの
　公報受けし面影に
余生永かれとただ祈る

人生　僅か五十年
　その半ばにも満たぬとも
後の続くを信ずれば
　心に残るくまもなく
流れる雲に溶け入らむ

満州軍総司令部情報部長
福島安正少将

この人の名前を聞けば、直ぐにシベリヤ横断の福島中佐が念頭にうかぶ。日露戦争時代のことではないが、そのことに触れてみる。

異色の経歴

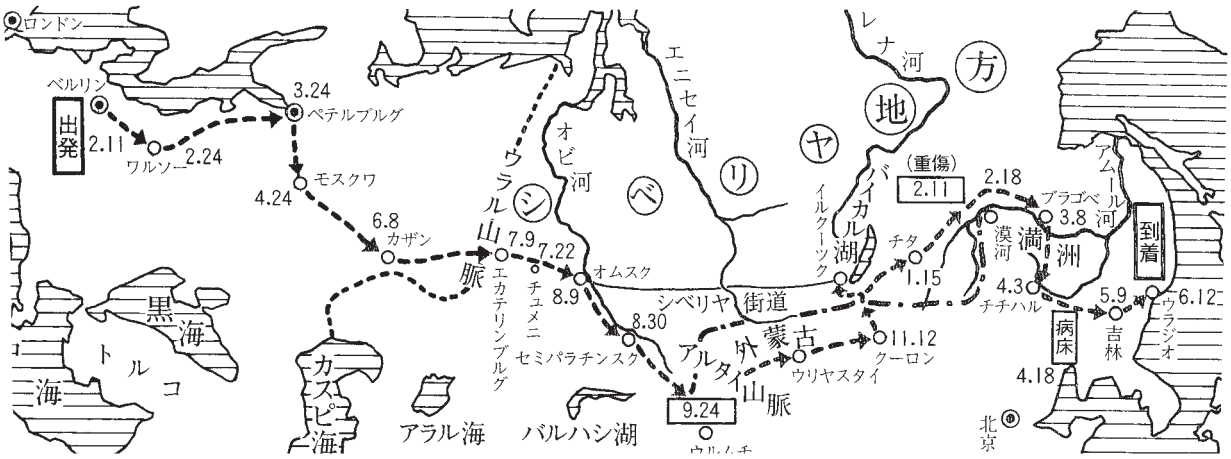
日露戦争当時児玉総参謀長の下にある参謀連中は、全部で十三人おり、十二人は士官学校出身だがこの人だけは違う。

嘉永五年　信濃の松本藩生れ
慶応元年　藩命により江戸留学、
明治元年　帰藩　戊辰戦争参加
二年　藩命により上京　開成校で英語を学ぶ
五年　廃藩置県により学費支給なく苦学
六年　司法省出仕　英語翻訳官
七年　陸軍参謀局出仕
九年　西郷従道一行の米国視察に随行
十年　西南戦争従軍　山県有朋の幕下で活躍
十一年　中尉に任用され参謀本部山県中将の伝令使
十二年　情報収集の為支那に潜入
十六年　大尉に昇進　北京公使館付武官
十七年　内地帰還　籍はどこにあったか不明
十八年　天津条約締結のための伊藤博文大使の随員
十九年　インド、ビルマ偵察
二十年　ドイツ駐在公使館付武官　在欧五年
二十五年　単騎シベリヤ横断出発
三十三年　義和団事件の派遣軍司令官
三十七年　満州軍参謀
四十一年　参謀次長
大正元年　関東都督
三年　大将　退官
八年　死去

総行程一万四千粁、所要日数四八八日の大旅行を、歌と要図をもって偲んでみよう。

波蘭懐古

一、一日二日は晴れたれど
三日四日五日は雨に風
道の悪しきに乗る齣も
踏み煩いぬ野路山路
二、雪こそ降らね冴えかえる
嵐や如何に寒からん
氷こそ張れこのあした
霜こそ置けれこの夕
三、ドイツの国を行き過ぎて
ロシヤの境に入りにしが
寒さはいよよ勝りつつ
降らぬ日もなし雪あられ
四、淋しき里に出でたれば
ここは何処と尋ねしに
聞くも哀れやその昔
亡ぼされたるポーランド
五、かしこに見ゆる城の跡
ここに残れる石の垣
照らす夕日は色寒く
飛ぶも淋しや鷓鴣の影
六、栄枯盛衰世の習
そのことわりは知るれども
かくまで荒るるものとかは
誰かは知らん夢にだも
七、存亡興廃世の習い
そのことわりを疑わん
人は一たび来ても見よ
哀れ果敢なきこの所
八、咲きて栄えし古の
色よ匂いよ今いずこ
花の都のその春も
まこと一時の夢にして



予科練雄飛会（乙飛）慰霊祭

菅原　道熙

平成17年4月4日、予科練雄飛会慰霊祭が正午から靖国神社で行われた。御遺族と、1期生から24期生まで、200余名が参集殿に集い拝殿に進む。

国歌斉唱、修抜、献饌、神官祝詞奏上から、住友会長の祭文奏上へと進む。会長は祭文の中で、他国の干渉に易々諾々と屈することは、亡国の途を辿ることであって、断じてそのような独立国家としての誇りを喪失した行動は取るべきではないと、烈々たる意志を表明された。

同期の桜を全員で合唱して、2梯団に分かれて本殿に昇殿参拝。終って靖国会館前で記念写真の撮影、同会館2階で直会・懇親会に移った。

神社側からは、参列者の年令を考慮して、修抜、祝詞奏上等は着席した侭との申し出があったけれども、好意は謝して全員起立すると、神社側に答えてあるので宜敷く願いたいとの司会者の挨拶があった。雄飛会の雄志壮なりである。

当時は曇天、真冬並の寒風が拝殿を吹き抜けて、御高令の御遺族にとっては、大変辛かったであろうと察せられた。

3月31日に開花宣言された基準の桜は当日は二分咲きであった。靖国通りの街路樹の中には、七分咲きになっているものも見受けられた。至近距離であっても、微細環境、樹令、樹勢等でこんなに開花状態が異なることを目の当りにして、教えられることの多い雄飛会慰霊祭への参加であった。

第14回震洋会慰霊祭に参列して（17・3・26）

特攻戦没者慰霊平和祈念協会
理事　藤田　幸生

3月26日（土）に靖国神社で執り行われた第14回目の震洋会（上田恵之助会長）慰霊祭に、協会を代表して参列し、散華された御霊に対し、慎んで哀悼の意と心からの感謝の誠を捧げてまいりました。当日は、桜はまだ蕾でしたが、うららかな好天に恵まれました。集会は12時30分でしたが、少し早めに受付に参りました。既に元特攻隊員、同期生とお見受けされる方々が沢山集まっておられました。お元気そうな80歳過ぎぐらいの方たちです。全国から150人余参集されました。海兵、予備学生出身者も居られましたが、予科練出身の方が多かったようです。あちらこちらにグループを作って再会を喜び合っておられました。意外だったのは、ご遺族とお見受けできる方が少なかったことです。意気軒昂で、まだまだ「自分たちで行事を続けていこう。」という気持ちが満ちているように感じました。新しい参集殿で、黒木豊幹事長説明の後、本殿において慰霊祭が行われました。神職による祝詞奏上、新井志朗顧問による祭文奏上に続き、「海ゆかば」を献歌、ラッパ吹奏1350に慰霊祭は終了しました。引き続いて行われた靖国会館での直会において、私は「初めて、この慰霊祭に参列させていただきました。私は現役のとき、今も住んでおります館山で勤務中、ご縁があって、偶然この震洋特攻隊のご遺族で秋吉美也子様という方とお会いしたことがあります。そして、秘密特攻の無念さなど、いろいろとお話を伺い、館山坂田に今も残っている格納壕などを知りました。私には、皆様のように具体的な体験はありません。これからこの特攻隊の皆様に対して抱いている想いだけを胸に、特攻戦没者の慰霊と顕彰、平和創造と維持のための努力を、微力ながらしていきたいと思っております。今後とも、お話などを聞かせていただき、ご指導の程をよろしくお願い申し上げます」とご挨拶申し上げました。

来年も3月最終土曜日に、靖国神社で震洋会の慰霊祭が行われます。

私は、昭和17年生まれで、遺族でも戦友でもありません。戦後育ちの自衛隊出身者であります。海上自衛隊退職後、OBとして過ごしております間に、水交会の方から、「特攻隊の慰霊顕彰を続けていくために、関係者の方々が、若い自衛隊OBの入会を希望しておられる。誰か入ってくれないか。」というお話を伺いました。私には特攻に関して、現役のときから今までに数々の出逢いがありました。「特攻隊のこと」は、日本民族として、これからも長い将来にわたって、正しく語り伝えていかなければならない大切なことだと思っております。従って、このお話をお受けすることにいたしました。理事としての最初のお役目についてご報告いたしました。

お知らせ

理事会

一、大東亜戦争全戦没者慰霊団体協議会（慰霊協）の発足

瀬島当協会名誉会長が発議された、大東亜戦争全戦没者慰霊団体協議会の創立総会が、2月4日に開催されて五月に三笠宮崇仁親王殿下を名誉総裁に戴いて、正式発足する運びになりました。

当協会は、昨年12月7日の理事会で平成17年事業の一つに、慰霊協に参加し積極的協力と支援を行うことを組入れてあります（本誌62号、39頁）

設立趣旨は、「先の大戦が終結して60年の歳月が経過し、この戦を経験した者の多くが他界し、老令化するに至っていることを憂慮し、全戦没者に対する慰霊事業の永続を図り、国民道義を振興する為に、戦没者慰霊諸団体が相携え世情に即した慰霊・顕彰を大同団結して継承して行く」ことであります。

当協会は趣旨には全面的に賛成で、小職が慰霊協の理事に栗原常務理事が評議員に就任して協力関係を密にして行くことになります。

慰霊協は8月10日に三笠宮殿下ご臨席のもと、靖国神社で終戦60周年の慰霊祭を行って、発会のお披露目を行うことになっています。

慰霊協の会長には、瀬島当会名誉会長が就任されます。

二、会員動向

平成16年度中の新入会員は一、三四七名（その間会員減は232名）で、正味一、一一五名増、平成17年初の会員は三、六六七名となりました。平成15年初に二、四五七名に落ち込んだ時に比して五割増になりました。

平成15年後半から運動を始めて以来の入会者累計は一、七四九名であります。

昨年度入会者の内訳は、陸軍関係761名、海軍関係402名、有志184名で、本年初で有志会員数は、総数の約一割359名に達しました。

より多くの次世代会員が入会されることを期待して、本号に特攻絵葉書（8枚組）を同封致しました。書中見舞なり、何なり機会を捉えて御活用賜りたくお願い申し上げます。

三、フィリピン慰霊旅行

毎年10月25日に行われている、神風特攻隊初発基地慰霊に参加する慰霊旅行を企画致しました。同封ちらしをご検討の上、参加御希望の方は事務局まで御連絡下さい。

東マバラカット飛行場跡の神風特攻記念碑は、平成3年のピナツボ火山の大噴火で完全に埋没し、その上に第2次記念碑が市当局によって建設されていましたが、昨年秋にその第一期工事が完了しています。

平行して西マバラカット飛行場跡に、クラーク市が敷島隊が最初に飛立ったのはこの飛行場であるという記念碑を建て、更に90年代後半に慰霊でマバラカットを訪れた鹿児島の最福寺住職の池口恵観和尚は、現地の人々の行為に感激して、観音立像の寄贈を申し出られて、マバラカット・クラーク両都市の世界平和宣言5周年に当たる一昨年、旧クラーク基地内リリーヒルで、像の除幕式が行われ、これら3地区で毎年10月25日に慰霊法要が行われる様になりました。

新入会員名簿

（平成17年1月1日〜3月31日）

山形 佐藤　衛　**群馬** 杉本京子　**埼玉** 嶋田節子、藤野助太郎　**千葉** 田鍋守、藤田幸生　**東京** 杉田正夫、相野田悟、青池正夫、荒川裕士、市川裕彦、遠藤　薫、大井路雄、小久保金三、岡田昌久、小倉猛夫、小佐野英保、帯川芳正、木島莞太、木島杏果、木島　実、木島祐希、坂本康子、新庄鷹義、富山　隆、内藤王枝、中村　猛、中村秀昭、成本一郎、前囿利治、松山映子、水竹銀子、光安良一、山田　勲　**神奈川** 今野二郎、岩崎淳治、岡上和雄、神奈川偕行会、志賀達也、杉村俊一、八巻明彦、森　力男、八嶋　宏、山村哲也　**福井** 宮下繁一　**山梨** 河内尊治　**長野** 平出　健　**静岡** 遠藤勝男、緒方克徳　**愛知** 三浦正之　**大阪** 小泉朋美、細川實　**兵庫** 石田正規、藤田正利　**山口** 熊野慎也　**徳島** 福原武雄　**福岡** 志波昭弘、田村光圀、福田栄祐、安河内康彦　**佐賀** 深川信夫　**熊本** 古閑カツ子、酒見奎一、袴田和泉、本多睦雄、牧　勝美、美作　博　**大分** 今富一次

会員訃報

北海道 鈴木　繁治殿（16・6）
秋田 鎌田　時蔵殿
福島 加瀬　恒一殿
茨城 重田　豊蔵殿（16・10）
埼玉 森　幹雄殿（16・5）
千葉 鈴木　信之殿（16・　）
東京 栗原　邦浩殿（16・12）
畑野　逸奈殿（16・7）
土田　正人殿（16・9）
池田　健三殿（16・12）
小塚　明殿（　　）
小松　隆夫殿（16・12）
神奈川 藤原　弘道殿（15・10）
富山 嶋田　千里殿（16・7）
石川 八木田喜良殿（16・　）
愛知 今枝　重和殿（16・12）
兵庫 坂東　健治殿（16・6）
福岡 野口　竹夫殿（17・1）
鹿児島 佐田　直忠殿

特攻平和観音堂改修費

寄進者（福岡）川井美保子